
HEAVEN ! ヘヴン ! HEAVEN ! 0 0

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！00

【Nコード】

N4080D

【作者名】

cocconeko

【あらすじ】

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！シリーズの始まりのお話。少女が実在すると噂の聖剣を見に、軽い気持ちで観光気分で王都へ向かうと、そこには毎日毎日、見世物にされて岩に突き刺さったままの、ボロボロの剣があった。彼女は、その剣が無性に気になって、・・・？耳年増幼女とヘタレ青年老人の出会い編です。

酒場（前書き）

あらずじにもありますが、キャルとセインの出会い編です。二人はどのようにして出会い、どうして一緒に旅に出たのかを書いて行きます。

まだH E A V E N！へヴン！H E A V E N！シリーズを読んでいない方でも、このお話から入れます。

初々しい二人を、どうぞよろしく願います。

酒場

薄暗い店内は、仕事帰りの男達で賑わいを見せ、彼らの吐き出す煙草の煙で視界は灰色にくすんでいる。

バーテンダーは景気よくシェイカーを振り、女達がドレスの裾をひらめかせ、金魚のように男達の間を泳ぐ。

街中の片隅によく見られる酒場のひとつだ。

「なあ、お前よお、あの話聞いたか？」

店の壁際で、すっかり酔いが回った、鼻をピエロのように真っ赤に染めた、着古したジャケットを羽織った男が、やっぱり顔を真っ赤に染めたヨレヨレのシャツの男と酒を飲んでいた。

「ああ？何がよ？」

二人は子供の頃からの旧知の仲で、中年も超えて、そろそろ初老に入ろうかという現在でも、時々こうして共に酒場にやって来る間柄だ。

「何がって、アレよ。ほらアレ」

「ああ？アレじゃわからねえよ。はつきり言えよはつきり」

友の、酔っ払って回らなくなった頭とろれつに、少々眉間に皺を寄せ、ブランデーを一口煽る。

「アレってアレだよ。ほら伝説の！」

そこでようやく、幼馴染みは何を言いたいのか合点がいった。

「ああ、聖剣のことか」

「そう！それ！」

言いたい事が伝わって、やけに嬉しそうな友人の顔に、自分も嬉しくなったのか、男はにやりと笑った。

「おう、聞いたさ。発見されたんだってな。大賢者セイロズド」

「そうさ！すげえよなあ！？聖剣だぜ？大賢者さまだぜ？本当に存在してたんだなあ」

「夢みてえな話さ。そんなモンが本気でこの世に存在してたとはよ」

聖剣・大賢者セイロズドといえば、この国の誰しもが、寝物語に幼い頃から聞かされて知っている、伝説の剣だ。

しかし、あくまでそれは御伽噺で、子供心に憧れはしても実在するなどとは思ってもいなかった。

一振りすれば百人をなぎ倒し、剣を手にした者は千の智恵を得、そしてその力で国を手にすることも容易く出来る。

そんな剣が存在し、発見された。

信じがたいこの話は、真実はともかく噂として、人の口から口へと伝わり、徐々に広がりを見せていた。

伝説の聖剣が実在するなどと、信じられない話だ。

だが、誰もが一度は憧れた剣が、この世に実在するのだという夢のような出来事に、心を躍らせない者はいなかった。

「一度は拝んでみてえよなあ？せめて死ぬ前にはよお？」

「まったくだぜ。噂とはいえ、実在するってんなら見てみてえよな」この二人も例に漏れず、憧れの聖剣へと思いを馳せて、酒を酌み交わしながら上機嫌に、つまみに頼んだチーズへと手を伸ばす。

そんな二人のテーブルの側に、人影がぼつりと佇んでいた。

小さなテーブルに片肘を着いて、深く被ったフードからはみ出た金の髪を、ふわりと指で梳く仕草は艶めかしい。

「でもよお、封印されていたはずだろ？どうして今になって出てきたのかねえ？」

「さあなあ。それだって俺たちの知る限りじゃ、御伽噺の範囲さ」

「あの剣の出てくる話はどんな最後だったっけ？」

「たしか、あれだろ？八百年前にこの国を建てた時に王様が授かって、五百年前に力が強大すぎるからって、旅の僧侶が封印したんだよな？」

「お前よく覚えてるなあ」

「毎晩息子に聞かせてやってるんだよ」

「ああ、そうか！お前んとこ何人目だ？！」

「ばっか、おめえ何人目って、末が生まれて六年だぞ？昨日今日生

まねたみてえに言っなよ」

「おお、悪い悪い」

「で、そう言うお前んところはどんなんだよ？一番上はもう年頃だろうが」

酔いに任せて進む話は、お互いの子供の話に移り、二人は機嫌よく笑いあった。

「ねえ、おじ様方？」

急に背後から聞こえた高い声に振り向けば、ふわりとした金髪が目に入った。

「さっきの聖剣の話、もう少し詳しく聞かせて下さない？」

男達は、すぐ側に席を取っていた人物であることに思い至った。

「あ、ああ、聖剣の話かい？そんなもん、お嬢ちゃんだって知ってるだろう？」

「寝物語によく聞く話さ」

男達は場にそぐわない、彼女の容姿に目を奪われる。

相変わらずフードは被ったままだったものの、白い肌は透けるように、唇はふつくらと、赤く熟れたチェリーフルーツのようだ。フードの隙間から隠れ見える、その瞳は深く青い。

場末の酒場にはとても似つかわしくない、冴える様な見事な金の髪は豊かで、ふわりと浮かぶ、朝日に輝く天上の雲を連想させた。

「そうね。私もそこまでは知っているわ。でも」

彼女の瞳が、魅惑的に男達を捕らえた。

「発見されたっていうのは聞いたことがなかったから」

赤い唇の端が、優雅に上がる。

「詳しく聞かせていただきたいのよ？」

惚けて彼女を見つめていた男達は、はっとしてお互いの顔を見やっ

った。

それから、くつくつと笑い出す。

「いや、詳しくったって、俺たちは話に聞いただけさ」

「そうさ。聖なる剣様が、実在したらしい。それしか知らねえぜ？」

「まさか、本当にそんなモンが実在してるわけがねえ」
酒を片手に、男達は大声で笑った。

カチリ

金髪の彼女の手の中から発せられた硬質な音は、男達の笑い声に消されて彼女以外には聞こえない。

次に。

ドドドン！

大音響が店内に響き、喧騒が一気に止んだ。

男達の手に使っていたグラスは砕け、テーブルの上にあったウイスキーのボトルは上半身をなくして、辺りを琥珀色に濡らしていた。

「あら。さっきまでの会話を聞く限りじゃ、確かにそういう風に聞こえるわね。けど、あんたたちが、ここ一帯のブラックレイトを取り仕切ってる連中相手に情報屋をやってる事は調査済みなの」

妖艶に微笑む女の両手には、小さくて白い手に似合わない、黒い鉄の塊が、細い煙を吐いて握られていた。

店内の視線が一斉に彼女に注がれる。

「お、お、おめえ、まさか・・・？」

男達は震え上がった。

ずいぶん前に仕入れた情報の中にあつた、一人の賞金稼ぎの特徴に、目の前の彼女が一致していることに気が付いたからだ。

「ゴ、ゴールドン・ブラッディ・ローズ！」

一つの同じ名前を同時に叫ぶ。

「その名前を知っているの？なら、決定的ね」

先ほどまでの微笑みは消え、彼女の瞳が鋭く光る。

獲物を見つけた猛禽類の目だ。

「人を見た目で判断すると、こういう目に合うのよ？」

輝ける黄金の髪を持ち、狙った賞金首は必ず落とす。

その銃の腕前は超のつく一級品で、称号ともいえる『黄金の血薔薇』という二つ名を持つ賞金稼ぎ。

酒場は急に坩堝と化した。

女達は悲鳴を上げて逃げ惑い、男達は飲んでいた酒もそこそこに、その場に放り出して出口めがけて走り出す。

その最中でも、まるで目的以外のものには興味がないのか、彼女は微動だにせずに、情報屋の男達から視線も銃口も外さない。

「お金なら払うわ。ファイフティ・ファイフティで行きましょう？」

銃を向けておいて、ファイフティ・ファイフティもあったものでは無いが、既に男達に選択権は無い。

こくこくと、何度も首を縦に振る。

何だかんだ言っても妻子がいるのだ。お互いに。

それで無くたって普通は死にたくないものだ。

「いい子ね？」

『黄金の血薔薇』は目を細めて笑った。

旅は道連れ世は情け

朝の光に照らされて、町が活気を取り戻し始める時間。

家々の屋根はつややかさを増し、石畳の道もピカピカと輝く。

「さて。面白い情報も入ったことだし！」

泊まっていた宿屋を出ると、少女は思い切り身体を伸ばした。

小さな身体は、朝の心地好い空気を浴びてぴりぴりと伸び上がる。そのほほえましい様子に、道を行くご婦人方が、くすくすと笑って彼女に手を振った。

「えへへ」

照れくさそうに手を降り返し、少女は傍らの大きな鞆から、ごそごそと地図を取り出した。

「えつと、ディーナに行くには・・・」

ぶつぶつと呟きながら、鞆の底に付いた車輪を、ゴロゴロと鳴らして駅馬車を目指す。

金の髪は、少女が歩くごとにふわふわとして、柔らかそうだ。白い肌に、幼さのまだまだ残る頬の赤みがよく似合う。晴れ渡った日の紺碧の海を思わせる大きな瞳は印象的だ。

あと数年もしたら、きっと誰もが驚くような美女になるだろう。

「様！」

「・・・え？」

「キャロット・ガラム様！」

後ろから聞こえた声に少女は振り向く。

見れば宿泊していた宿屋のカウンターボーイが慌てて走って来る。

「お忘れ物です！」

彼が小さなパスを手にして振っている。

「あ！いけない！」

そのパスを目にして、慌てて少女も走り出す。

「よ、良かった、まだ間に合って・・・」

お互い立ち止まると、ゼイゼイ言いながら、ボーイが少女にパスを差し出した。

「ありがとう、ボーイさん。これが無かったら、私、これから途方に暮れるところだったわ」

「はは、でしょうね・・・」

喜ぶ彼女に、ボーイは苦笑いを返した。

このパスが無かったら、彼女がカウンターに現れて、宿を取りたいと言ったとき、間違いなく追い返していただろう。

少女の差し出したパスを見て驚いたものだ。

賞金稼ぎに与えられる特権を示す、彼らだけのための身分証明書。それをこの小さな少女が持っていたのだから。

ヘッドハンターパス

そう書かれた小さなカードには、彼女の顔写真が張られ、更に堅苦しい印刷された文字でこう書かれていた。

氏名 キャロット・ガラム
性別 女
年齢 8

「・・・くれぐれも、失くさないように気をつけてくださいね」

「えへへ。ありがと」

差し出されたパスを確かめて、大事そうに彼女は鞆の中にしまった。

小さな、十歳にも満たない可愛らしい少女と、賞金稼ぎという物騒な響きは、到底相容れるようには思えないのだが。

少女は人懐こい笑みを浮かべると、世話になった宿屋のボーイに手を振って、再び大きな鞆を引き摺りながら歩き出す。

その少女の後姿を見送って、ボーイはふうっと、肩の力を抜いた。

「昨晚、黄金の血薔薇が酒場に現れたって聞いたけど、あのおちびさんに話してやればよかったかな？」

きつと、ゴールデン・ブラッディ・ローズといったら憧れの対象に違いない。

それにしても賞金首が増えたのなら、この町も物騒になったものだ、と、溜め息をつきながら、彼は仕事に戻るべく、踵を返したのだった。

「だから、人を見た目で判断するなつての」

ボソリと少女が呟いた声は、遠ざかってゆくボーイまで届くことはなかった。

ガラゴロガラゴロ、大きな鞆をお供に、少女は石畳の道を急ぐ。

と、街角から見知ったばかりの顔が二つ、彼女の前に現れた。

「あ」

その声に、二人の男は同時に振り向き。

「あ」

「あ」

彼女の顔を見て同じように声をあげ、同じように固まった。

普通、本人が望まない限りはヘッドハンターパスに呼称や通称は書き加えられない。まして少女は自分の呼称を、パスなんかに掲載して自慢するようなハンターではなかった。

あまり騒がれずにすむ、というのも、理由の一つになっているのだが。

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

「ゴ、ゴ、ゴゴゴゴゴールデン、ブ、ブブブ」

男二人はそろって情けない声をあげ、お互いの身体に抱き付き合った。

実はこの小さな彼女こそが、賞金首から最も恐れられると言われる、ゴールデン・ブラッディ・ローズ。

その人なのだ。

「バケモノか。あたしは」

昨夜、酒場で発砲した相手に向けて、キヤルはボソリと呟いた。
上げた賞金額は過去最高。

優美な微笑みはどんな悪党をも凍りつかせる。
微笑みで人間を凍りつかせられたら、そりゃ楽だわね。

自分の噂を耳にした彼女が、その噂を提供してくれた情報屋にぼやいた台詞だ。

「お助けー！！！」

「命だけはー！！！」

彼女の呟きに、弾けたように叫んで走り去る情報屋二人の後姿を、呆れて見送って、ふう、と、全身から息を吐き出した。

夜にあの酒場について、早朝からこの辺りをうろついていたとなると、もう誰かに自分の情報売ってしまっているのかもしれないと思う。まあ、もうすぐこの町を出てしまうのだから関係はないのだが。

「ごそごそと、一度しまいこんだパスを取り出して睨みつける。

「これが無きゃ、宿の一つも取れないなんて・・・」

忌々しげにパスを見つめ、今度は胸ポケットに突っ込んだ。

駅馬車に乗り込む際にも、切符を買うときに必要なのだ。

保護者のいない、たかだか八歳の子供が旅をするということは、本人が思うより、世間というものが許さないように出来ている。

せっかくの気持ちの良い朝を、しょぼくれた情報屋と一枚のカードによって粉碎されて、ちよつと不機嫌だったが、昨晚仕入れた面白そうな話を思い出し、彼女は気を取り直すことにした。

「伝説の聖剣か。どんなモンなのかしらね？」

その剣があるという、この国の首都、ディーナへ向かうのだ。

自然に足取りは軽くなり、年相応の、少女らしい笑みが、彼女の顔に浮かんだ。

停車場に着くまでには、いつの間にもやら最初の上機嫌が戻り、パスのおかげで順調に乗ることが出来た馬車の中で、がたごと揺られながらディーナへ向かう道のりも、伝説の聖剣とは、きつと煌びや

かで立派で、うつとりしてしまつくらいきれいなのだろうと、あれこれ想像しているうちに、なんだか楽しくなってきた。

「お嬢ちゃんも、聖剣を拝みに行くのかい？」

途中で乗ってきた老婆と仲良くなるうちに、首都へ向かうのだと言つたら、そんなことを聞かれて驚いた。

「そうよ？ひと目でも見るのができたら素敵じゃない？」

「やめときな」

揺れる馬車のなかで、舌も嚙まずに旅人達は器用に会話を楽しんでいる。老婆もその口で、しわ皺の顔に笑顔で手を一振りされた。

「あら、どうして？おばあちゃんも見に行くのじゃないの？」

それを聞いた老婆はかつかと笑う。

「キャラットっていったかい、あんたさん」

「キヤルでいいわ」

「なら、キヤル。あそこはわしの息子も行って来て、散々な目にあつたんだよ」

「散々な目？」

これは男達から仕入れた情報にはなかったことだ。

聖剣を見に行つて、どうしたら散々な目に合うものなのだろうか。「どういつ噂を聞いたか知らないけれどね、あそこは今や物騒なもんさ」

話によれば、聖剣を手に入れようと、様々な所から様々な人々が集まつていて、中には人騒がせな輩もいるのだという。

実は、噂の聖剣を見たいのももちろんだが、ついでに、その人騒がせな連中に混じっているであろう、賞金首が目当てだったりするキヤルだった。

昨晚の情報屋からも、賞金額の手頃な名前を仕入れてある。もちろんタダで。

「わしの息子は、話に聞いた聖剣を見に行つて、腰に護身用の剣を挿してただけで、身ぐるみ剥がされて帰つて来たんだよ」

なるほど、腰に剣をぶら下げていれば、例え護身用であってもそ

ういう連中に目を付けられてしまうのは当たり前前の話だ。この場合、老婆には悪が、素人のくせに長剣なんかを持ち歩いていた息子が不注意だったといえる。

恰好の絡む理由にされるからだ。

物騒なところに行くには、短剣を懷に忍ばせるのが一番いい。

相手に見えない上に、いざとなったらさつくりと。

「あら、それは大変だったわね」

口元を手で覆い、そんなことを思っているとはおくびにも出さず、老婆に向かって、キヤルは笑ってみせた。

「でも、私なら大丈夫よ、おばあちゃん。こんな子供に手を出すよ
うな奴、そんなにいるもんじゃないと思うわ」

世の中実に物騒で、年端も行かない子供だろうが何だろうが、い
ちやもん付ける大馬鹿者は結構いるのだが、それを承知で、キヤル
はそんなことを言った。

「そうかい？」

「そうよ」

老婆は安心したように、にっこりと微笑むと、キヤルの頭を撫で
てくれた。

「お前さん、年のわりにしっかりしていそうだものねえ」

「えへへ。よく言われるわ」

老婆の手の柔らかさに、少女は嬉しそうに笑った。

「おい、お客さん方。ディーナに着いたんだが、降りる奴はいるの
かい？」

御者が、馬車の客席を振り返る。

「ああ、降りるわ」

キヤルが手を上げると、俺も、私もと、ぽつぽつと手が上がった。
聞かなくてもディーナは首都。大概のお客がここで降りると思っ
ていたのに、上がった手は少なかった。

「へえ、今日は結構いるね」

しかし意外に、御者はそう言っていると、器用に手綱を引いて、馬を宿

めながらゆつくりと馬車を停車させた。

「首都なのに、あんまり降りないのね」

馬車から降りながら、切符を集める御者に声をかける。

「聖剣だなんだで、変な奴らが増えちまってさ。買いい物なんかも、ここの連中は、みんな隣町まで足を伸ばすのさ。ディーナに来るのは、お嬢ちゃんみたいな遠方からの観光客とかだね。ま、こっちは距離が長い分、儲かっていいがね」

老婆の言っていた事は本当らしい。

まあ、あの二人の情報屋からふんだくった情報の中には、確かに悪名高い賞金首の名前がいくつかあがっていたから、聖剣の周りが物騒になっているのも頷けるかもしれない。

「気を付けて行くんだよ」

客車から顔を出した老婆と、切符を渡した御者と、両方に同じことを言われて、キヤルはにかつと笑って見せる。

「ありがと。じゃあ、おばあちゃんも元気でね。御者さんも、旅の安全を祈ってるわ」

それぞれに手を振って別れた。

蟻

「・・・さて、と」

キヤルはきよろきよろと、辺りを見回してみる。

馬車が停まった場所は広場であるらしい。

石畳の綺麗な円形の模様に、中央の噴水が映えて綺麗だ。

「とにかく、聖剣の安置されているとかいう場所を、探さなきゃね」と、口に出してみたものの、どうやら探さずとも済むらしい。

「・・・何よ、これ？」

広場の端つこに、デカデカと立てられた看板が、キヤルの目に飛び込んできたからだ。

>伝説の聖剣、大賢者・セインロズドの聖堂はこちら<

ご丁寧に、地図に矢印まで付いている。

「ありがた味も何もあったもんじゃないわね」

呆れて看板をコツコツと叩いてみるが、道に迷わなくて済んだことに変わりはない。

「ま、いいか。この調子だと、道の角という角に案内の看板が出ていそうね」

実際、地図のとおり歩いてみれば、もう既に、道の向こうの角に、何だか矢印の形をした看板が見えた。

「観光地？」

この前訪れた、国宝やら文化財やらの古い建物があちらこちらに点在している町には、やれ、何々はこちら、あれこれはこちらと、道々に看板で道筋が示されていたのを思い出した。

とにかく看板どおり道を進んでゆくと、そんなに苦もなく、聖剣の場所に辿り着いた。

「・・・だから・・・」

脱力感を覚えて、本日二度目の台詞を吐いた。

「何よ？これ！」

ダンドン！

と、足踏みしてみるものの、納得できない状況は変わる事無く。

目の前に広がる光景は、想像以上に観光地のそれだった。

さほど広いとはいえない道の両側に、露店が立ち並び、様々な商品が所狭しと売られている。そしてそれらをあれこれと、これまた見るからに力自慢だけの頭の悪そうな連中が品定めをしているのだ。

ちよつと物騒な観光地。

そんな感じた。

「・・・これじゃあ、おばあちゃんの息子さんくらい、身ぐるみ剥がされちゃうわね」

馬車で知り合った老婆の顔を思い出した。

確かに、素人が剣を腰に刺していたら、良い力モだ。

美味しそうな香りを漂わせる屋台の、その鍋をかき回している頭の禿げた店主からして、既にガラが悪そうである。

とりあえず道を歩いてみる。

道の先には、六角錐のトンがり屋根がちょこんと見える。

青い瓦に覆われた屋根はとても小さいが、何だか派手な装飾が施されている。

「・・・どこで発見されてこんなところに持って来たのか知らないけど」

白い柱に金ぴかの彫刻が目立つその建物が、例の聖剣の安置されている”聖堂”なのだろう。

「・・・やりすぎよねえ？」

誰に言うでもなく、キヤルは一人ごちた。

「これじゃあ、本物かどうかも胡散臭いわね」

何せ伝説のシロモノだ。

発見されただけでも奇跡なのに、この扱いはなんと言うか・・・。
「商売根性丸出しのエセ臭さだわ」

趣味の悪い成金が、持て余した大金をとりあえず使って金持ち度をアピールしてみた、そんな印象ばかりが先立つのは、もうどうしようもない。

「デイナーって、首都のわりに貧乏だったのかしら？」
そう思っても仕方がない。

物騒なのが目立つだけで、見ればやはり普通っぽい人もいる。中には騎士なのか、鎧をまとった者や、何だか立派な服を着た人もいて、あちらこちらから人々が集まっているのは一目瞭然だった。

この人々が落としてゆくお金。すなわち聖剣の噂による経済効果は、いかほどのものなのだろうか。

「ま、あたしには関係ないけどな」

とにかく、噂の剣を見てみたいのは、キヤルもここに集まった人々と一緒。

例の、聖堂、とやらの近づくにつれ、何となく足早になる。

「えーっと」

近づいてみれば人の列。

小さな売店で拝観料を払ってチケットを買わなければならないのかと思つたが、さすがにそれはなかった。

本格的に観光地になっているのなら、それもあるのかも知れないと思つたのだが。

ほっとしながら最後尾に並ぶ。

それでも結構な行列だった。

徐々に近づく聖堂は、遠目に見るよりも更に煌びやかで、間近にすると、豪勢を通り越して滑稽に思える。

聖堂は、六角に造られていた。

六枚の壁と、六本の柱の上にある、六角錐の屋根の青い瓦は、磨かれてぴかぴか光っていたし、その縁を飾る彫刻は、かの聖剣の物語を表してはいたが、どれもできたての感が拭えず、更に金色に塗られてしまっているせいもあって、豪華というよりは、逆に安物っぽい。

白い壁や柱はそれなりに美しかったが、真新しすぎて年代を感じさせないものだから、屋根のゴテゴテした彫刻も相まって、白さだけが際立ってしまい、正直ケバケバしい。

内部に入ってみると、キヤルはもう回りを見るまいと、うつむくことにした。

何せ教会でもないのに、六辺の壁にはステンドグラスを嵌め込まれた窓が一枚ずつあり、夜には明かりが灯されるのか、六角の屋根に合わせて立つ六本の柱のそれぞれに、上の方には妙に繊細に作られた、花の形をした鉄製のガス灯が、真ん中のあたりにはキヤンドルスタンドが立ち、屋根の天辺からはキラキラと、ステンドグラスのカラフルな光を反射させて、それは見事なシャンデリアがぶら下がっていたのだ。

しかし、うつむいてみれば床が目に入ってしまうもので。

「床まで最悪ね」

白い大理石なのはいいが、継ぎ目のところどころに輝石を嵌め込み、何か意味があるのか知れないが、タイルで幾何学模様に彩られた部分がちょこちょこ点在していた。

どうしたら、こうも統一性のない装飾が施せるものなのか。

建築家の顔をぜひ見てみたい。

そんな感想を抱きつつ、ちらりと前を見ると、ようやっと、伝説の聖剣・大賢者セイロズドの側まで来ることが出来ていた。

「これは・・・なんていうか・・・？」

ゴツゴツした大岩に、黒々と錆び付いて、刃もボロボロに欠けてしまっている、かろうじて剣なのだろうと分かるようなシロモノが、その中腹に、突き刺さっていた。

柄があるので、一見黒くてぼろい十字架にも見える。

この、聖堂の派手な外見と、安置されている聖剣のみすばらしい外見の違いは何なのか。

「ギャップのありすぎも甚だしいっていうのかしらね・・・？」

立ち入り禁止の柵はなかったので、もう少し近くで見ようと列が

進むのを大人しく待つ。
と。

前に並んでいた、ちょっと、というか、いかにも腕っ節の強そうな、いかつい男が突然、のしのしと、自分の前に並んでいた中年の男を押しのけて、剣にガツと取り付いた。

「・・・え？」

呆気にとられて見ていれば、男の肩の筋肉が隆起した。

「ふんぬうつ！」

気合一発。

男が精一杯の力で剣を引き抜こうとしているのは、男の顔がみるみるうちに真っ赤になっていくので分かったが、それだけ力を入れているのにもかかわらず、剣はぴくりともしない。

「ふぬうつ！！！！」

もう一度、男が力を込めて引っぱり上げる。

ついには腕が震え始めてしまった。

それでも、この古臭くてボロボロの剣は一向に抜ける気配がない。

「ちいいいっ」

気が済んだのか、男は剣から手を放し、岩から降りた。

相当悔しかったのだろうか。近くにいた見物人の腰から剣を奪い取って、鞘ごと真っ二つに折り曲げてしまった。

「うわ。怪力」

その怪力をして、このボロい剣は抜けなかった。

キヤルは、列から離れてみた。

聖堂の壁に寄り、聖剣から少し離れて見ていると、我もわれもと、次々と力自慢の男達が剣を引き抜こうと奮闘していく。

中には女性や、果ては老人までいる始末だ。

下を向いていたために、人々の行動に気が付かなかったのだ。

手にした者は世界を制す

そんなフレーズを思い出す。

一振りで百人をなぎ倒し、持つ者に千の智恵を与えと言われる伝説の剣。

聖剣・大賢者セインロズド。

目の前のこの剣が、本当に伝説の聖剣なのだとしたら、抜いた者は万の力を得ることになるのだろうか。

キアルはぞつとした。

そんな力を欲しているのだ。ここに集まった人々は。

逃げるように小さな聖堂を後にして、キアルはあの露店の並ぶ街道へとまろび出た。

「・・・宿、探さなきゃ」

思い出したようにポツリと呟き、大きな鞆を引き摺って、ガラゴ口と歩き出す。

「冗談じゃないわ」

あんな頭の悪そうな連中に、剣が抜けるとは思わないが、ああして集まって、次から次へと剣に取り付いてゆく姿は見ていたくなかった。

きれいなお姉さん

近くの出店で、絞りたてのジュースを買って、一気に飲み干す。

「はあ、落ち着いた」

フルーツの優しい甘味と酸味が、原因の分からない、もやもやした気持ちを押し流してくれたように思えた。

グウウウ……。

「あららら」

落ち着いてみると、お腹がすいたのに気が付いた腹の虫が、抗議の声を上げた。

宿も探しておきたいが、ここはまず腹ごしらえが先のようなだ。

ゴロゴロ靴を引きずって、適当な喫茶店に入る。

と、目に付いたのは、煌びやかな衣装をまとった貴族風の馬鹿だった。

貴族風であって、本物の貴族でないのは、雰囲気では分かりだ。

なにせ、巻いた金髪は変だったし、物腰はいくらなんでも高貴の出とは言いがたい。刺繍やレースで飾り付けられた衣装も、なんだか変なデザインだった。

「あゝあ。こんなところにあんな服着て来ちゃ、カモにされるだけよ」

向こうも入ってきたばかりだったらしく、少々店内を見回して、カウンターに陣取った。

取り巻きだろうか。すらりと綺麗な姿勢の際立つ、黒髪の細身の女性と、ごつごつした筋肉質の、極端に短足で不格好な男が、貴族風の男の両脇に控えるように座った。

「ダサ」

見れば見るほど悪趣味な三人組を、こっそりと厳しく評価して、適当なテーブルに座る。

「いらっしゃいませ」

すぐに、にっこりと、優しそうな笑顔を向けて、ウイトレスが水とメニューを持ってきてくれた。

亜麻色の長い髪を後ろで一まとめに束ね、白い肌に綺麗な弧を描いた眉の下には、これまた綺麗な濃いアンバー色の瞳と、キヤル好みの美人だ。優しく、にっこりと微笑んでくれた。

ウエイトレス、といっても、この店の娘なのだろう。

ジーンズにＴシャツ、その上にエプロン、といった格好で、古ぼけた小さな、そういった店特有の、粹な雰囲気にとってもよく似合っていた。

礼を言つてメニューを受け取り、オムライスとオレンジジュースを注文する。

しばらくすると、先程のウエイトレスが、イチゴのパフェを目の前に差し出した。

「あれ？私、頼んでないわよ？」

間違つてしまったのかと、キヤルがウエイトレスを見上げると、彼女は今度はいかにも営業スマイルといった表情で、先程よりもくらか硬く、にっこりと微笑んだ。

「あちらのお客様からです」

彼女の指した方を見やれば、先程の派手な服の三人組みだった。

真ん中の、あの男が、こちらへ軽く手を振った。

「良く分からないんだけど」

キヤルは視線をウエイトレスへ戻して、ぽそつと言った。

「・・・？お知り合いの方ではないのですか？」

「ぜんっぜん知らないわ」

不思議そうなウエイトレスに、キヤルは首を思いつきりぶんぶんと振ってアピールした。

「悪いんだけど、私、知らない人から物を貰っちゃいけませんって、お母さんに言われているの。だから、これ、受け取れないわ」

いかにもごめんなさい、といった風に、キヤルはパフェをウエイトレスに差し返した。

すると、ウェイトレスはちょっと考えてから、パフェをキヤルの前に置き、最初に見せてくれた優しい笑顔で、キヤルの頭を撫でてくれた。

「じゃあ、これは私からのオゴリ、ということ。お店からのサービスなら、食べてもかまわないでしょう？」

「本当？ありがと！」

キヤルもそれに、にっこりと笑って応えた。

その様子を見ていた派手な男は、大仰に肩をすくめて、首を振ってみせた。

他のお客の注文を取ってカウンターの中に戻るウェイトレスにしっかりと話しかけたり、ウインクをしてみせたりしている。

どうやらこの看板娘に言い寄っているらしいのだが、いかんせん、彼女の方がまったく乗り気ではないようだ。

というより、嫌っている、と言った方が正しいのかもしれない。

まあ、あんな格好なのだから当たり前だ。ど派手で似合わない格好をしておいて、女性に好かれようなど、勘違いも甚だしい。

それで、男がどういうわけだかキヤルにパフェを奢ろうとしたものだから、知り合いなのだと勘違いされてしまったのだろう。

「あの笑顔の差はそういうことね」

ふう、と溜め息をついて、キヤルは鞆の中からごそごそと、地図やこの町のガイドブックを取り出して、宿屋をチェックし始める。

「お待たせいたしました」

声に顔を上げれば、ウェイトレスがオムライスとオレンジジュースを手際よく目の前に並べてくれる。

「おいしそう！」

お腹がすいていたのも手伝って、思わず出た言葉に、くすりと笑われる。えへ、と舌を出して、キヤルはオムライスにスプーンを突き立てた。

相変わらず絡んでくる男を上手くあしらいながら、彼女はてきぱきと仕事をこなしていく。

が、大概男もしつこい。

「しつこい男は嫌われるって、知らないの?!」

ついに彼女がキレた。

「ふん、せっかく私が、あの、一人でこんなところに食べに来てい
る可愛そうな少女にパフェを奢ったのに、それを君は邪魔をしてお
いて、私を嫌うのかね?」

ウェイトレスの彼女も、キヤルも、同時に二人であんぐりと口を
開けた。

ようするに。

小さな少女が、親もなしに一人でご飯を食べに来ているのは、ど
ういう事情があるにせよかわいそうである。だから、気前良く、女
の子の好きそうな甘いパフェを、心根の優しい俺様が恵んでやった
のだ。それを見直しもせずに店の奢りにしてしまつて、少女への俺
様の親切心を無下にしたくせに、俺様の言うことを聞かないとは。

なんと生意気な。

と、いう事らしい。

「馬鹿はどこまでいっても馬鹿なのね」

いきなり指名されて驚いたものの、内容のあまりの馬鹿さ加減に、
キヤルは問題のイチゴパフェをつついていたスプーンの手を止めた。
「さて、どうしてやろうか」

こういつた揉め事に、自分から突っ込んでいくことは、普段なら
しない。が、自分自身がネタに使われたのなら話は別である。
と。

店に新しい客が入ってきた。

「あ」

ウェイトレスが対応しようと、男の手を振り切った直後だった。

「な、何をする! 離れたまえ!」

わらわらと、派手な男は物騒な連中に囲まれてしまった。

「へへ、良い物着てるじゃねえか」

「外から丸見えだぜ? こんな所でそんなモン着てちゃあ、いけねえ

なあ？」

物騒な連中は三人がかりで貴族風の派手な男を、店の外へと引きずり出してしまった。

「ああ、言わんこつちやない。でも、ま、いつか」

馬鹿にはいい薬だ。

キヤルはまたパフエをスプーンですくい取って、口に運ぶのを再開した。

ガタガタ

「？」

勢い良く椅子を蹴倒すかのような音に目をやれば、あの男の連れ二人が、食事を済ませて席を立ったところだった。

会計を終えて足早に店の外へ出てゆく。

外へ出たとたんに、細身の女と、筋肉質の男は走り出し、瞬く間にゴロツキどもを蹴散らしてゆく。

エセ貴族男が連れ出されたのを、すぐに追いかけなかったのは、行儀が良いのか何なのか、食事を残さずたいらげるためだったらしい。

「ふわゝ、やるじゃない」

ずるりと、貴族男を引きずり出すと、二言三言、女が何かを言って男が頷くのを確認すると、たいして怪我もしていなさそうなのに、貴族男に二人で肩を貸しながら歩いて行ってしまった。

道端には、彼女と筋肉質の、あのいびつな身体の男に殴り飛ばされた連中が、ゴロゴロと転がっているだけになった。

「あ」

そこで、キヤルは思い至ったように声を上げた。

「賞金首だっけ？そういえば・・・」

あまりに低い額なので失念していたことを思い出した。

あの、貴族風の馬鹿男を中心に、細身の黒髪の女と、筋肉質の男。「ロックガンド・トリオだったかな？」

一応あれでも、山賊だ。三人しかいない理由が、今分かった。

あの頭の悪い男が何故かヘッドなのだ。

賞金も、取り巻き二人のほうで、実は高かったりする。

それで、何だか気になっていたのかと、キヤルは納得して、広げていた地図とガイドブックをしまうと、レジへと向かう。

「ごめんなさい、変なところを見せてしまつて」

申し訳なさそうなウェイトレスに、キヤルはにっこり笑って返した。

「おいしかったわ。ごちそうさま！」

美人は大好きだ。まして、こんなに良い人ならなお更である。

いろいろあつたものの、おいしかったことはおいしかったので、キヤルは満足して店を出た。

聖剣・大賢者セイノロズド

ガイドブックを片手に適当に街中を歩き回り、適当な安宿を見つけて、ようやく落ち着いたのは太陽が傾いて、窓の向こうからオレンジ色の光を投げつけるような時間だった。

「うー、疲れた」

風呂にも入って一息ついたところで、ベッドの上にどっかりと手足を伸ばして寝転がり、キヤルは宿屋の食堂でもらったクツキーを、ぼりぼりと行儀悪く食べる。

あれだけ昼間に騒ぎがあったというのに、頭の中に浮かんてくるのは、キラキラしい聖堂にぼつりとあった、あの古ぼけた鉄屑みたいな黒い聖剣のことばかりだった。

別に抜きたいわけではない。

世界を支配したいわけでもないし、大金持ちになるような智恵が欲しいわけでもなく、力なんてものも、生きていくのに必要な分だけあればいい。

なのに何故こんなに気になって仕方がないのか、キヤルにも分かっていなかった。

「あの、頭の悪そうな連中のせいよ」

剣を引き抜こうと躍起になっていた、聖堂に並ぶ人々。

色々な人物が集まっていたが、男女構わず剣に群がる様は、正直気味が悪かった。

その誰も彼もが、あの剣を手にしたら、何がしかの英知や力を得られると、本気で思っているのだ。

「頭が悪いことこの上ないわ」

自分はそんな大人になんかなりたくない、そう思う。

趣味の悪い、やたらに煌びやかな聖堂に、古臭い剣が一本あるだけではないか。

たとえばあの剣が、持ち主に多大なる力を与えるのだとしても、あ

れでは使い方も何もあつたものではない。

見世物にされて、ただそこにあるだけの。

キヤルにはどうしても、あの剣が、聖剣の名に相応しいく、大事に扱われているように思えなかった。

「……ええい！ 気になる！」

ベッドの上に勢い良く起き上がると、いそいそと身支度を始めた。「こうなったら、もう一度見に行けば良いのよ。そうしたら、気もおさまるわよ、きっと！ 夜になったらあの行列だつてなくなっているはず！」

結論付けると、真夜中になるのを待つて、宿を出た。

なんだろう？

何かが聞こえる。

彼は意識を上昇させた。

長いこと眠っていたはずなのに。

ふと見下ろせば、小さな少女。

金色のふわふわの髪が、夕日に映える綿雲のように綺麗だ。

「あんたつて、本当に、可愛いそうね」

ぽつりと少女が呟いた。

可愛いそう？

誰が？

「僕が？」

案の定、キヤルが聖堂に着いた頃には、行列はさすがになくなっていて、酔っ払いが何か叫びながらフラフラと道を歩いているだけだった。

それでも足音を偲ばせて、そうつと聖堂に入った。

門が閉ざされることもなく、開けっ放しなのは驚いたが。

「まあ、誰にも引き抜けないんじゃ、盗みようがないものね」
良く見れば門も何も、扉さえなかった。

少々呆れながら、聖剣の突き刺さるあの岩に歩み寄る。

別に悪いことをしているわけでもないのに、ドキドキするのはなぜだろう？

昼間はあんなに派手だった聖堂も、今は月の優しく青白い光に照らされて、荘厳な雰囲気をも少し出している。

月明かりを透かして、あのステンドグラスからは、淡い綺麗な色彩が床にこぼれ、壁に備えつけられた繊細な灯籠からは、ほのかに暖かな光が灯っていた。

それらの浮世離れた光の中に、あの岩が、黒々と浮き上がる。

聖剣は、かすかに光を反射して、弱々しく突き立っていた。

その姿の、なんと寂しいことか。

こんなにも細々と頼りない、錆び付いた鉄の棒に、日が昇れば人々は群がるのだ。

キヤルは聖剣と呼ばれるそれに、ゆっくりと近づいた。

「なんで、こんなところに突き立ってるのかとか」

岩に足を掛ける。

「鞘も無くて、抜き身のみまで」

手を掛け、体を引き上げ、登る。

「何十年、何百年も、こんなところに」

三度も繰り返し返せば、すぐに剣の元に辿り着けた。

「それでも、誰もあんたを気遣ってなんか、くれやしなかったのかしらね？」

近くに来てみれば、その黒々とした刃の、欠けたところまでが良

く分かってしまつて、剣と呼んでいいのかどうかさえ怪しい様に、キヤルは何となく溜め息を吐いた。

伝説の聖剣とはいえ、誰も彼もが己の野望を叶える道具としか見ていない。一振りの、錆び付いて古惚けてしまった剣であるのにもかかわらず。

それを知っているのだろうか。

このまま朽ちて、岩の一部に成り果てるのをただ待つて、そこにあるだけの様に。

気の遠くなるような、長すぎる時間をただひたすらに。

ただ。

そう。

ただ、静かに佇んでいるのだ。

「あんたつて、本当に、かわいそうね」

ポツリと眩きが漏れ、無意識に、いつの間にか手を伸ばしていた。柄に指先がわずかに触れた瞬間。

眩い輝きが、一瞬キヤルを包んだ。

とつさに庇つた目を、恐るおそる開いてみる。

「・・・え？」

伸ばした自分の手には、一本の剣が握られていた。

「えええ？」

何がなんだか分からない。

「へええっ!？」

足元には、あの錆びれた剣が刺さっていたはずの跡が、深々とした空洞をこちらに向けていた。

と、いうことは。

「ちょ、ちよつと待つて」

キヤルは、岩に穿たれた穴と、手にした剣とを、交互にせわしく見比べた。

剣のあつた場所に、あるはずの剣がない。すなわち今手にしているこの剣が、すっぱ抜けた剣と考えるのが普通だ。

しかし。

キヤルの手に握られた剣は、聖堂に掲げられた明かりを鋭利な刃線にきらめかせ、綺麗な刃身を惜しげもなく晒している。

シンブルだが高度な彫刻が施された柄の先には、透度の高いアメジストが納まっていた。

今しがた、生まれたばかりのような、冴えざえと、露をはらんだこの静かな美しさは、あの、岩に突き刺さっていた、黒く錆び付いて、刃先も欠け、鉄の棒と言ってもおかしくない、古びたボロボロの剣とは似ても似つかないのである。

「何が、どうなってるのよ・・・？」

混乱するばかりだが、状況から見て、どう考えてもこの綺麗な剣が、この足元の穴に、今まで刺さっていた、あの剣だと考えるのが自然だ。

「さ、さすが聖剣だけあって、おかしいことも普通に起こるってわけ？」

口元が引きつっているのが自分でも分かる。

「落ち着け、落ち着け、落ち着くのよキヤロット・ガルム」

冷や汗が頬を伝うのを無視して、何度か深呼吸を試みれば、いくらか頭も平静に戻ってくる。

つまりは。

聖剣を、抜いてしまった。

誰が？

自分が。

手にした美しい剣は、紛れもなく聖剣・大賢者セイクロズドなのだ。

冷静になってみれば、その事実にごくりと唾を飲み込んだ。

「何やってるの？」

「ぎゃあ！！！」

いきなり後ろからかけられた声に、自分でも聞いた事がない、ひどい悲鳴を上げてしまった。

とにかく反動も手伝って、そのまま剣を、思わず元の場所に突き立てた。

すると、先ほどの美しさが嘘のように消え去り、一瞬のうちに元の、汚らしい黒い姿に戻ってしまっていた。

呆気にとられていたところで、もう一度、声をかけられた。

「ねえ？君、誰？」

振り向けば、眼鏡を掛けた、細身で長身の、ひょろりとした男が立っていた。

「な、何？」

「いや？こんな遅くに、女の子が一人で危ないなあって思ったから」とぼけた愛嬌のある笑顔で言われれば、力が抜けそうになる。

どうやら、聖剣をキヤルが抜いてしまったことには気が付いていないらしい。

すぐ後ろにいて見ていないというのもどうかと思っただが、とにかくキヤルは安心して、溜め息をついた。

しかし、聖剣を抜いてしまったことに動揺したとはいえ、こんな超の付きそうな素人に、背後を取られてしまったのは、自分でもちよつとシヨックだ。

落ち着いて、爪先から頭の天辺まで男を観察してみれば、このとぼけた男は、どう見ても剣士、といういでたちでも体格でもなく、剣といった物とは縁が遠いように見える。

それでもまあ、聖剣といえども、いろいろと曰く付きのシロモノである。

こいつも、権力やら何やらが欲しくて、こんなところにいるのかもしれない。

「とにかく、人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るものよ？」両手を腰に当て、はるか上方にある彼の顔を睨み付けた。

「あ。ごめんなさい」

自分よりも、全くもって随分と年上だろうに、素直に頭を下げる様に、キヤルは気が緩んでしまう。

「僕はセイン。よろしく」

「はいはい、よろしくね」

長身をしゃがませて、差し出された手を握り返す。

「私はキャラロットよ。キャラロット・ガラム。キャラでいいわ」

相手があんまり嬉しそうに微笑むので、キャラもつられて笑う。

セインと名乗った彼の、ブルーグレーの瞳が、思ったよりも綺麗で、その瞳が細められて笑みを形作る様は、見ていて気持ちがいい。不思議な感じのする人物だ。

「この気の抜けた顔がいけないんだわ」

「え？」

「いえ、こつちの話」

わざと咳払いをして誤魔化す。

握手した手を放すと、セインはキャラの顔を覗きこんだ。

「な、何よ？」

「最初の質問に答えてもらってないなーと思って」

にっこりと、また微笑んだ。

なんて危機感のない笑い方をするのかと、マジマジと見つめ返してしまふ。

「キャラ？」

「あ？ああ、何してるかって？」

不審そうに首を傾げられて、慌てて理由を考える。

「そうね。伝説の聖剣が見つかったって聞いたから、観光で来たのよ」

「こんな時間に？」

「だって、昼間はとても込み合っていたもの。夜ならゆっくりできるかと思って」

そう言うキャラを、セインは顎に手を当てながら、考えるようにジッと見つめてくる。

自分のような子供が、明け方近いこんな丑三つ時にうるついているのは、一般常識から考えてもおかしすぎる。しかし、他に言い訳

が見つからない。

実際、昼間よりは夜中の方がゆっくり出来ると思ったのは、本当なのだから、それでも嘘はついていないはずだ。

「ふうん？」

セインはそう言っただけ、黙ってしまった。

「・・・あ、あなたはどうかなの？」

沈黙に耐え切れずに、キヤルが切り出した。

「僕？」

「他に誰がいるのよ」

自分を指差すセインに、キヤルは半目で言い返す。

セインは嬉しそうに、にこにこ笑う。

「僕はね、長いこと此処に居ただけで、君みたいな子は初めてだなあと思って、様子を見に来ただ」

「・・・要点がつかめないんだけど？」

長いこと居た、ということは、管理人が何かだろうか。

「えーっと、どう説明したらいいかな・・・」

少し考えた後、セインはぽん、と手を叩いた。

「そうだね、君と一緒にかな？夜はうるさくないだろうから、ゆっくりできるし、現状を把握できるし・・・」

「現状って？」

「ああ、こいつの」

ぽんぽん、と、セインは剣を軽く叩く。

やっぱり管理人なのだろうか。

「・・・あなた、この剣のことに詳しいの？」

管理人であれば、色々話が聞けるかもしれない。

「そうだね、大体のことは知っているよ」

「・・・学者さん？」

大体を知っているというのなら、セインロズドの歴史を研究しているのかもしれない。

「・・・ちよつと違うかなあ？」

首を傾げられてしまった。

「じゃあ、ここの管理でもしているの？」

「似たようなものかな？けど、正確にはここ、じゃなくて、こいつの、になるけど」

そう言つて、また剣を叩く。

反動で折れやしないかと、キヤルは気が気ではなかったが、剣は幸いピクリともせず、元の場所に突き立っていてくれた。まあ、昼間あれだけ引っぱられて何ともないのだから、見た目よりもはるかに丈夫なのだろう。

とにかく、彼は“聖堂”ではなく、“聖剣”の管理人らしい。キヤルは結論付ける。

話し方といい、整っているくせに気が抜けてしまうような容姿の、この男。

「ねえ、じゃあ、この剣の話、聞かせてくれる？」

「そんなに興味があるの？」

わくわくして尋ねれば、また不思議そうな表情で尋ね返された。

「結構、ある方かな？って言っても、興味を持ったのは、今日の昼間に、この鉄の棒を見てからだけど」

「へえ？この剣が持つっていう色々な力とかは興味ないの？」

また、につこりと微笑まれる。

「んー、あんまりないわね。だって、私まだ子供だし、大人になっても権力とかいらないうって思うし。そうね、毎日きちんとご飯を食べられて、暖かい寢床で眠れて、ちよつと綺麗な服が着られれば、それでいいと思うもの」

「でも、それって結構大変なことだよ？」

きよとん、と、しゃがんだままセインはキヤルに問いかける。

馬鹿にされたような気がして、ふんぞり返つてみせた。

まだ八歳とはいえ、それでも一人で世の中渡っているのだ。

「知ってるわ」

「それでも？」

「必要以上に何かを得ても、邪魔なだけよ」
「面白いね」

セインと名乗った男は、今度はふわりと微笑んだ。

楽しい時間は直ぐ過ぎる

この少女は面白い。

聖剣・大賢者セインロズドをして、“鉄の棒”扱いだ。

いかな黒く錆び付いていて、原型を留めていなくとも、伝説の聖剣を、恐れもなくそう呼ぶ人間は、まずいないだろう。

「な、なによ？」

あんまり綺麗に微笑むので、キアルは身を引いた。

とぼけて笑っていた今までとは、あまりに差があるくらい、綺麗な笑みだった。

「そうだね、何から聞きたい？」

「話してくれるの？」

「うん、いいよ？」

岩の突き出しに座るセインの隣に、キアルはいそいそと並んで腰を下ろす。

キアルが腰を落ち着けると、セインは彼女のリクエストに応えてセインロズドの物語を、思い出すかのように話し出した。

セインの話は幅が広くて、キアルは絵本を読んで聞かせてもらっているようで、いつの間にか、うきうきしていた。

セインロズドの物語は、随分昔の、古い話であるのに、彼の剣の軌跡は波乱に満ち溢れて、飽きることがなさそうだった。

それに加え、セインの話し方の上手さも手伝って、国王や騎士たちが、それぞれの時代の中の世界を駆け巡る様が、今見て来たかのように鮮明に浮かぶ。

眠いのを我慢して来て、本当に良かったと、熱心にセインの話を聴きながら、キアルは随分と有意義な夜を過ごした。

「んー、何がいいかな？」

キアルは、本の並ぶ棚と、小一時間ほどにらめっこをしていた。

セインとの会話は楽しくて、ここ数日、実は聖堂に通いつめている。それで、今夜も会う予定でいるので、キヤルは何か、セインに話して聞かせられる本はないかと、書店の親父の咳払いを、先ほどから無視しまくりながら、本の背表紙を見比べていた。

なにせ、セインは物知りで、いつも彼に物語やキヤルの興味のあ
る物事の話をしてもらっているものだから、たまには何か、自分か
ら面白い話をしてやりたかった。

「こうなると、結構難しいものね」

大量の本を前に、腕組みをして溜め息をつく。

「いたい、世の中に書物というものは、どのくらいあるものなの
だろう。」

「多すぎて、どれから見てもいいものかも、わかんないわね」

適当に、手に取ってめくってみたりするものの、はたして、どう
いったものがセインを喜ばせられるのかが分からない。

セインは本当に色々なことを話してくれた。

あの聖堂のある場所は、元々は聖剣の最後の所有者であったオズ
ワルド卿の屋敷の敷地内なのだそうだ。

それが何故あんなことになっているのかといえば、道路を整備す
る際に、オズワルド家に、国が敷地を買い取る話を持ちかけたのが
発端だったらしい。

何せ、整備して作りたい道路は、どうしてもオズワルド家の敷地
に入ってしまう。国側からは随分と良い条件を提示したらしいが、
しかし、現オズワルド卿は、これを断固拒否。

整備する道路のド真ん中に、あの岩があつたからだ。

聖剣として先祖代々受け継いできたものを、土地を含め、道路整
備なんぞで手放したり出来ないと言う。

それを聞いた国側は、その伝説の剣とやらが、いったい本物なの
かどうか怪しいと、証拠を提出するように要請した。どうせ偽物と、
タ力をくくっていたのだ。

卿は、馬鹿にするなどと言って、早速、ご先祖の初代オズワルド卿

の手記から何から、片っ端からそろえて提出。それでこの岩に刺さっている鉄の塊が、本物の聖剣だと鑑定されてしまって、大騒ぎとなった。

そうして、聖剣を奉るから、土地ごと公園として貸し出してくれと国が言い出した。先祖の面目が立ったオズワルド卿は、貸し出すだけならとこれを承諾。国と町はその場所を、瞬く間に観光地化してしまった。

そうして、今に至るのだそう。

「オズワルドさんは良いかも知れないけれど、聖剣には端迷惑な話よね」

オズワルドの庭に佇んでいられたら、あんなに毎日、色々な人々に引っぱられることもなかっただろう。

そう。不思議なことに、キヤルが一度抜いてしまったにもかかわらず、セインロズドは他の誰にも引き抜くことができないでいた。

「・・・聖剣だしね」

それで無理やり納得するキヤルだったが、聖剣の側には、あれ以来近づかないようにしている。

他にも、聖剣を一番初めに手にした、我儉な王の末路や、当のオズワルド卿の華々しい戦歴など、聖剣の伝説に、ここまで詳しい人は、他にいないのではないかというくらい、セインは色々話してくれた。

聖剣にまつわる話だけではない。

ちよっとした橋の簡単な掛け方や、鉱石の見分け方、水脈の見つけ方など、セインの知識は底が知れないのではないかと言っくらいに豊富だった。

「まあ、私が知らないだけなのかもしれないけど」

セインといると、キヤルはまだ、自分がたかだか八年しか生きていないのだということが時々悔しくなる。

「覚えることや、学ぶことはまだまだ沢山あるのだから、何も焦らなくてもいい」

セインはそう言ってくれたが、世の中には知らないことが、知らなければならぬことが多すぎる。

「勉強熱心なんだね」

と、セインは褒めてくれたが、何のことはない、キアルが一人で生きていくためには、様々な知識が必要なのだ。

実際、彼女は年齢にそぐわないようなことを知っているし、もう二十歳を超えていてもおかしくないくらいに大人びてみえる。

銃を扱うために、腕の筋肉は少女のものとは思えないくらいに発達しているし、手にマメもある。

セインには気付かれないように隠しているが。

「さて、どうしようか」

視線を、ずらりと並ぶ本の背表紙に戻して独りごちる。

もう一度、列の端から見て歩く。

ちょうど、セインに興味はないだろうと、今まで見もしなかった絵本の棚に辿り着いたときだった。

「・・・これ・・・？」

目を引いたのは、覚めるような青の背表紙。

引っ張り出してみれば、色鉛筆で細かく彩色された、綺麗な絵本だった。

エルドラド

そう題名に記されていた語句には覚えがあった。

まだ本当に小さかった時、母が寝物語に聞かせてくれた話の中に出てきた、伝説の楽園。

楽園といえば、ユートピア、エデン、シャンバラなどと、国や地域で様々な呼び方をされるが、キアルはこのエルドラドの話が好きだった。

争いもなく、飢えもない。

人々は心穏やかに平和に暮らし、日々の糧を得るために働き、家

族と幸せを分かち合う。

よく耳にする、永遠の命が与えられるのだ、選ばれた人間だけが行けるのだ、ほかの“楽園”などと違い、普通に人々が暮らし、日々の小さな幸せを喜ぶ。

一見地味だが、このエルドラドなら、本当に何処かにあるような気がしたものだ。

中をめぐってみれば、綺麗な絵が続いていた。

二人の姉弟が、争いの絶えない世界を悲しみ、エルドラドへと旅立ち、様々な苦難を乗り越えて、やがて楽園に辿り着く。

そんな内容であったが、綺麗な挿絵と、描かれたエルドラドの様子が、母に聞いたものと似通っていて、キヤルはこの絵本がとても気に入った。

「ちよつと、子供っぽいかもしれないけど」

あの、ボロボロで寂しい剣に詳しいセインなら、気に入ってくれるかもしれない。

そう思うと、何だか嬉しくなった。

キヤルは絵本を買うつと、大事に胸に抱えて聖堂を目指した。

途中の店でサンドイツチなどを二人分買つて、空を見上げればまだ夕暮れ時。

茜色に空がけぶり、雲が黄金に輝いている。

今日はよく晴れた一日だったから、見物人も多かったことだろう。

このところは、まだお金に余裕があるから大丈夫とはいえ、セインとの時間が楽しくて、せっかく聞き出した情報だというのに、賞金首のことなどどうでもよくなってしまつて、自分でもちよつとマズイと思う。

生きていくためのハンター職だ。

八歳の自分が生きていくのに手っ取り早い方法は、結局のところヘッドハンティングなのである。

「まあ、そのうち向こうから引つかかって来るでしょ」

この町に来たばかりのときに見かけた、あの変な、情けない三人

組のようなのが。

今後のことは気楽に構える事にして、人もまばらになり始めた聖堂の前に辿り着くと、きよろきよろと、セインの姿を探す。

別段、時間を約束しているわけでもないのに、毎回セインはキヤルを待っててくれた。

「さすがに今日は早い」

通常よりも早く来てしまった為か、背の高い、あのひょろりとした姿が見当たらない。

ちよつとがっかりして、近くのベンチに腰掛ければ、向こうから見たことのある顔が。

「うわあ、思い出すもんじゃないわね」

だらしなく歩く、貴族風の派手な服を着た男を先頭に、すらりと姿勢を正した黒髪の女と、対照的に、必要以上に短足な上に、筋肉がいかつく、いびつにゴツゴツした体格の男。

例の三人組だった。

馬鹿は死んでも治らない

「えっとー。ロックガンド・トリオだっけ？」

思い出しながら、キヤルはこっそりベンチの後ろに隠れると、三人が通り過ぎるのを待った。

ロックガンドとは、この国の北にある切り立った山脈で、この三人はそこで山賊をしているから、適当にこの呼び名が付いたらしい。

頭に見えない頭領のあの男の名前はなんといったか。

「えっと？マイワンだったかな」

記憶の端っことから、辛うじてその名前を引っ張り出せた。まあ、どうでもいいといえば、かなりどうでもいい名前だが。

見ていれば、三人揃って聖堂に入っただけ。

しばらくして、他の人々と一緒に、悔しがりながら揃って出てくるのも見届けた。

「あいつらも、聖剣目当てだったんだ」

自分の力量を知らないとは恐ろしいものだ、妙に感慨深くなる。

「何やってんのキヤル？そんなところで」

いきなり後ろから声をかけられ、驚いて飛び上がる。見ればセインが腰をかめてこちらを見ていた。

「セ、セイン！驚かさないでよ！」

「ごめんごめん」

あはは、と笑うその頭を、ごいん、と殴る。

「あ痛！」

「あんたっていつも、どっかから湧いて出てくるわよね」

「だからって殴ることはないじゃないか、ひどいなあ」

セインは眼鏡を掛けなおして、涙眼で訴える。

キヤルはこれでも名の知れた賞金稼ぎだ。その自分に気配を感じ

させもせずに、セインはいつも気が付けば側にいる。

「あたしの立場ってモンがないじゃない」

ブツブツと小さく呟く。

「こおーんなに、ぼうつとしてんのに、セインって不思議よね」

「そう？」

面と向かって言ってやれば、セインはちよこつと肩を持ち上げた。

その情けない顔に、もう一度殴ってやりたかったが、いかんせん既にセインは腰を伸ばしていて、手が届かない。

その長身による身長差にも、実は腹が立ったが、これはもう仕方がない。

絶対に成長過程で牛乳飲みまくって頭に手が届くようになってやる、とは、心のうちに秘めた野望だったりする。

実際、座ってくれないと、見上げてばかりで首が疲れるのだ。

「とにかく、座らない？」

セインに、目の前のベンチを勧める。

「それより、中に入っちゃおうよ。人も空いてきたし」

彼の言葉に、見れば聖堂の入り口も、人がまばらになっていた。街灯に明かりがとまり、夜がそこまで来ていることを告げている。

「やっぱり、いいわ。ここで」

キヤルはぽん、と、ベンチを叩いて、セインに隣に座るように促した。

「だって、中でコレは食べられないでしょう？」

食べ物が入った袋を見せれば、嬉しそうにセインは頷いた。

結局、二人はベンチに座りながら、人気がなくなるまでの時間を、キヤルが買ってきたサンドイッチで腹を満たして過ごした。

「へえ。これ、美味しいね」

「そう？良かったわ」

そんなたわいもない話をしていれば、すぐに聖堂の中のガス灯の

明かりが付いて、人々は立ち去り、最後に老人が曲がった腰を庇いながら出て行くと、周囲は二人だけとなった。

そうなるとうまく、聖堂の中の、いつもの定位置である、岩にまで移動して座り直す。

「やっぱりここが一番落ち着くな」

と、セインが言うからなのだが。

「そういえば、セインって聖剣に詳しいわりに、あんまり研究とかしているように見えないわね」

キヤルが、セインの隣に腰掛けながら、考えるように言う。

「そう？」

「そうよ」

「まあ、僕は管理人だから」

えへへ、とセインは笑う。

「管理人が研究しても仕方がないじゃない？」

思えば、出会ってからセインは、聖剣に触るといっても、撫でたりするだけで、管理しているというよりは、ただ、傍にるように見えるのだ。

まあ、触って手入れをするような物でもないのだろうが。

しかしながら、やっぱりセインロズドの事には、やたらに詳しい。

キヤルにとっては、夜に会えるのはのんびりできるから良いのだが、雇い主から頼まれているのだとしても、夜中まで管理することもないと思う。

「でも。セインだって夜の方が良いって言ってたわよね？」

「そりゃ、あれだけの人で、昼間にはごった返すからね、ここは」

その最中では、こうして剣の側でくつろぐことも出来ないのだから、管理するのも、やっぱり夜の方がいいのだろうか。

「まあ、いいわ」

ここでまた、セインの話に夢中になってしまっではいけないと、キヤルは話を中断させて、ごそごそと紙袋を取り出した。

「今日はね、見せたいものがあるの」

大事そうに取り出したのは、途中の本屋で見つけた、あの絵本だ。

「どうしたの？それ」

紙袋から出てきた、綺麗な青い本に、セインも興味が沸いたらしい。

「今日、本屋さんで見つけたの。セインにはいつも面白い話を聞かせてもらっているから、こっちも仕返ししないとね」

「ええ？仕返しされるの？僕」

真剣に身を引くセインに、キヤルは笑った。

「いやあね、冗談に決まってるじゃない！」

「ええ？そ、そうなの？」

ずり落ちた眼鏡を直しながら、本気で聞いてくるのがまたおかしくて、キヤルはなかなか絵本が開けない。

「笑いすぎだよ！」

「あははは！ごめんごめん」

その時だった。

「・・・！」

「何？」

キヤルが、不意に笑いを止めて、きつい眼差しを、聖堂の入り口に立つ一本の柱に向けて放つ。

いつもと違った、見慣れないキヤルの表情に、セインも少女の視線の先を追った。

「誰？」

誰何の声をキヤルが投げかけるが、返事は返ってこない。

「誰なの？！」

二度目も、聖堂は静まり返るばかりで、二人の出す物音意外は聞こえない。

イライラしたキヤルが、スカートの裾の中に手を伸ばす。

岩に座ってぶら下げていた足を上げ、片膝をつき、体制を整える。

「そこに居るのは分かっているの。さっさと出て来てくれないかしら？」

セインは息を殺して、キヤルの行動を見守った。

「私、そんなに我慢強い方じゃないのよね？」

カチリ

硬質な音が、キヤルのスカートの下から、かすかに聞こえた。

しばしの沈黙。

息苦しい空気に耐え切れなくなったのは、相手の方だった。

「はいはい、分かったよ、お嬢さん」

両手を上げて出てきたのは。

「あれ？あんだ・・・」

「フッフ」

キザったらしくて、いやらしい流し目を送りながら、聖堂の明かりに照らし出されたのは、キヤルがこの街に来てすぐ、あの小さな喫茶店で、美人のウェイトレスにちょっかいを出していた顔だった。

ついでに言えば、先ほど聖堂の前でも見かけている。

「ああ、本気で思い出すんじゃないわかったわ」

今日、セインに会う前に、ちらりと脳内の記憶をかすめただけで、一度ならず二度までも、こんな見たくもない顔を拝まねばならないとは。

しかし、この男がここにいるということは、あの連れの二人もいるはずだ。

「あと二人、いるわよね？」

キヤルが用心深く構えながら、入り口の柱へ向かって声を掛けると、案の定、派手な男に続いて、二人とも両手を上げて並んで物陰から出てきた。

「お知り合い？」

「になんか、なりたくもないわね」

セインの質問に、言葉尻を捕まえてそのまま返答する。

「つれないじゃないか。知らないフリかい？」

両肩を上げて、大仰に首を振る。

「悪いんだけど、知らないフリも何も、あんたがセクハラ魔人ってこと以外知らないんだけど？」

キアルの辛辣な言葉が、派手な男の眉をヒクつかせる。

セインが、キアルの隣で腕を組み、少し首をかしげて不思議そうに呟いた。

「セクハラ？」

「あたしの入った喫茶店のお姉さんに言い寄っていたのよ。そりゃあ見事にフラれていたけど、当然よね」

「うわあ、最悪だね」

「でしょ？あたしなんか口も利いてないのよ？」

「それで知り合い扱い？」

「図々しいにも程があるわよね」

二人の会話に、ロックガンド・トリオのヘッド、マイワンは眉だけでなく、口端までヒクつかせた。

おかげ様で本領発揮（前書き）

いやあ、パソコンが死にまして。一括インストールする羽目に陥りました。何とか復旧しましたが、まだまだ本調子ではない様子です。もうそろそろ買い替えの時期でしょうか。お金ないなあ…。

おかげ様で本領発揮

「だ、黙って聞いてりゃあ言ってくれるじゃねえか」

どんだん顔が青ざめていくのが、少し離れた岩の上からでも見える。

「あら、キザったらしい態度は終了？」

キヤルはまだスカートの裾から手を離さない。

「ふん、夜中に来りゃあ、聖剣を盗み出せると思ったら、先客がいたってだけの話よ。生意気なガキの一人くれえ、どうってことねえしな」

相手が小さな少女と、眼中にもないらしい丸腰のひ弱そうな男と分かると、もう態度は急変していた。

それでも、キヤルから、またあの娘に告げ口をされると思ったのか、始めだけはそれなりに気を使っていたらしい。

三人とも、上げていた両手をおろし、ずかずかとセインロードに歩み寄る。

「おい、二人とも降りな。邪魔なんだよ」

そのふてぶてしい、何を勘違いしたのか自分がこの世で一番偉いとも言つかのような、いわゆる子供じみた態度に、キヤルも内心ムツとしたが、相手が子供なら、それに倣うこともない。

「セインは岩の陰にでも隠れてて。あたし、こういう馬鹿がいつちばんキライなのよね」

キヤルのこの言葉に、慌てたのはセインだった。

「キヤル、何言ってるんだ。隠れなきゃいけないのは君だよ？」
言われてみれば。

セインは、キヤルが何者であるのかわからないのだ。彼からしてみれば、キヤルを守るべきは自分、ということになるのだろう。

彼女を自分の背後へと押しやろうとする。

「あ、ああああ、あたしは平気よ！悪党っていったって、たかだか子供の言うことなんか、まともに受け取らないもの！」

思わず声が裏返ってみたりもしたが、キヤルはなんとかこの危険な位置から、セインを脱出させたかった。

「まだ、絵本も見せてないんだから」

ボソリと呟いた声は、幸いにもセインには聞こえなかった。

「悪党とはひどいじゃないか。なに、そこをどいてくれて、誰にも言わないでくれりゃあ、何もしやしねえよ」

マイワンは歩きながら、口角を吊り上げる。

「誰がそんなの、信用すると思ってるんだい？」

すらりと立ち上がりながら、につこりと、セインが微笑んだ。

しかし、その目は笑っていない。

マイワンの手下であるところの、細身の女が右側に、厳しい男が左側に回る。挟み撃ちにするつもりか、二人とも手に何か、武器らしきものを握っていた。

「セイン！伏せて！」

キヤルが叫ぶやいなや、女の手が伸びて、ギラリと光った。

二人の間の岩が、ガイン！という音とともに弾け飛んだ。

「ショートダガーだわ！」

がっちりと、岩に溝を穿ち、両刃のダガーが突き刺さっている。

とても女性の技とは思えない。

「ヴオオオオオオ！」

かと思えば、いびつな両腕を高々と上げて、雄叫びとともにいびつな体格の男が、短い足をドスドスと鳴らして迫って来る。

片手にはチェーンソーが握られていた。

これがまたえらい勢いよく回転しているものだから、キュイイイイという金属音と、雄叫びとが入り混じって、それはそれは耳障りだった。

「ああ、うんざりだよ」

キヤルはそのまま銃を引き抜こうとしたが、それよりも身体がふ

わりと浮き上がる方が早かった。

「え？え？え？」

それが、セインに抱えられて岩から飛び降りたのだと気付いたのは、すとかん、と地に足を降ろされた後だった。

「逃げよつか？」

顔の前で、にこやかに微笑まれて、思わず。

ごいん

「い、イタイ」

セインが頭を抱えてうずくまる。眼鏡の下は涙目だ。

自分達の横では、男がセインロズドの突き刺ささっている岩の部分を、無心にチェーンソーで削っている。

「逃げるってあんたね！あれ！」

キヤルは、足元を削られている聖剣を指差して叫んだ。

「あんた、あれの管理人でしょう？！」

「聖剣のことをあれって言っちゃうあたり、やっぱりキヤルはすごいなあ」

殴られて出来たコブをさすりながら、セインは嬉しそうに、にへら、と笑った。

「もう！いいからセインはそこにいて！」

力が抜けそうになるのを堪えるものの、この状況でどうしてそんなにのん気でいられるのか、頭痛がしてくる。

そんなことをしているうちに、二本目のダガーが二人の間を再び突き抜ける。

ドカ！

その二本目は、キヤルの手にしていた紙袋を、聖堂の壁に縫い付けた。

ぶち

セインは何か切れたような音を聞いた気がしたが、音の先にあ

った、キヤルのあまりな微笑みに、それどころではなかった。

「ぎゃハハハハ！引き抜けねえなら、岩ごと削り取っちまえ！」
マイワンが手下二人の背後で下品にはしゃぐ。

キヤルの目の前にはショートダガーを構えた女が立ち塞がっている。

キヤルはまた、スカートの中に利き手を滑り込ませた。

こんなことになるとは思ってもいなかったために、一丁しか銃を装備してこなかったことを、キヤルは今更ながら後悔して、小さく舌打ちをする。

適当に持つて来た銃は、少々反動が強い、ベレッタM84だ。

「こんなことならコルト25も仕込んでくべきだったかしら」

補充用の銃弾も持つて来なかったが、それでもキヤルはひっそりと晒う。

不意に、女がまたダガーを投げつけてきた。

女の手が動くと同時にキヤルはスカートから腕を引き抜く。

少女らしい、白く細い太ももが、スカートがめくり上がったことで露わになった。

その足には、似つかわしくない皮製のホルダーが巻きついている。

そこにいつも収められているのであろう彼女の愛用の銃は、既に構えられて、あっという間に発砲されていた。

発砲された弾丸は、投げられたダガーを弾き飛ばして軽快な音を発し、そのまま女の右腕を貫いた。

「き、貴様！」

女が腕を押さえて膝を折る。

「あ、あたしの腕が！腕が！」

わめく女に、キヤルはちらりと冷徹な眼差しを向ける。

「うつさいなあ、手当てすりゃ元通りになるわよ。それとも、二度と使い物にならなくしてあげたほうが良かった？」

「ひ、ひい！」

まさかこんなに幼い少女から、銃弾が飛んでくるなんて思いもしていなかったはずだ。

女は尻を地面に押し付けたまま、ズリズリと後退した。

すると、チェーンソーを振り回して、いびつな身体全身で、ごつごつした男がやはり奇声を上げながら向かってきた。

「ムガアアアアア」

「あんたもうっさい！」

ドン！

有無を言わず引き金を引けば、男はチェーンソーごとひっくり返し、自分の持っていた凶器に顔面の皮膚をえぐられて悲鳴を上げた。

「ウ、ウ、ウ、ウガアアアアア！」

回転する刃のせいで、ぐるぐる踊り狂うチェーンソーの横で、顔面を押さえ込んでうずくまる。太い指の間から血が流れ出るが、キヤルの言葉は容赦がない。

「チェーンソーを撃つただけなんだけど。よけいにうるさくなったわね。口を打ち抜けばよかったかしら？」

マイワンが青ざめて動けなくなっているのを確認して、キヤルは壁に突き刺さったダガーを引き抜いた。

紙袋の中身を取り出してみれば、案の定、絵本に縦長の穴が開いている。

「……………これ、弁償しなさいよ？」

相手に背を向けているにもかかわらず、彼女の声音はロックガン・トリオを震撼させるに充分だったようだ。

「ひ、ひゃ、ひゃはは……て、てめえみたいなガキに、な、何が」

ガウン！

それでもがんばって笑って見たのだろうが、しゃべり終わらないうちに、振り向きざまに一発。

一瞬のうちに、マイワン自慢の豪華な衣装の裾に、焦げ穴が開い

た。

「数えてない？私、まだ三発しか撃ってないの」

ドン！

「ひいひい！」

ドン！

ドン！

「うひゃあああ！」

ベレッタM84の総弾量は十三発。

マイワンは、足元へ正確に撃ち込まれる弾丸に、まるで針の上でステップを踏まされて、踊らされるように、聖堂から追い出され、最後には入り口の階段を、後ろ向きに転がり落ちて行った。

「ふん。雑魚が」

銃を足のホルダーに戻すと、まだ転げまわっているチェーンソーを、セインが拾い上げて止めていた。

キヤルの絵本（前書き）

パソコンがまだ少々おかしいですが、頑張ります。
更新遅くなりまして、すみませんでした。

キヤルの絵本

「セイン？」

銃をぶちかました自分に驚くかと思ったが、そうでもないらしい。

「えーっと、縛るものと包帯になるものと・・・」

ブツブツ言いながら、柱の影に隠れて置いてある掃除用具入れの中から、使い古されたロープと、壁の隅に置いてある机の引き出しから真新しいタオルを持って来ると、うめき声を上げて倒れる、残されたロックガンド・トリオの手下二人を手際よく縛り上げ、傷口にタオルをあてがって手当てしていく。

「キヤルって凄いなあ。もしかして賞金稼ぎ？」

「お、驚いたでしょ？」

もしかしたら嫌われたのかもしれない。

キヤルは無理に胸を張ってみせた。

「別に嫌いになんかならないから、無理しなくてもいいよ」

「な、何よ！べ、別にあんたに嫌われたって、あ、あたし・・・！」
ドキッとした。

セインは人の心を読むのかと思うくらいの中だ。

おかげでキヤルは、セインの顔をまともに見ていらなくなつて、しゅんと両手に持った絵本に視線を落とす。

何度見ても、開いた穴は塞がることもなく、隙間から自分の足が見えた。

パンパン！と、手を叩く音がして、ハッと顔を上げれば、縛り上げた二人を柱にくくりつけ終わって、セインが手をはたいているところだった。

「この二人も、お金になるの？」

普段と変わらない態度で、セインは足元のロックガンド一味（首領抜き）を指差す。

その表情は嬉しそうだ。

「え？うん。ヘッドのマイワンなんかよりお金になるわ」

「へえ？じゃあ、役所に連絡しなくちゃね」

今度は、床に出来た血溜まりをモップで洗いだす。

「セイン？」

「うん？」

「何やってんの？」

「お掃除」

「・・・」

この状況はどうしたものか。

キヤルは分からなくなつて、ぽかんとセインを見つめるだけで、不本意ながら、つつ立つて動けなくなつてしまった。

血を水で洗い流し、ごしごしとモップで綺麗に床を磨き終わってから、ようやくセインはキヤルのところまで戻ってきた。

「ここ、お年寄りも来るからね。驚いて倒れちゃったら後味が悪いじゃない？」

そう言いながら、キヤルがいまだに両手に持っている絵本を、すつと自分の手に取る。

「ああ、見事に穴が開いちゃったなあ。もったいない」

細く開いてしまった穴を、聖堂の明かりにかざして見ながら、セインが呟く。

そこでようやく、キヤルは疑問を口に出ることが出来た。

「驚かないの？」

「？何が」

普通、というか、今まで、キヤルが賞金稼ぎだと分かると、驚かない大人はいなかった。だから、セインには何となく、別に隠しているわけでもなんでもないのだが、そんな驚きと差別のこもった表情を、自分に向けて欲しくなくて黙っていたのに。

彼は驚いて否定するどころか、すんなり受け入れてしまっている。

どちらかというと、キヤルがそれに驚いてしまっていた。

「僕はもつと色んなものを見ているからね。キヤルみたいな小さな子が賞金稼ぎだったくらいじゃ、驚けないな」

後に、セインが言った言葉だ。

「まあ、それなら、いいわ」

やつと気を取り直したキヤロットだ。

「絵本、まだ読めるかな？」

まだちよつと混乱しているようなキヤルに、セインは絵本を差し出す。

彼女がわざわざセインのために持つて来た本だ。出来れば綺麗なまま見てみたかったが、こうなってしまうては仕方がない。

キヤルは絵本を受け取ると、中身をパラパラとめくる。

「まあ、突き刺さっただけで、千切れたわけじゃないし・・・」

穴は気になるものの、文章が途切れているわけでもなく、読もうと思えば読める。

各ページをチェックしながら、キヤルはセインロズドの傍らに、少々距離を置いたいつもの定位置に腰を下ろした。

何度も来ていると慣れたもので、手を使わずに、普通に歩いて登れる場所を知っていたし、それでなくても最初に来た頃と比べれば、簡単に岩の頂上まで行けるようになっていた。

セインがキヤルの隣に、やはりいつものように腰掛ける。

「あ」

「どうしたの？」

「削られて座りにくくなってる」

チェーンソーで多少削られている場所が、キヤルのお尻の下になっていたものだから、ちよつと身体が、片一方にどうしても傾くようになってしまっていた。

仕方ないので、セインの方に少し詰める。

「役所に差し出す前に、一発ぶん殴らなきゃ」

「ははは・・・」

ここで余計なことを言ったら、また頭にげんこつを落とされかねないので、セインは笑ってごまかした。

ようやくいつものキヤルに戻ってくれたらしい。

二人はお互いの膝の間の真ん中に絵本を広げた。

薄暗い聖堂の中ではあったが、六本の柱に付けられたガス灯の下、ろうそくにも火を灯して、手元にも、備えておいてあったランプを置けば、綺麗な表紙が良く見えた。

色鉛筆で細かく彩色された挿絵は、それでも人物の顔まではハッキリと描かれてはいなかった。どちらかというと背景主体で、セインは内容よりもそちらの方に目が行ってしまつて、時々キヤルに怒られた。

「まあ、あたしもどちらかって言うとなんか恋人同士がどうなったのかなんて、興味ないんだけどね」

「じゃあ、どうしてこの本、選んだの？」

「理想郷、楽園よ」

「は？」

セインのまぬけな顔に、キヤルの方が、自分の言つた言葉に恥ずかしくなつて、思わず。

「ぱかん！」

「い、痛いから。キヤル」

セインの頭を、また殴ってしまった。

「あ、ごめん」

「ど、どうしたの？」

「べ、べつに！いいじゃない、いちいち気にしないでよ！」

いつも謝つたりしないキヤルが、珍しく謝つたりするので聞き返してみれば、またもや頭を殴られた。

「二人が最後に辿り着くエルドラドっていうのはね、知っているかもしれないけど、理想郷とか、楽園とか呼ばれる伝説の都のことなの」

本の挿絵に視線を戻して、うつむいたまましゃべるキヤルの耳は

真っ赤だ。

年相応にているのが、また珍しい。かわいいな、と思いつつ、それを口にしたら、今度こそ本気で殴られてしまうに違いないので、セインは眼鏡のズレを直すふりをして、筋肉の緩んだ顔を隠した。

絵本の中の楽園（前書き）

パソコンがいよいよおバカになりました。2回も一括インストール
ってどうなんだ。おかげでもう一本書いている小説が進みません。
次回の投稿まで、無事にパソコンが動いているといいなあ。

絵本の中の楽園

「ふうん？エデンとかは良く聞くけど、エルドラドは知らないな」

「え？ほんと？」

自分が知っていて、セインが知らないことがあるのに驚いて、キヤルは思わず聞き返した。

「うん。シャンバラとかエデンとか、あれでしょ？永遠の命を与えられて、死ぬこともなくて、貧困もなく飢えることもない、っていうのが売りの、信じてる人だけが行けるとか、限定付きのやつ」

「ちつがう！！！！！」

キヤルに詰め寄られ、迫力のあまりセインは身を引いた。

「エルドラドをそんじょそこの楽園と一緒にしないでよ！」

「は、はい。すみません」

楽園は、そんじょそこに転がってはいないだろうが、勢いに負けてつい謝ってしまう。

そのキヤルの声で気がついてしまったのか、柱に縛り付けた女が、軽くうめき声を上げる。

「う、うん・・・？」

「そこ、うつさい」

「は、ハイ！」

ビシリ！とキヤルに指差され、女は条件反射か、か細い声で返事をすると、またかくりと気を失った。

「エルドラドはね、そこに暮らす人はちゃんと働いて日々の糧を得て、貧富の差もなくみんなが一つの家族みたいに平等に暮らしているのよ。あれこれ限定付きの良くわかんないのと一緒にしちゃダメなの！」

「わ、わかりましたごめんなさい」

再びキヤルの勢いに負けたときには、ぐいぐい押されてセインの背中が岩肌にくったりくっついていた。

「分かったんなら、いいわ」

深呼吸をして落ち着いてから、キヤルはようやくセインを開放して、元の位置にすんと座った。

「どうしてその本を、僕に？」

「・・・セインに、面白い話を聞かせたくて、本屋さんに行ったの。それで、この本が目にとまって・・・」

体勢を崩したために落ちてしまった絵本を拾い上げて、最後のページを見つめながら、ぼつりぼつりと話す。

「ずつと前に、聞いたことがあったのよ。エルドラドの話。それで、セインにどうかなって、思ってた・・・」

「じゃあ、この本、貰ってもいいの？」

キヤルの膝の上の絵本を、ひよい、と取り上げる

「そ、そりゃ。でも、だったら新しいの、また買ってくるわ」

「いいよ、これで」

一生懸命見上げてくるキヤルに、セインは楽しそうに微笑んだ。

「だって、そんな、穴の開いたのじゃ読みにくいじゃない」

「でも、せつかく買ってきてくれたものだし、穴の開いた本なんて、そうそうあるものじゃないでしょ？僕はこれがいいな」

気を使ってくれているのかどうなのか、理解しがたいところではあったが、セインはこの絵本を、どうやら気に入ってくれたらしい。

「じゃあ、その本、大事にしてね」

嬉しくて仕方がなかったが、それが表面に出ない様子を気をつけながら、セインに絵本を渡す。

自分は賞金稼ぎだ。いつまでもこの町にいるわけではない。

この絵本を見たら、もしかしたらキヤルのことを、セインが思い出してくれるかもしれない。

実は、そんな思いもあって、セインが喜びそうな本を探していたのだが、天邪鬼な性格が邪魔をして、言い出せなかった。

「大事にするよ」

「絶対だからね!？」

にっこりと笑ってくれるセインに、キヤルも笑顔で返す。

「エルドラドか。そんな国があるのなら、本当に・・・」

絵本を見つめるセインは、何だか少し、寂しそうに見えた。

「じゃあ、私、行くね？」

「うん。お休み。早く寝ないとダメだよ？」

月はとつくに中天を超え、日付も変わってしまったている。

いつもこんな時間までお邪魔しないのだが、それでも、文句も言わずに付き合ってくれるセインが嬉しかった。

「さあ、起きなさいよ」

気絶したままの、捕まえた二人の頭を、銃の柄尻で、容赦なく殴り起こす。

「ひえ!」

「うご?！」

痛みで目が覚めれば、目の前には銃口が。
ドン!

一発撃って、柱につなげてあった縄を切る。

「ひええええ?」

自分が撃たれたと思ったらしい。二人同時に目を瞑って、亀みに首を引いた。

柱と身体を縛り付けている間の縄が切れたただけなので、縄は解けることはない。おかげで前のめりにべっちゃりと倒れこんだ。

しかし、キヤルはそんな二人に無情だ。

「さっさと歩く!」

見上げれば、白く浮かび上がる月明かりの下に、黄金が輝く。
が、その黄金は銀色に光を反射する黒い銃をこちらに向けている。

何とかよろりよろりと立ち上がるものの、そのまま歩いて階段を転げ落ちた。

「ぐえ」

またもやカエルみたいにべっちやり潰れたのに、黄金の髪の少女はお構いなしだった。

「ほら、シャッキリ歩くの！役場に行くんだから！」

ふらふらと揺れる、縛り上げられて一塊になった男女と、その後ろをキビキビ歩く小さな女の子。

月明捕まえる気もなかった小者だったが、聖堂に置いておくわけにもいかない。

おまけにセインにあげたあの絵本に、見事な風穴を開けたのだ。

とりあえずいくらかの金にはなるのだから、もう役所に突き出す気は満々だ。

そんな、対照的な影を見送って、セインは絵本を、今度は一人でぺらりとめくった。

あと数時間で日が昇るというのに、役所の入り口は煌々と明るい。常駐の役人が待機していて、いつでも何かがあったときに対応できるようにしてあるのだ。

その役所にキヤルが着いてみれば。

「・・・何やってんの？」

「ひゃあ！」

玄関をくぐった先で、マイワンが捕まっていた。

役人に押さえつけられているにもかかわらず、キヤルの顔を見るなり飛び跳ねた。

「お、親分！」

「ぶほっ！」

手下二人が、縛られたまま走ろうとして、見事に顔面から役所の床に滑り込んだ。

「ペムカ！ジンズ！」

役人の手を振り切って、手下に駆け寄るマイワンの顔は、涙と鼻水でべたべただ。

「名前があつたんだ」

あつてあたりまえなのだが、もともと興味がなかったので、名前なんかどうでも良いキヤルだった。

ちなみに、どっちがペム力でどっちがジンスかといえば、男の方がペム力で女がジンスらしい。

オイオイと泣きながら抱き合う三人に、軽作業服を来た、がつしりとたくましい役人が、帽子を脱いで、キヤルにぺこりと頭を下げる。

以前この町に来たときに、やっぱり賞金首を引き渡した顔馴染みの役人だった。

「こんなに夜遅くまで、ご苦労様です」
につこりと挨拶を返す。

「玄関でウロウロしているのがいるので、何か用があるのか聞こうとしたら、まあ賞金首じゃないですか。何考えてるんだか。おっと、拝見しますね」

「ごそごそと、スカートのポケットから出したハンターパスを、役人が受け取って、何事か書類に書き加えた。

「じゃあ、これ、パスはお返ししますね。ここにサインを・・・」

「ありがと。私も、まあこんな安値の雑魚なんか、捕まえる気はなかったんだけどね」

さつとサインして、書類を役人へ返す。

「でしような」

キヤルから書類を受け取って、役人は、ふう、と溜め息をついた。

「しかしまあ、助かりましたよ。頭だけ捕まえても、こいつらの場合手下の方が厄介だったんで」

若い役人に、縦に並ばされてロックガンド・トリオが引き立てられていく。

ジンスとペム力は極端に違う足の長さや体格に、やっぱりよろよろ、ふらふらしながら歩くものだから、キヤルの視界から消える前に、何度か転んで、その度に親分を下敷きにした。

まあ、その親分であるところのマイワンなのだが、どうやら手下二人を残してきたことが心配で、役所にいれば、いずれ連れて来られるだろうと待ち構えていたらしい。しかし実力が実力だけに、あつさり御用となつたわけだった。

「キャロットさんも、早くお帰りなさい。いかなゴールデン・ブラッディ・ローズといえども、子供は子供。寝る子は育つんですよ？」

銀行宛ての書類と、賞金額を記入した小切手を、にこやかに渡されたキャルは、ちらりと役人を見上げる。

髭の濃い口元も、太い眉毛も弧を描き、人の良さそうな笑みが目線の先にあつたので、子供扱いされたことには目を瞑って、キャルも素直に頷いた。

「ありがと。そうするわ。私も、もう眠いもの」

ポケットの中に書類と小切手を小さくたたんでしまいこむ。

役所を出ようとしたキャルだったが、ふと、立ち止まって振り向いた。

「どうしました？」

「そういえば、あの聖堂にいる管理人なんだけど」

「ああ、ダイラオ爺さんですか？」

「・・・え？」

キャルは眉根をひそめた。

「・・・爺さん？」

「ええ。聖堂の掃除や、聖剣の監視をしているんですが。あれ？昼間に会いませんでしたか？」

髭を撫でながら、きよんとする親切な役人の顔を、キャルは見上げた。

昼と夜の管理人？（前書き）

またパソコンがおかしくなりました。一括インストールしまくりつてどうなんでしょうか。

いろいろが進みませんが、なるべくUPしていきますので気長によろしく願います。

昼と夜の管理人？

「ああ、昼間の管理人はお爺さんなのね？」

ぼん、と、合点が行って手を打った。

「そうじゃなくて、夜の方の管理人よ。眼鏡をかけた」

物騒な夜中に管理人を置くくらいなら、扉を取り付けて鍵をかけたかどうかと、キアルは提案するつもりだった。あの、のほほんとしたセインでは、今日のようなことがあった場合、対処するどころか切り捨てられてしまいそうだ。

名残惜しくなる前に、そろそろこの町を出ようと思っていたが、セインの事が、なんとなく心配だった。

扉をつけて鍵をかければ、セインロズドを見ていることも出来なくなるが、セインの安全には代えられないだろう。

しかし。

「はい？夜の管理人、ですか？」

「ええ、そうよ。背の高くてひよろりとした。セインっていうの」

「セイン？」

「そう、だけど・・・？」

どうも役人の様子がおかしい。

腕を組んで口もとに手をあてがい、何がしか考え込んでいる。

「知らない？えっと、聖堂っていうよりは、聖剣の管理をしているって言うていたけれど・・・？」

「ああ、では、オズワルド卿が新しい管理人を雇ったのでしよう。」

夜は夜で、聖剣に悪戯しに來たりする不届き者が増えましたからね」

最近雇ったというには、セインは仕事慣れしているような気がする。夜通し眠らずに、聖堂の中に一人、本を読むでもなく起きているのは、結構辛いはずだが。

それに、出会ったときに彼は、結構長い間ここにいて、と言って

いなかったか？

「昼間に管理しているお爺さんがいるの？」

「ええ。ディーナがオズワルド卿からセインロズドを借りてから、あの聖堂だのなんだの建てましてね。観光地にしてみましたおかげで聖剣を引き抜こうとする連中が入れ替わり立ち代りで。聖剣だといふのにお構い無しになっちゃってしまってるね。嘆かれたオズワルド卿が、せめてもと、管理人を置いたんですよ」

この場合、ディーナ側が管理人を雇うのがスジなのではなかろうか。

キヤルはそう思ったが、そんなことよりも。

「夜に管理人を雇うくらいなら、雇をつけちゃえばいいのに」

「いやあ、そうしたいのはヤマヤマなんだろうがね。あの通り変に金をかけてますからな。見栄を張ったんでしょう。おかげで、そこまでする金がないんですよ」

行政というものはどうしてこう、やること成すこと中途半端なのか。

「・・・役人やってるのも大変そうね」

「はは。特に下っ端はね」

呆れたように言うキヤルに、役人は仕方がないと苦笑した。

「えー、セインさんね。後で聞いておきますよ。お宿はどちらで？」

メモ用紙とペンを取り出す髭の役人に、キヤルは手を振った。

「いいわ。本人に聞くから」

「お知り合いで？」

「ええ。あのトリオも、聖堂で捕まえたの。だから、物騒なところに一人でいるのは危ないかなって」

「なんですと?!」

それを聞いた役人は驚いて、腰をかがめて、キヤルの顔に自分の顔を近づけた。

「聖堂で何をしていたんですか？あのトリオ！」

「あ、ああ。なんだっけ？そうそう」

役人の髭面が急接近したことに、心臓が驚いてばくばくしているのを無理になだめながら、マイワンの台詞を思い出す。

「引き抜けないなら岩ごと削り取って売り飛ばすんだって言うていたわね。確か」

そうだ、確かそう言っていた。

キヤルはうんうんと一人頷く。

「岩ごと。そう来ましたか・・・」

深刻そうに腕を組み、顎に手を当てながら呟くと、ぱつと髭だらけの顔を上げた。

「分かりました。扉を付けられないか、上に話を通しておきましょう」

「ほんと？」

「ええ。マイワンが思いつくくらいですから、そのうち同じことをしようとする連中も出てくるでしょう。岩から抜けなくても、持ち運びさえ出来れば、高値で売買されてしまうのは分かりきったことでしょうからね」

顎に手を当てたまま、まだ小難しく、眉間に皺を寄せている役人に、キヤルは微笑んだ。

「ありがと。じゃあ、帰るわね」

踵を返しながら、髭面の役人に手を振って、これで安心とばかりに宿への帰路に、ようやく着く。

オズワルド卿みたいな、お金のありそうな伝統ある旧家なら、聖剣なんかの管理人から外したところで、セイン一人、何か仕事を与えてくれるだろうと、勝手に決め込みながら上機嫌で、まだまだ暗い夜の道を鼻歌交じりで歩いた。

「うー、お腹すいた」

喫茶店のテーブルの上に、行儀悪く顎を乗せ、死にそんな顔でキヤルは呟いた。

朝、というよりは昼過ぎに起き出したまでは良かったが、宿屋の食堂も、時間が時間だけに閉まっていて、夕方までは準備で開かないという。

それで、仕方なく街中に出て、観光客をかき分けながら、この町に着いて最初に入ってから、すっかりお気に入りになった、例の美人さんがいるこの店に、朝食ならぬ、遅めの昼食を食べに来たのだ。

しかし既に、キヤルのお腹は限界だ。

これは本気でヤバイ。

あと5分もしたら、空腹で死ぬる。

先ほどからずっと、そんなことばかり頭の中でぶつぶつ呟いている。

何せ口に出したらそれだけで体力が奪われそうで、声に出せなかったりする。

あのトリオ、殴るだけじゃ済まないんだから。今度会ったら袋叩きね。

いつもはお昼前には起きるのに、こんなに時間が狂ったのは、あの三人が邪魔したせいだ。

三人のまぬけな顔を、頭の中で殴り飛ばしてみる。

「はい、お待ちどうさま」

コトリと、綺麗な手が、キヤルの目の前にコンソメのスープと魚介の Pasta を置いた。

「やった！ご飯！」

がばりとフォークを持って、口に運ぶまでの時間が惜しいくらいに飛びついた。

ぱくぱくむしゃむしゃと、勢い良くほおばるキヤルを、にこやかに美人のウェイトレスが見つめている。

「良く食べるのね？」

「朝ご飯、抜いちゃったから、お腹空いたの、よね」

食べながらなので、時々詰まりながら答える。

「あら。だめよ？ちゃんと三食たべなきゃ、大きくなれないわよ？」

キアルはぴたりと、フォークを持つ手を止めて、亜麻色の髪のエイトレスを見上げた。

「・・・やっぱり、ちゃんと大きくなるには、きちんとご飯食べないとダメ？」

口の周りを汚したまま、上目で見上げてくる仕草があんまりかわいらしくて、ウェイトレスは口元に手を当てて、思わずくすりと笑ってしまったのを隠した。

「そうね？良く食べて良く寝て良く運動して、これが基本かしらね？」

ウィンクをしながら言い聞かせるようにそう言ってみると、ふわふわの金髪の、この頃お得意様になった少女は、今度はむう、と下を向いて、ジッとお皿を睨みつける。

「じゃあ、朝の分も食べる！」

「ええ？！」

子供らしいといえば子供らしいのか。突拍子もない発想に、ウェイトレスはつい追い討ちをかけた。

「食べられないと思うけどなあ？無理しないと良いと思うわ。やってみる？」

本当は、ちゃんと身体に合った分量を、バランスよく定期的に食べるのが、成長期の子供には必要なのだが。

「食べられるかどうか、やってみなくちゃわからないわ。オムレツ追加ね！」

どうやら負けず嫌いのこの少女は、ムキになってしまったらしい。

「はいはい、オムレツね？」

お昼もとくに過ぎて、夕食にはまだまだ早い、こんな時間に来るお客さんも滅多にいない。店内には自分と金髪の少女だけだ。

おかげで厨房も、顔馴染みになってしまった少女に、快くオムレ

ツを作ってくれる。

出来立てのオムレツを持っていけば、また一生懸命食べてくれるのが、見ていて気持ちが良い。

「うう、もー、だめ」

やっぱりというのか、案の定というのか、全部食べ終わったところで、お腹を抱えて椅子の背もたれに寄りかかってしまった。

「良く食べたわねえ」

感心してお皿を片付けると、えへへ、と、少女は笑った。

「だって、セインに追いつくんだもん」

口の周りを拭いてやると、ちよつとむずがった。

「セイン？」

「知らない？ 聖堂の管理人」

「あら？ あそこの管理人はお爺さんよね？」

「それは昼間の人でしょ？ 夜の方よ」

「夜にも管理人がいるの？」

そんな話は聞いた事がない。

でも、この頃はあの辺りはとても物騒になっているから、オズワルド卿が、新しく雇い入れたのかもしれない。

「その人に追いつくの？」

「そう！ とても背が高いのよ。嫌味かっていうくらい！ だから私、いつも見上げて首が疲れちゃうのよね」

こんなに小さいのだから、普段からでも大人のことは見上げているのだから。そのセインという人は、余程背が高いのだろうか？

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったわね」

個人名が出たところで、重要なことを思い出した。

二人とも、結構顔を合わせているのに、お互いの名前を知らないことに気がついたのだ。

「私はシェリエッタっていうの。みんなはシェリーって呼ぶわ」

「私はキャロットよ。キャルでいいわ。よろしくシェリー」

名乗り合うと、二人とも顔を見合わせて、くすくすと笑いあった。

「ごちそうさま」

キヤルが立ち上がると、テーブルの向かい側の椅子に座っていたシェリエッタも、残念そうに立ち上がった。

「もう行っちゃうの？」

「あら？シェリーったら、私のいくつ年上？」

キヤルが腰に手を当てて、意地が悪そうにそう言うと、シェリエッタは、あら、と呟いて、しまったとばかりに口元を持っていたトレーで隠した。

それにキヤルがにかと笑えば、シェリエッタはおかしそうに笑い返した。

そんなことをしながら、ちらりと古ぼけた柱時計を見やったキヤルは、小さく悲鳴を上げた。

「いやだ、もうこんな時間なの？」

針はもうすぐ四時を指す。キヤルが店に入った時点でお昼を大幅に超えていたのだから、当たり前といえば当たり前だった。

「私、もう少ししたらこの町を離れるから、その前にまたご飯、食べに来るわ」

「そうなの？・・・残念だわ」

店の入り口まで見送ってくれるシェリエッタに告げると、とても悲しそうな顔をされてしまった。

「でも、多分また、この町には来るから！」

「本当？その時は必ずこのお店に来てね」

「うん！」

元気良く手を振って、キヤルはシェリエッタの店を後にした。

無断で侵入してみたら

昨日と同じ絵本を買って、セインロズドの聖堂へ行こうと思って
いた。だから、早めに書店に行っておきたかったのに、ついシエリ
エッタの店で、長々と過ごしてしまった。

店が閉まる時間までもう少し時間はあるものの、心なしか、歩く
足が速くなる。

やっぱり、穴の開いた本よりも、綺麗な本をセインに渡したかつ
た。

しかし、シエリエッタの言葉がどうしても気になって、聖堂に続
く通りに入る角を曲がり、あの青い屋根が正面に見えたところで、
行く先が変わっていた。

出店の並ぶ街道を通り抜け、聖堂をわき目に左手へ曲がる。する
と、大きなレンガ造りの塀が伸びる。

そのレンガ伝いに、てくてくと歩いて行く。

大きな屋敷の屋根が、時々、庭木を挟んでちらほら見え隠れする
のを、首を伸ばしながら見て進む。

聖堂の横からまっすぐ伸びる塀の中の屋敷は古臭く、それなのに
朽ちている感もない。逆にその古さが威厳を湛え、趣のあるどっし
りとした構えに拍車をかけていた。

「・・・この趣味の良いレンガの塀は、いつになったら入り口に着
くのかしらね」

屋敷のぐるりを囲む塀は、子供の足には長かった。入り口らしき
門は見えているのになかなか進んでいる気がしない。

「こんなに土地があるんだもの。そりゃ、貸し出ししても不便はな
いわよね」

典型的な旧家。

先祖が聖剣・大賢者セインロズドの最後の持ち主だというのだけ
ら、良いお家柄なのだろう。

そう。

キヤルはセインに会う前に、オズワルド卿を訪ねに来たのだった。

役人も、シエリエッタも、セインを知らないというのは寂しい気がした。昼の管理人である、ダイラオ爺さん、とかいう人物のことは、みんな知っていたのに。

「初めて会ったとき、セインは随分前から聖堂にいてって言うってたわ」

彼は確かに、そんなことを言った。

オズワルド卿が、最近になって雇ったというのなら、セインからそんな言葉は出てこないはずだ。

なのに、役人もシエリエッタも、ダイラオのことは知っていても、セインのことは知らないという。

夜だけ勤めているのが原因だとしたら、今回の騒動も含め、やっぱり当事者である自分から何でもいいから一言、言っておいてやりたかった。

そのまま腕組みをして考えながら歩いているうちに、あんなに遠かった屋敷の入り口である門まで、いつの間にか辿り着いていた。

「・・・立派だね」

大きな門は見上げんばかりにそびえ立っている。

鉄製の格子になっていてその中心には、オズワルド家の家紋だろう、翼を広げて剣を銜えた鷲のモチーフが鎮座していた。

「えーっと・・・？」

辿り着いたはいいが、どうやって中に入ったらいいものか。

迂闊にも、一番重要なことを失念していた。

中に入ることが出来なければ、ここでオズワルド卿が出てくるのを待つしかない。が、そのオズワルド卿そのものが、いつ出てくるのかなんて分かりもしない。

下手をすれば、今日も明日も、外出しない可能性だって充分にあるのだ。

「あー、しまった。どうしようかな」

大きな門の前で、腕組みをして唸ってみても、状況は変わるわけなし。

それでも、諦めて帰るようなキヤルではない。

「いいわ。入っちゃえばこっちのモンよね」

ぺろりと舌なめずりをする、道行く人の視線も何のその。

格子状の隙間から、身体を蟹のように横にして、ぐいぐいと侵入を試みる。

頭は最初に抜けた。

身体が通って頭が挟まるのではみつともない事この上ないので、一番に突っ込んでみたのだ。

「頭が抜けるなら、身体だって抜けるはず!」

猫のようなことをいいながら、隙間にぎゅうぎゅうと身体を詰め込んで、ちよつと痛い。

スポン!

「わ! きゃあ!」

ころころと、柔らかくて、良く手入れされた芝生の上に転がった。
「抜けた!」

少々服が汚れたが、パンパンはたいただけで、広大な庭の奥にそびえる屋敷目指して、キヤルは走り出す。

「こつという時って、子供で良かったって思うわね」

大人だったら、よじ登るしかなかっただろうが、小さいおかげでそんな苦勞をせずとも済んで、ちよつと複雑な気持ちになる。

自分が子供であることは百も承知だが、子供扱いされるのは嫌いだ。とはいえ、身体の大きさに関しては、こればかりは仕方がない。そんなこともあって、背の高いセインを見上げるたびに、ちよつと悔しい。

それにしても、見れば見るだけ、城でもないのに重厚感のある屋敷だ。

「おやおや、変わった侵入者がいたものだね」

少女の不法侵入を、高い窓から見物していた人物が、ぼつりと呟いた。

オズワルド家は古くから代々伝わる旧家中の旧家。名門中の名門だ。

それでも設備は万全に整っている。

例えばこの人物がいる古い出窓。

庭木や周りの壁に隠されて分かりにくいのが、屋敷の主の私室にあるこの出窓からは、実は正門の周辺が丸見えだ。

その出窓から、老人は品良く目を細めて微笑んだ。

「珍しくかわいらしいお客様だ。丁重にお迎えしなさい」

老人は、自分の背後の、かつちりと燕尾服を着込んだ男を、ゆっくりと振り向いた。

「かしこまりました」

男が、何年も変わらない綺麗なお辞儀をして出て行くと、老人も、コツリと杖を突き、金髪をふわふわと遊ばせて、迷わずにまっすぐ、この屋敷の正面玄関に向けて走ってくる少女を迎えるべく歩き出した。

「門も大きければ扉も大きいわね」

キヤルは、広い庭を一気に走ってきたものの、ノックに手が届かないことに気が付いて、立ち往生していた。

遙か上方に見える扉のてっぺんを、腕を組んで睨みつけてみるが、だからと言って木製の、見るからに年月を経て黒光りしている重そうな扉が開くわけがなく。

仕方ないので扉を素手で叩こうと片腕を振り上げたときだった。

キイイイイ・・・

「あ、あれ？」

急に開いた扉にぶつかりそうになって、慌てて飛び退いた。

「・・・開いちゃった」

予想外に開かれた扉に、一瞬うろたえた。

「あたしが扉を睨んでたから開いた、って、そんなわけないか」

軽く笑いながらそんなことを呟いてみた。

すると、中から白髪 of 混じった灰色の髪をかつちりと整え、これ

また燕尾服をかつちりと着込んだ紳士が顔を出した。

「ようこそいらっしやいました。旦那様がお待ちです」

「へ？」

綺麗にお辞儀をされてしまった。

「けしてお嬢様が睨んでいたから扉が開いたのではございませんよ？」

びっくりしているところに、につこりと微笑まれて、キヤルはしまったと顔を赤くした。

「アルフォード、お嬢さんが困っているではないか」

更に扉の奥から、低い声が響いた。

「これは、申し訳ございません。旦那様」

アルフォードと呼ばれた紳士が振り向いた先には、杖をついた老齡の、これまた面差しの優しい、翠の瞳の紳士が立っていた。

雪みたいに真っ白な髪を染めもせず、それがまた瞳の色を際立たせている。深いふかい、深緑のようなその瞳は、何かほっと、人の心を落ち着かせるものがあつた。

「あ、あの？」

押しかけてきておいて「あの？」もないのだが、どうやら自分が来ることを知っていたらしい屋敷の主人に、どう切り出してよいものか。

「ああ、驚くことはないよ。お嬢さんがうちの門を一生懸命くぐっているところが、私の部屋から見えたものでね」

中に入るように促されながら、そんなことを言われて、またキヤルは赤くなつた。

見られていたとは。

「必死になつてこの家に入ってくるということは、私に何か用かね

？」

「勝手に入ってしまったってごめんなさい！失礼ですが、貴方が、オズワルド卿ですか？」

勢い良く頭を下げたキヤルの頭を撫でて、老紳士はにこやかに頷いた。

「さよう。私がラオセナル・オズワルドだ。これは、我が家の執事。アルフォードという」

主人に紹介され、アルフォードはまた綺麗なお辞儀をした。

「さあ、お入りなさい」

手を差し伸べられ、招かれるままに玄関に入ると、広いホールに出た。

中央に広々とした階段がある。

大きな屋敷だから、キラキラとしたものを想像していたが、この老人はそうだった趣味はないらしい。

柱や壁や床、置いてある家具などは頑丈そうで、どれもこれも立派だが、けして華美な装飾などはしておらず、質実剛健といったところか。

それでも、しつくりと屋敷の雰囲気になじんで、とても落ち着くのは、きっと趣味が良いからだ。

「どうかしたかね？」

「あ、いいえ！落ち着いた趣味がいいなあと思って」

「はっはっは。我が家は昔から無駄が嫌いだね。褒めていただけるとはうれしいよ」

キヤルの顔から意図を汲んだのか、それとも良く言われることだから分かったのか。

とにかく先祖伝来で、このオズワルド家は他の貴族なんかと違って、金や銀などの煌びやかな装飾は嫌いらしい。

「旦那様、どちらのお部屋を？」

「そうだな、あの部屋が良かろう」

「かしこまりました」

そう言って通された部屋は、一階のテラスから、あの聖堂が見える小さな部屋だった。

悩める紳士と約束

「素敵！」

思わずそんな言葉が漏れた。

「気に入ってくれたかね」

「あ、ごめんなさい」

ちよつとみつともなかったかと、キヤルは小さくなった。

部屋はこぢんまりとして、小さい暖炉と、景色の良い出窓の下には作りつけのベンチ、簡素な机と猫足の椅子に、何よりテラスのある大きな張り出し窓からは、木々の木漏れ日がチラチラと輝いて芝生を彩る様が良く見えた。

家具や窓の棧。すべてが古い歴史を感じさせたが、それが外の景色などと融合して、自然に溶け込むような部屋だった。

暮らすのなら、こんな部屋が良い。

キヤルはそんなことを思う。

ただ、もうちよつとフリルや小物を置いて、かわいらしくしたいところだが。

「何、小さくなることはない。ここは私の孫娘も気に入っている部屋でね。お嬢さんなら気に入ってくれるかと思ったのさ」

老人はベンチに座るようにキヤルを促し、自分もその隣に座った。

「あの、私、とっても不法侵入してしまったんですけど・・・？」

怒られて当然なのに、どうしてこんなに親切にしてくれるのか。

上目で聞いてくるキヤルに、現オズワルド卿はふわりと微笑んだ。

白い髪が、差し込む光に反射して、とても綺麗だ。

「私に何か用があるのだろう？」

「どうして分かるの？」

「使用人の家族なら、門の開け方を知っているからね。それ以外の

侵入者といったら、電話で私への面会を申し込んだ誰かや、泥棒く
らいなものだから。でも、お嬢さんはそのどれでもなさそうだ」
ゆっくりとした口調に、優しさがにじみ出る。

コンコン

ドアがノックされた。

「何だね？」

主の呼びかけに、ドアの向こうから返事が返る。

「アルフォードです。お茶をお持ち致しました」

先程の燕尾服の紳士が、いつの間にかいないことに、キヤルはよ
うやく気がついた。

あたりを見回す少女に、オズワルド卿は目を細めて笑う。

「我が家の執事はしっかり者で良く気がつくのですね。お菓子も用意
しているだろう」

そう言つと、手を二回鳴らす。

「失礼致します」

静かに、アルフォードがドアを開ける。

その手に支えられた銀の盆の上には、卿が言ったとおり、お茶と
お菓子が、綺麗な磁器の入れ物に入れられて並んでいた。

カチャカチャと、コーヒーテーブルの上にそれらを並べ、やつぱ
り綺麗に一礼すると、アルフォードは部屋を出て行ってしまった。

「さ、うちのお茶は、代々伝わるおいしい淹れ方をしているからね。
飲みながら話を聞こう」

カップをキヤルに渡し、テーブルの上の焼き菓子の入ったお皿を
真ん中に挟み、卿は嬉しそうだ。

不法侵入して、こんなにもてなされるとは思っていなかったキヤ
ルだ。拍子抜けというのか、なんとも不思議なこの屋敷の雰囲気
に、言葉が出てこない。

とにかく勧められたお茶を一口飲んだ。

やわらかく、混じりけのないお茶の葉の、いい香りが口の中に広
がる。

おいしいお茶は、心を落ち着かせてくれるものだ。

「あの」

「何だね？」

「折り入って、お願いがあるんです」

キヤルはまっすぐに老紳士の翡翠の瞳を見つめた。

「あの聖堂にいる、管理人のことなんですが」

小さな手で聖堂を指差す少女の真剣な眼差しに、卿は手にしていたカップをソーサーに戻した。

「夜も管理させておくのはどうかと思うんです。扉をつけるとか、何とかしたら、管理人を夜に置いておく必要がなくなるはずだわ」

「・・・夜の管理人かね？」

オズワルド卿は、少し驚いたような顔をして、話の続きを促した。

「そうです。だって、危ないんだもの」

「ダイヤオはどうなんだね？」

「あの人はお年だし、昼間の管理でしょ？人の目があるもの。危険なのは夜の方よ」

「なるほど。何かあったんだね？」

金の髪をふわふわ揺らして懸命に訴える少女に、オズワルド卿も身を乗り出した。

「昨日んだけど、山賊に襲われたわ」

使い慣れない敬語は、とうに止めてしまっていることに気付きもしないで、少女は何があったのか、詳しく話してくれた。

「あんな物騒な連中に、聖剣が盗まれるのも、管理人が傷付けられるのも、貴方には本意じゃないと思うの。だったら、ちょっとお金を出して、あの変な聖堂モドキに扉をつけて、夜は鍵をかけてしまったほうがいいわ」

「しかし、そんなことをしたら、彼は仕事を奪われてしまわないかい？」

少女はちらりと、オズワルド卿を見上げた。

「セイン一人なら、この屋敷だもの。仕事の一つや二つ、余っているから雇えるわよね？」

決定事項のように断言する少女に、オズワルドは片眉を上げた。なるほど、夜の管理人という男と親しいらしい少女は、彼の身を危険から逸らすのと同時に、再就職先まで考えていたというわけだ。

幼いくせにしっかり者のこの少女に、ここまでさせてしまう彼は、セインという名前らしい。

ずつと前から、聖堂ではなく、聖剣の管理をしていると、そう言っていたという。

オズワルド卿は、すつと微笑むと、そつと立ち上がった。

「杖をつかねば歩くのも辛い年齢になってしまったが、長生きはするものだ。・・・あのお方の足元にも及ぶまいが」

そう呟いたオズワルドの声は、小さすぎてキヤルには聞き取るこ
とが出来なかった。

「わかった。では、町と相談して、あのおかしな聖堂モドキに、扉をつけるようにしようかね」

そう言つて、少女のふわふわの金髪を、優しく撫でた。

「本当？」

「私は約束を破ったことがないのが自慢でね。約束しよう」

不安げに見つめ返す少女に、オズワルド卿はパチリとウィンクしてみせた。

「じゃあ、じゃあセインのことは？」

「そうさな。彼が良いといえば、是が非とも、我が家に招こう」

そう言つてやれば、少女は本当に嬉しそうに笑った。

「おお。そういうば、お嬢さんの名前をまだ聞いていなかったね？」

杖に体重を乗せて屈み、少女と目線を合わせると、彼女は、しまったとばかりに口元を、かわいらしい両手でふさいだ。

「一度名乗らせてもらったが、私はラオセナル・オズワルド。現才

ズワルド家当主だ」

「私は、キャロット・ガラム。みんなはキャルって呼ぶわ」

「そうか。では、私もキャルと呼んでもかまわないのかね？」

「かまわないわ。むしろ、そっちの方がしっくりするもの。それに、本当なら勝手にお屋敷に入ってしまった私の方から名乗るのが礼儀なのに。卿は思っていたよりずっと良い人ね」

くすりと笑って、名乗りもせず、無断で敷地に入り込んだ非礼を詫びた。

「何、気にすることではないよ。キャルのような可愛いお客様なら、いつでも大歓迎さ」

「ありがとう」

スカートを両手でつまんで、膝を軽く曲げ、ふわりと礼をすると、キャルはパツと笑った。

「これで、安心してセインに伝えられるわ。実は、役場の人にも昨日の晩、あの建物に防犯用の扉を付けてくれるようにお願いしたばかりなの。オズワルド卿と、役人とのダブルで提案が上がったら、町だってほっとかないと思うもの」

「そうさね。あの聖剣には、偽物だろうと言って国王が興味をもたれなかったから、王都だというのにこの有様で」

「あら？国がああ聖堂を建てたって聞いたけれど？」

セインの話では、たしか聖剣が本物だと分かって、あの場所のレンタルを申し出たのは国であつたはずだ。

「はは。国と国王はちよつと違うのだよ。国の象徴であり政は確かに国王が大きな影響を及ぼすがね。臣下だって政治をしているわけだ。この町には、ちゃんと他の自治体のように知事や町長がいるしね。」

「ややこしいのね」

「そうだね。だから、国王が信じなくても、他の政治家が、そろって只の鉄棒を聖剣だと言ってしまったら、国王には手が出せない場合もあるんだよ。まあ、聖堂を建てるのは、国というよりは中央役

場の方が乗り気だったという事もあるし。・・・今回の騒動は、いい例かも知れないね？」

国王の住む王都で、此処はこの国の首都だというのに、町には物騒な連中が闊歩してしまっている。

ラオセナルはそれを憂いていた。

「セインロズドとて、望んではないだろうに。私が彼の岩を貸し出してしまったばかりに、申し訳ないことをしてしまった」

悲しそうに、ラオセナルは窓から見える聖堂の三角屋根を見つめた。

「まるで、聖剣に感情があるような言い方ね？この場合、悲しむのはあの剣の最後の持ち主だったっていう、貴方のご先祖様じゃないの？」

「ああ、そうだね、ローランド様も嘆いていらっしやることだろうね」

どうやら、聖剣の持ち主だったというオズワルド家初代当主はローランドというらしい。

卿が、天幕の掛かった壁に歩み寄る。

天上から下がる飾り紐を引けば、天幕は開き、壁に掲げられた一枚の絵が現れた。

そこには、甲冑をまとい、豊かな白銀の髪と髭をもった老人が、一本の剣を両手で支え、ゆったりと椅子に腰掛けている。

その剣に、キヤルは見覚えがあった。自分が引き抜いた、あの大きな紫電の宝玉を抱いた伝説の剣。

大賢者・セインロズドだ。

描かれた人物の姿は威厳に満ちているのに、表情はどこまでも優しく微笑んでいた。

「この人・・・？」

「ジェスティン・ローランド・オズワルド卿。我が家の初代当主だよ」

そんなに大きくない肖像画である。

それでも、キヤルはローランドの深い微笑みに、釘付けになった。

「この人の話、セインから聞いたわ」

「ほう？なんと？」

キヤルの眩きに、ラオセナルは彼女を見返った。

「とても、素晴らしい人だったって。武功を何度も挙げて、でも、犠牲は最小限にとどめるような。そんな人だったって」

「それは、我がご先祖様の事ながら、嬉しいね」

ラオセナルは静かに微笑んだ。

「ねえ？」

「？・・・何かね」

「この人・・・」

キヤルが、すつと指をさす。

それは、ローランドの後ろに、控えるように立つ髪の長い青年だった。

ローランドと違って、はつきりとは描かれていない。

というより、描き上がったものをわざと削り取ってしまったかのような、そんな傷跡さえ見える。

「顔が見えないわ」

「そうだね。この人物は、とてもローランド様と近い間柄だったと聞いているよ」

「ふうん？」

そんな人物の話は、セインから聞いていない。それに、親しい間柄だったのなら、なぜ彼の部分だけ、こんな風に削り取ったかのように、ぼやけてしまっているのか。

「ローランド様がお亡くなりになった後、色々あったようですね。その時に彼は削られてしまったんだろう。同じ肖像画に描かせるくらいなのだから、よほど親しい人物であつたのだろうに」

「ふうん・・・」

それはローランドもつかばれなかっただろうに、と、キヤルはお

金持ち特有の、いわゆる財産権争いを勝手に想像した。

「さて、では、私はこれから城に向かうが、キヤルはどうするね？」

ラオセナルを見上げて、キヤルはちよつと考え込んだ。

お城というものに憧れないわけではない。これでもいっぱしの女の子だ。

お願いしたら、お城に連れて行ってもらえるかもしれないという期待が、かなり頭の中を埋め尽くしたが、何とか振り払った。

多少のおしゃれはしているつもりだが、こんな旅の格好で、お城に上がったら浮きまくることがこの上ない。

「じゃあ、そろそろおいとまするわ。なんだかんだで、長いことごめんなさい」

「それは残念。約束どおり役場にも顔を出そう。もう、その役人とやらから、話は行っていると思うからね。うまくすれば、すんなり話は通るだろう」

「ありがとう」

ラオセナルとアルフォードに見送られながら、キヤルはオズワルド邸をあとにした。

しかもお土産に、オズワルド家のシェフが作ったという焼き菓子を貰ってしまった。

メイドが、女の子がお客様なら、といって、可愛い紙袋に入れてくれたらしいそれらは、ぷん、と甘い良い香りを漂わせる。

「顔も見えないのにこんなに良くしてくれるなんて、主人の人格が いいと、使用人も良い人になるのかしらね？」

実は世の中結構そんなものである。

労働者を見れば使役人の人格がわかるものだ。

もし、今度オズワルド邸を尋ねる事があれば、きちんとお礼を言おう、そう思いながら、キヤルは足を速めた。

青い絵本

貰った焼き菓子、一人で食べるにはもったいないくらい美味しそうだったし、道の途中で、あんまり色が綺麗だったものだから、つい買ってしまったオレンジ色のフルーツは、つやつやと、やっぱり美味しそうだ。

と、いうことで、結局キヤルは聖堂へと向かう。

空は良く晴れて、まだコバルトブルーに輝いていた。

「しまったなあ、こんなに天気がいいなら、もっと早く起きておきたかったわ」

この時間では、一時間もしないで空の色が変わってしまうだろう。

「まあ、それなら夕日が綺麗なことを期待しましょ」

それを眺めながら食べるおやつは、格別においしいに違いない。少しくきうきしながら、昨日と同じベンチに座って、聖堂の前の人だかりが減るのを待つことにする。

今頃、ラオセナル卿は城に着いただろうか。

ふと見ると、聖堂の入り口の階段を、箒で掃いている老人が小さく見えた。きつと、あの老人が「ダイラオ爺さん」なのだろう。

人の少なくなった聖堂の回りを掃き終ると、老人は中に入っていく。

すぐに、聖堂の中に明かりが灯り始め、ダイラオ爺さんが、聖堂内のガス灯に火をつけているのが予想できた。

徐々に点いて行く聖堂の明かりと、赤と群青が交じり合う空とを、ぼーっと眺める。

「何やってるの？」

「・・・昨日も聞いたような気がするわね、その台詞」

ダイラオ爺さんが全部の明かりを点けて、聖堂から出てきてすぐに、セインがキヤルの後ろから、やっぱり昨日のように声をかけて

きた。

「ほんとに神出鬼没ね」

「そう？」

きょとしたような顔で、けろりと返される。

どうしてこんなのを気に入ってしまったのか、自分が不思議でないが、セインの知識は豊富で、話が面白い。

この前聞いた、空を飛ぶ乗り物の話は奇想天外だったし、セイン口ズドの二人目の持ち主の戦話は、壮大で壮絶で、ドキドキしながら聞き入った。

オズワルド邸でもらった焼き菓子は、思った以上に美味しくて、おしゃべりを数倍楽しませてくれた。フルーツも、果汁が多くて甘酸っぱくて、お菓子にとっても合う。

それでも、日が傾き始めれば暗くなるのは早いもので。

「そろそろ手元が見えなくなってきたわね。中に入っちゃおうか？」

キヤルの提案に、セインも立ち上がる。

「今日はどうしたの？ なんだか嬉しそうだね」

言われて、口元が緩んでいた事に気付きながら、食べ物を袋にしまう。

「どうもしないわ。ただ、昨日の絵本、やっぱりきちんとしたのを渡したくって。来る前に、ちよつと本屋さんに立ち寄ってみたの」

そうしたら、あの絵本は昨日買ったものが最後で、取り寄せるのに時間がかかるという。

「それで、どうしようかと思って・・・」

聖堂の岩の、いつもの場所に腰を下ろしながら、キヤルは夕方、オズワルド卿に会ったことを、いつ話したものか考えていた。

セインの新しい仕事も決まっているとはいえ、このとぼけた管理人は、聖剣のことをとても気に入っているようだし。でなければ、毎晩こんな所で一人、誰が来るでもなく、何をするでもなく、ぼつと過ごせるわけがない。

今は、時々とはいえキヤルが訪ねて来るから、暇つぶしくらいは出来ているのだろうけれども。

「やだな。この本でいいって言ったのに」

笑いながら、備え付けてある棚の中から、あの穴の開いてしまった絵本を、セインが取り出す。

「君が僕にくれたんだもの。何だっていいんだ」

「・・・それ、あんまり慰めになってないわ」

「そう？まあ、慰めで言ってるわけでもないしね」

絵本を、また大事そうに元に戻すと、セインは岩を登ってキヤルの隣の定位置に座った。

「いいじゃない？普通の本より、ずっと記念になるよ」

「強盗進入記念？」

「はは。それもあるけど、君が銃を持つてることも分かったし、年の割にめちやくちゃ肝っ玉がでかくておっかないくせに、意外に口マンチストだっていうことも分かったし」

ぽかん！

「アイタ！」

「どういう意味よ！」

キヤルに頬を殴られて、セインは歯が折れるかと思ったが、幸い歯茎がちよつと痛むだけですんだらしい。

「と、とにかく、僕、あの本を気に入っているんだ。だから、新しいのはいらないよ」

注文した本が届けば、キレイなまま読めるのに、セインはキヤルが読んでくれたあの本がいいと言ってくれる。

ちよつと照れくさかったが、それを言えば、たしかにあの本には一晩とはいえ色々想い入れが詰まってしまうているのは、キヤルも同じかもしれない。

「分かったわ。あの本はあのままね」

「うん。ありがとう」

にへらつと笑うセインは、時々本当に年齢を聞いてみたくなって

しまつくらい、幼い時がある。

「どう見たつて、二十歳とくに超えて、どっちかっつたら、三十路近いかなー、くらいな勢いなのに・・・」

「何が？」

「別に？」

キヤルは覗き込んでくるセインの顔を逆に見上げてじつと見つめてみる。

「きゃ、きゃろつとさん??」

あんまり見つめていたら、セインの方がいたたまれなくなつたらしい。

「やっぱりセインって・・・」

「な、なに？」

「・・・」

いったん、何か口にしかけたキヤルだったが、むっと、口を閉じてしまった。

「やっぱり何でもない」

「え?え?え?」

何でもないと言いつつ、腕組みして考え込んでしまったキヤルに、セインはどうしたらいいかわからない。

おろおろしていたら、笑われてしまった。

「ひどいなあ、もう」

「あはは、ごめんごめん。だって、おかしいんだもん」

溜め息をつけば、キヤルが身を乗り出した。

「あのね、セイン」

「な、何？」

驚いて眼鏡がずれ落ちそうになるのを、セインは慌てて指で押さえた。

「今日ね、オズワールドさんに会って来たの」

「へ？」

まさかそんな話が出てくるとは思っていなかったなので、セインは

間の抜けた声を出してしまった。

「ちよつと勝手かなって思ったんだけど、昨日の事もあるし、善は急げって言うじゃない？」

「ちよ、ちよつと待つて。いったい何のこと？」

両手を前に突き出してキヤルを止め、セインは戸惑った。

オズワルド卿の名前が何故ここで出てくるのか。

その時。

コトン・・・

小さな木片が倒れたような、わずかな物音が響いた。

心の影

キヤルは目線を、聖堂内にしつらえられた工具箱の横、入り口から奥まった、ちょうど柱の陰で隠れた場所へ瞬時に走らせた。

昨日の今日で、また誰かが聖剣を盗みに来たのだろうか。

その可能性は高い。

「・・・誰？」

返事はない。

「誰かいるの？キヤル」

確認を取るように、セインは長身を更に屈めて、キヤルの顔を窺い見た。

セインの顔を見上げたキヤルの不安そうな顔は一瞬にして消え、にやりと、不適な笑みが代わりに浮かぶ。

キヤルは立ち上がると、スカートの中に両の手を無造作に突っ込んだ。

そこには二丁の拳銃が隠されている。

「昨日の今日だもの。準備は万端だわ」

仕方がないとばかりに、セインも立ち上がる。座っているのは身動きが取れない。

もう一度、キヤルが柱の影へ呼びかける。

「ねえ？昨日もここに泥棒さんが押し入ったの、知ってるのかしら？」

返事は、やはりない。

「昨日の今日で来るなんて、かなりのお間抜けさんね？それとも、裏をかいたつもり？残念ね。昨日のことは役人に知らせてあるんだもの。当然でしょ？もう少ししたら、警備の人が来るのよ？」

実際、巡回するように頼んである。ハツタリ臭いが、事実は事実だ。

しばらく返事を待ってみたが、やはり応答する気配がない。

もしかしたら、風が何かで小枝が吹き込みでもしたただけで、誰もいないのかもしれない。

そんなことを思ったが、ふるりと頭を振った。

どう考えたって、入り口から奥まった柱の影になんか、風が吹き込むわけではない。

セインが、いつの間にやら岩の上を移動して、自分の頭上から柱の影を見つめていた。

「セイン？」

一瞬、彼に気をとられた隙に、何かがきらめいた。

「！」

キイ・・・ン

金属と金属が響きあう音が室内に広がった。

きらめいたのは巨大な針。

ちょうどセインロズドに当たって弾かれ、幸いにもキヤルまで届かなかった。

「運が良いのよね、あたし」

緊張に汗が背を伝う。

「キヤル！柱の影じゃない！用具入れの右下！」

ガウン！

セインの声に素早く反応する。何のためらいもなく、彼の言葉どおりの場所へ銃弾を放つ。

手ごたえがあった。

ふらりとよろめきながら、人影がガス灯の明かりの中に晒し出される。

「今日は手ごろな小さい銃だからね。どんどん撃っちゃうわよ？」

今日用意した銃は大人の手の平にすっぽり入ってしまうような小ささで、キヤルにはちょうどよい。

しかし、光の中に晒された人物の顔に、キヤルは息を飲んだ。

出血で赤く染まった手で、打ち抜かれた左肩を押さえ、憎々しげな、憎悪を含んだ鋭い視線を向けて来るのは。

「そんな・・・何で？」

キヤルの身体は、知らずに震えだす。無理に抑えようとしたが、どうしても止まらない。

殺気を帯びて、こちらを睨む瞳の色は、昏間見たときの輝きは無く、暗い光を灯したアンバーだ。

後ろに、いつもよりもきつく結んだ亜麻色の髪は、撃たれた衝撃のためか少々乱れ、汗で額に頬に張り付いた。

「・・・シェリー？」

震える声で、キヤルは行きつけの店の、お気に入りのウェイトレスの名を呼んだ。

その様子に、少し満足したのか、彼女は醜く歪んでいた唇を、フツと笑みに崩した。

「キヤル！」

その笑みを見たと思った直後、目の前には薄い色の髪が、広い背中とともに広がった。

「何が目的だ！」

聞いた事のないセインの怒声に、自分を狙ったシェリエッタの針を、セインが素手で弾き飛ばしたのだと気がついた。

「くっ！」

セインの背後から、シェリエッタに向けて発砲したが、薄暗い室内で目が利かない上に、やはり動揺が収まらず、また柱の影に隠れさせてしまった。

「知り合い？」

セインに問われて頷く。

「・・・そう」

きつく唇を噛む。

血の味が、口の中に広がって、胸のもやもやと一緒に気持ち悪さを倍増させた。

「そんなこと、言ってる場合じゃないわ！」

自分自身に叱咤し、シェリエッタの隠れる柱を狙い定める。

「理由は何だか分からないけれど、貴女、私の敵に回ったって事よね？」

その問いかけに、柱の影から、シェリエッタは笑い声で答えた。頭の中の賞金首を、ざっと並べてみても、シェリエッタらしきものは浮かんでこない。

何故彼女が、ハンターである自分を狙うのか、理由が分からない。

必死に考えるが、捕まえた賞金首の部下や家族だという見方をすればキリが無さ過ぎて、すぐにやめた。

「でも、その方向性が高いわね」

こんなことは今までもあったことだ。

そうだ、そう思えば何も動揺なんてすることでも何でもない。

高鳴る心臓を押さえつけ、必死に冷静さを取り戻そうと唇を噛めば、余計に血の味がした。

苦い。

そんなことを思いながら、どうしてもシェリエッタの、きれいに笑った顔や、自分をからかうときの、悪戯っぽい顔が浮かんで消えて。

気がつけば、頬を温かいものが伝っていた。

震えはようやく止まったが、今度は、この温かな雫があふれるのをどうしようもできなかった。

「セイン、下がってて？」

今だなお、キヤルとシェリエッタの間に割って立つセインを退け、キヤルは前に出ようとする。

「ダメ」

だが、セインの長い腕に遮られてしまった。

「！私はハンターよ？！」

「知ってるよ。君の腕前が物凄い事だって、昨日、知ったばかりなもの」

「じゃあ、どいて！」

「ダメ」

イライラする。

ぐい、と、無理やり涙を腕で拭って、キツとセインを睨みつければ、こちらを見もせずに、じっと、彼はシェリエッタの隠れている柱の影を見つめたままだ。

「セインは丸腰でしょ！」

一度シェリエッタの投げ針を弾いたとはいえ、セインは素人。このままでは、いつ飛んで来るか分からない針の恰好の餌食だ。

「ダメ。あの子は、君の友達なんだろう？」

ハツとして、セインの腕を掴みながら、彼の、隠れて見えない顔を凝視した。

「あたしがそう、勝手に思っていただけよ……。シェリーは、彼女は敵だわ」

だから、迷わず撃てる。

キヤルはまた、自分にそう言い聞かせ、唇を軽く噛み締めた。

「……無理しないでいいよ。友達を打つなんて、きっとキヤルには出来ないだろうから」

相変わらず、こちらを見もせずに、セインは腕にしがみついているキヤルを、更に背後へと押しやった。

「イヤ！」

幼い自分に比べ、成人男性であるセインの腕の力は強くて、そのままよろけそうになった。

キヤルは渾身の力で踏み止まる。

「これは、私とシェリーの問題だわ。セインには関係ない事よ？」

「……そう言うと思った」

セインはようやく、少しだけキヤルへと視線を向けて、そっと笑った。

「！」

泣くかと思った。

そんなはずはなかったけれど。

セインがあんまり悲しそうに笑うので、キヤルは何だか、彼を守るつもりが、物凄く、とても悪いことをしてしまったような気分になった。

それでも、このままセインを、自分の盾にしておくわけにはいかない。

「その子の言うとおりよ?」

柱の影から聞こえた、笑いを含んだ声に、二人に緊張が走る。

腕の裾を、キヤルが無意識に、きゅうつと握り締めたのが伝わって、セインは空いている手の平で、小さな彼女の手を包み込む。

「なるべく、関係のない人間は巻き込みたくないの。おとなしく引き下がってくれないかしら」

高く澄んだ声だ。

「・・・随分と優しいじゃないか。そんな人がどうしてキヤルを狙う?」

セインの声音は、意外にも普段と変わらない。

「そうね、それくらいは、説明してもいいかしらね」

クスクスと、シェリエッタの笑い声が、必要以上に聖堂の中で響いた。

「私、これでも一応ハンターなのよ」

「・・・え?」

シェリーがハンター?

キヤルの目は驚きに見開かれる。シェリエッタがハンターだとは、とても理解しにくかった。

「そう、貴女と同じね。キヤル。ああ、それとも、二つ名で呼んだほうがいいかしらね? ゴールデン・ブラッディ・ローズ」

「・・・なんで、それを知っているの?」

キヤルは自分を押さえつけるセインの腕から、出来る限り身を乗り出させた。

「もしかして、西の町に?」

このディーナに来る前に、酒場で情報屋二人と接触したことを思

い出す。

深夜に会ったというのに、翌朝には、その二人が街中を歩いていたことも、同時に思い出した。

「察しがいいわね。そうよ？あの町で、貴女の情報を買ったの」
やはり。

予想していた事とはいえ、酔っ払いの情報屋二人の顔を、キャルは舌打ちしながら思い出した。

「こんなことなら、黙らせておけば良かった」

黄金の血薔薇が、まだ年端も行かない少女であることなど、ほんの一部の人間にしか知られていない。

誰かから伝え聞いたとして、ほとんどが信じない上に、子供にやられたなどと、大体の賞金首が口に出さずにいるからだ。

「なるほど？あなたみたいな子供が、まさかハンターだなんて思わないいわね」

「失礼ね。そう言うシェリーこそ、ハンターの匂いがしなかったわよ？」

ハンターには、同じハンターにしか分らない匂いがある。

例えばその者が纏う雰囲気や、仕草、といったものであったりするのだが。

何にせよ、そういった匂いが、シェリエッタからは感じられなかったのだ。

「そうでしょうね。私がハンティングをするのは、本当にごく稀だから」

ハンティングを本業としない。時々、そんなハンターも居ることは承知していた。

それでも、彼女にはハンターより、あの古びた店が似合っていると思う。それが、キャロットの感覚を鈍らせてしまったのだろうか？

シェリエッタがキャルを狙う理由が、ますます見つからない。
ハンターがハンターを狙う理由はいくつかある。大体は自分より

名のあるハンターを倒して自分の名声を上げるためである場合が多い。

もしくは、怨恨か。

しかし、シェリエッタはハンターを本業にしてはいないのだから、名声を上げる必要はそうそう無い筈だ。

では。

「私にはね、恋人がいたの」

突然の話に、キャロットもセインもお互いの顔を見合わせる。

「あら、何故今そんな話題になったか分からないって顔ね？」

クツクツと、シェリエッタの嘲笑が、聖堂内で嫌に響いた。

セインはそのまま、じりじりと自分の身体ごと、キャロットを後退させる。

岩の影でも何でもいい。彼女の視界から、自分達の姿を何とか隠したかった。

しかしここはその岩の上。そんなに巨大なわけでもない岩に、二人が隠れる凹凸があるわけでもない。せめて反対側に逃げられれば、身を隠せるのだが。

「それで逃げているつもり？まだまだ後ろに下がらないと、相変わらず丸見えだわ！」

「逃げてなんか！セイン！」

前に出ようとするキャルをセインは必死に下がらせる。

「・・・ブラッディ・ローズ。貴女に私と同じ目を見て貰うっていうのも良いかもしれないわね」

その様を見て、急に声音を変え、シェリエッタは低く呟いた。

「どういうこと？」

「まだ分からない？貴女が以前、この町に来た時の事よ」

「・・・？」

以前来た時。

シェリエッタの言葉に、キャルは過去を手繰り寄せる。

以前、この町でハンティングをしたことがある。髭面の役人は、

その時知り合ったのだから。

そうだ、その役人に引き渡したのは五千万ギグの大物で、今も何処かの刑務所にいるはずだ。

ちなみに今回捕まえたロックガンド・トリオは、三人合わせてようやく一千万ギグに届くか、というような額だった。

「シェリーの恋人って・・・？」

そこでようやく思い至って、キヤルは愕然とした。

「だって、貴女ハンターでしょう？」

ハンターが賞金首と恋仲に落ちるなど。

考えられないと、キヤルは首を振った。

「有り得ないとしても？」

シェリエッタが、暗闇の奥で晒う。

セインロズドの名

「こ、子供だからって馬鹿にしないでよ！」

「ああ、そうね。子供でも恋はするものね？でも、ブラッディ・ロズ。やっぱり貴女はお子ちゃまよ」

せせら笑うような声が、耳障りだ。

「どういう意味！？」

キヤルが叫んだときだった。

ほんの一瞬、視線の先に、銀色の光が伸びた。

「！」

セインの身体が、ぐらりと揺れた。

「・・・ぐ」

「セイン！」

キヤルを押さえるために伸ばされた左の二の腕から、鮮血が滴り落ちる。

かすめただけだったが、シェリエッタは先程の言葉どおり、キヤルだけではなく、セインまでも、標的と定めたのだ。

今度は、甲高い笑い声が響いた。

「何せ、自分の気持ちにも気が付いていないんですもの！子供も子供よ！お子ちゃまもいいところだわ！」

「あ、あんたねえ・・・！」

ギリリと、キヤルの蒼い瞳が、ガス灯の明りに照らされて異彩を放った。

「キヤル、駄目だ」

「！・・・何言ってるの？あんた怪我までさせられて！」

怒鳴るキヤルの頭を、セインが撫でる。

「彼女は、自分を見失っているだけだから。君まで、堕ちる事はない」

ふわり、と微笑んで、セインはシェリエッタのいる柱の影を睨み

据えた。

「ねえ？シエリー、といったかな？」

ゆっくりと、語りかける。普通に、ただゆっくりと話しているだけであるのに、その声に威圧されるのは何故なのか。

「・・・シエリエッタよ」

知らず、声が震えた。

「そう。シエリエッタ」

セインの瞳が輝く。

それは、獲物を捕らえて離さない、猛禽類の眼だ。

シエリエッタは口元をひきつらせたまま、無理に笑みを顔面に貼り付けた。

「君がこれ以上、僕らに手を出すというのなら、容赦しないよ」

声音も口調も、いつもと変わらず、おっとりど、どこか抜けたようであるのに、彼の全身から、青白い炎が立ち昇るような錯覚に捕らわれる。

「何を馬鹿な！一介の管理人風情が、ハンターに勝てるっても？！」

シエリエッタは、自分でも気が付かずに、必死になって叫んでいた。

「そうだ。僕は管理人だ。だけど、キヤルから聞かなかった？」
につこりと、笑う。

それはキヤルへ向けられるものとは違う、獰猛な笑み。

「セイン？」

己の変貌に、驚きと戸惑いで、わけが分からず動けなくなったキヤルを無理やり下がらせると、セインは一步、踏み出した。

「僕はね、この聖堂の管理人じゃないんだよ」

「ひっ」

シエリエッタは、小さく息を飲んだ。

「だから何？あの人を、そのガキが破滅に追いやったことに変わりはない！」

必死に叫ぶ。

ギラついた閃光が、セインを通り越してキヤルを襲った。

「針じゃないのか！」

柱の影から飛び出しざま、シェリエッタが放ったものは、弧を描いてキヤルの足を切り裂いた。

「きゃあ！」

予想していなかった動きに、キヤルは完全に対応することが出来なかった。かろうじて身をかわしたものの、それはスカートを切り裂いて皮膚まで達した。

「キヤル！」

「大丈夫、かすり傷よ」

裂き目から細くスカートを切り裂いて、すばやく止血する。

包帯代わりのその布からは、じわりと血がにじんだ。

「言っただけだ。これ以上僕らに手を出したら、容赦はしないと！」

信じられないような、低くしわがれた声が、セインの口から発せられた。

「僕は、この聖堂の管理人ではないと、言っただけだ！」

彼の色素の薄い長い髪が、まるで逆立つようだった。

ゆらりと、影が動く。

揺らめく炎の灯りに照らされて、それはまるで、呪われた様な。

「分からないのなら、教えてあげるよ」

一歩、前に出る。

先程のように叫ぶことも、本能的に防衛のために攻撃することも出来ず、蛇に睨まれたカエルのように、シェリエッタは指先も動かさず、声も出ない事に、ようやく気付く。

「セインというのは、僕の愛称だね」

また、一歩。

「僕の名はセイルーク・ロズド」

チャリ……

小石が、彼の足元から落ちた。

「遙かな昔、みんなは僕を、奇跡の大賢者と、そう呼んだよ」
カツ

セインの指が、岩に突き刺さった、朽ち果てかけた鉄の塊に触れた。

「ま・・・さか・・・！！」

シェリエッタの、驚きに満ちた掠れ声が響いた。

「その、まさかさ」

リイイイ・・・イ・・・ン

鈴の鳴るような、澄んだ音が震え、あたりは光に包まれる。

「あの時の・・・」

キヤルは、自分がセインロズドを引き抜いた瞬間を思い出した。

「あの時の光？」

シュリン！

綺麗な金属音が響き、光の中、セインがあの美しい聖剣を、岩から引き抜くのが見えた。

色素の薄い髪。

すらりとした長身の、長い手足。

その背中。

手に握るは伝説の聖なる剣。

大賢者セインロズド。

人の名が。

彼の名が、聖剣の名。

キヤルは涙があふれた。

「な、何よ！？なんであたし、泣いてるの？」

何故、彼が聖剣と共に在るのかなんて分からない。何故、彼の名が聖剣の名になったのかさえ、分からないのに。

ただ、この光が優しく、優しい怒りに溢れていて、寂しい怒りに満ち満ちていて。

キヤルには凝りもせず、再び溢れ出した涙を止めるすが見つ

からず、大きな青い瞳を両手で覆った。

「僕はね」

その静かな声に、顔を上げれば、震える右手に聖剣を握る、セインの背中があった。

柄の先端の、あの大きなアメジストが、セインの表情を、わずかに映し出していた。

透明な、澄んだ石に浮かぶセインは、自分の知っているどれでもなくて、キヤルの心臓は意思に反してまともに動いてくれない。

苦しさに、胸が詰まる。

光り輝く聖剣に、シェリエッタが照らし出された。

「僕は、こいつの管理人なんだよ」

搾り出されるような、苦しそうな。

そして歓喜に満ちた声だった。

「聖剣の管理人ですって？」

そんなことは有り得ない。

シェリエッタは、岩からいつの間にか降り立った、背の高い青年を睨んだ。

「その剣の管理人だというのなら、遙かな昔、あなたが大賢者と呼ばれていたというのなら！」

自分の目の前にいるのは何者か。

遙か彼方の古から、聖剣と共に在ったなどと、信じられるはずがない。

しかしこの圧倒的なプレッシャーは何なのか。

青年から発せられる威圧感、眼に見えない力でシェリエッタを縛り付ける。

「やっと見つけた、僕のマスターだ」

すなり、と、青年が剣を構えた。

彼女を傷つけるなど、許されないのだと、無言で知らしめる青年の瞳は、人のものとは思えない光を放っている。

それを、場違いなことに、シェリエッタは美しいと思った。

自分を殺すべく向けられた伝説の剣。
それを構えた人ではない男。
それらは、何故こんなにも美しいのか。

悲しい攻防

「あの人以外に、心動かされる男がいたなんてね・・・？」

こくり、と、知らずに唾を飲み込んだ。

どう考えても、この状況から逃げ出すことは不可能に思えた。

「それでも・・・！」

ゆっくりと、シェリエッタは目を瞑る。

「・・・？」

どういづつもりの行動が判断が付きかねて、セインは眉根をひそめる。

瞬間。

一気に見開かれたシェリエッタの瞳はギラリと異彩を放ち、同時に袖の中からしゅるりと手の中に落とした物を投げ飛ばした。

「！・・・キアルッ！」

弧を描いてセインから逃れたそれは、鈍色の線を引いてキアルを襲った。

ドン！

キアルの手に握られた小さな拳銃から発せられた弾丸は、襲い掛かる鈍色の何かを、見事に弾き飛ばした。

弾き飛ばされたそれは、ダーツの矢を金属で作ったような物だった。

羽に切り込みを入れることで変幻自在に飛ばすことが出来る、いわば羽付きの針だ。

「くっつ・・・！」

ぎりぎり唇を噛むシェリエッタに、キアルはフン、と鼻で笑ってみせる。

「私を誰だと思ってるの？」

ここに来て、キアルは開き直る事にした。

伝説の聖剣が目の前にあるのが、シェリエッタや、セインの正体

が何であろうが、自分はキャロット・ガラム。ゴールデン・ブラッディ・ローズなのだから。

迷う必要なんてどこにも無い。

そうだ、これはシエリーと自分の問題なのだ。セインに、手を出させては女が廃るというやつだ

「セイン！」

「な、何？」

銃口を、シエリエッタに向けたまま、キャルはにんまりと笑った。

「やっぱ、あんたは下がってv」

「えっ?! そんな、今更ハートマークつきで言われても?」

「い・い・か・ら！」

もう一丁の拳銃を、有無を言わず引き抜いて、セインへ一発。ちゅいん!

「うわわ、はい！」

足元に当たった銃弾に飛び上がって、セインは慌てて、キャルの側まで引き下がった。

「どうするつもり？」

少し怒ったようなセインの口ぶりに、黄金の血薔薇と呼ばれる少女は、ちらりと彼の顔を見やる。

「さあ?ただ、今ならあたし、大丈夫な気がするのよね」

視線をすぐにシエリエッタに戻して、不敵に笑う。

「自分の問題くらい、自分で片付けられる年齢には、なっているつもりよ?」

「・・・わかった」

その台詞に、キャルの意図を汲んで、セインは一步だけ下がる。

「それでも、君に何かあるようなら、僕は行動するよ?」

そう囁いたセインに、キャルはフン、と鼻を鳴らした。

「・・・あたし、それでも一応、ゴールデン・ブラッディ・ローズなんだけど?」

彼女は自信満々だ。

答えに満足して、セインはくつりと笑って、剣を下げる。この調子なら、助っ人はいらなさそうだ。

セインが手を出さないと気配で感じ取ったキヤルは、すうつ、と、思い切り息を吸い込んだ。

「シェリー！」

相変わらず柱の影で、身をかがめて息を潜めるシェリエッタに叫ぶ。

「貴女があんな熊みたいな大男とデキてたなんて驚きだったけど」
シェリエッタが、ギリリと、キヤルを睨む。

「だからって、私が貴女のターゲットになるいわれはないと思うのよね？」

「何を言っているの？貴女に捕まりさえしなければ！あの人は今も私の側にいてくれたのよ？！」

セインが下がったことで、何処か安堵したのか、威勢の良い返事が返ってくる。

「だから？」

「・・・え？」

冷たいキヤルの一瞥に、一瞬詰まる。

「だから何だっというの？」

「何ですって？」

シェリエッタの身体が、悔しさに震えだす。

「人の幸せを壊しておいて、何だっというの？！」

ドン！

柱からかすかに覗いたシェリエッタの頬を、銃弾が掠め、彼女は小さな悲鳴を漏らした。

傷口が、火傷でヒリリと傷む。

「人の幸せ？」

ヒヤリと、小さな少女は氷のような視線を投げかける。

その温度は、幼い手に握られた鉄の塊よりも冷たいように思えた。

「あの男が、どれ程の人たちの幸せを奪って来たか。・・・分かって言ってるの？」

以前、この町を訪れたとき。

半死半生の傷を負った、一人の青年をかき抱きながら、泣き崩れる老婆がいた。青年の怪我の理由は簡単で。

賞金首に逆らったから。

絵描きを目指していた青年は、一生、その手に筆を握れなくなつた。

「・・・それはっ」

「知っているのね？それは良かった」

この町に住んでいるシェリエッタが、知らないはずがなかった。他にもあるわ？」

全財産を奪われ、一家離散した家族。毎晩続く嫌がらせに耐え切れず、町を離れた老夫婦。

数え上げればキリがなかった。

「そんな男に、何故貴女のような人が惹かれたのか、理解に苦しむところだけれど・・・」

「それでも！あの人は寂しい人だった！だから！」

「・・・だから？」

愛したというならそれでもいい。だがしかし。

「・・・改心してくれたわ！ヤクザ紛いの事もやめて、私と二人で小さな店でも開こうかって、言ってくれたのよ！」

涙を溜めて、まるで恋人の過去の全ては、誰か他人の間違いだつたとも言つように、シェリエッタはわめき続ける。

「・・・だから何だつて言うの！」

キヤルの一喝が、シェリエッタの口を閉ざした。

「犯した罪の謝罪もなしで、償いもなしで、それで改心したというのなら、それは紛い物でしかないわ」

淡々と、無表情に、キヤルは言葉を紡ぐ。

「貴女がそれで幸せになったというのなら。貴女の幸せって、屑みたいなものね？」

そんな幸せは、それこそ在り得ない。

人を不幸にしておきながら、贖罪もなしで。犯した罪を忘れて、清算もせずに、自分達が幸せで良いというのなら。

そんなのはタダの妄想だ。

「貴女があの人でなしを愛したというのなら、それはかまわないわ。人それぞれに、好みってものがあるしね。」

そう言つて、微笑んだ。

それはそれは艶やかに。

十にも満たない子供であることなど、忘れ去ってしまうほどの、凶悪な微笑み。

シェリエッタは、噂が噂ではないことを、身を持って思い知る。輝ける黄金の髪。白く美しい肌。一度捕まったら逃れられない、蒼く聡明な瞳。

そしてその微笑みは、何人をも凍てつかせるほどに艶やかな。

「こ、れが……・……・ゴールデン・ブラッディ・ローズ……！」

冷や汗が背中を伝う。その感触の気持ち悪さに身震いする。

いや、少女に。ゴールデン・ブラッディ・ローズに捕らえられてしまった恐怖に、身震いしたのだ。

「う、あ……・……・あああああ……！！！」

それでも血走った眼で、己の恋人を奪った相手への憎しみだけで、シェリエッタは針を飛ばした。

「馬鹿な女」

寂しそうに呟くと、黄金の少女は、たて続けに二発の弾丸を放つ。

「きゃああああアッ……・……・！」

一発目は飛んでくる針を打ち砕き、二発目はシェリエッタの右腕を打ち抜いていた。

「うっ、う……・……・」

泣き呻いてくず折れるシェリエッタを、キヤルは見下ろす。

「私、貴女のこと、今でも大好きよ。オムレツ、美味しかった」

今日、彼女の店に行ったとき既に、シェリエッタはキヤルが賞金稼ぎだと、知っていたのだろうか。そうなのだとしたら、憎い相手に、あんな綺麗に笑いかけて、心の中で何を思っていたのだろうか。

キヤルは熱くなる臉をこらえて、すん、と、小さく鼻をすすった。

「どうするの？」

聖剣を下けたまま、セインがいつの間にか側に立っていた。

「賞金首でもないし、警備隊に・・・？」

心配そうなセインの瞳に、ひどい顔をした自分が映っている。

キヤルはまた泣きそうになって、誤魔化すようにふるふる、と、首を振った。

いろいろが色々で

「大丈夫。警備隊に突き出さなくたって、シェリーは二度とこんな真似、出来ないから」

ほっそりとした綺麗な腕を貫いた弾丸は、彼女に一生消えない傷を残した。今までのような鋭敏な動きは、リハビリをしても取り戻せないだろう。

「君は？」

「え？」

その声に顔を上げれば、まるで自分が苦しいような顔をして、セインがキヤルを見つめていた。

「君は、大丈夫？」

くしゃり、と、キヤルの顔が歪む。

「ば、馬鹿！こんな時にそんな事、言わないでよ！」

せつかく堪えていたのに、ボロボロと零れ落ち始めた涙は、もはや止めることが出来ない。i今日はいいかげん泣きすぎだ。

「何を言ってるの。泣きたい時には、泣けばいいんだよ」

しゃくり上げるキヤルを、セインは大きな腕で包み込む。

そんなことをされれば歯止めが利かなくなってしまうのではないか。盛大に声を上げて、小さなキヤルはセインにしがみついた。

年端も行かない少女の背中を、気の遠くなるような永い年月を生きて来た青年は、優しく撫でる。

「僕を呼び覚ましたのが、君で良かった」

腕の中にキヤルを抱きしめたまま、嬉しそうに、悲しそうに、微笑みながら呟いた。

キヤルが落ち着いてくると、ゆっくりと、ふわふわの金色をした柔らかな彼女の頭を撫で、セインは身体を離してシェリエッタを振り返った。

「じつとしていなさい」

そう言つて、セインは自分の服の裾を、剣の先で少し切り、手で引き裂いて即席の包帯を作ると、うずくまるシェリエッタの腕を掴んで手当てを始めた。

「な、んで・・・？」

驚きを隠せず、眼を見開いたままのシェリエッタに、セインは笑つてみせた。

「だって君、キヤルのこと、良く面倒見てくれたらしいじゃない？」

「何言つて・・・。貴方、馬鹿じゃないの？」

ぱつと、シェリエッタは腕をセインから取り戻す。

「私、貴方の大切な人の命を、奪おうとしたのよ？」

セインは困つたように頬を掻いた。

「でも、キヤルのこと、嫌いじゃないんでしょ？」

「！」

言われて、彼の背中の方こうで、鼻をすすりながら、涙に濡れた大きなサファイアの瞳を、心配そうにこちらに向けている少女に気付く。

「・・・しょうがないわね、私」

ふ、と、自嘲気味な笑みがこぼれる。

そうだ。

キヤルが、死に物狂いで探していた、あの黄金の血薔薇だと分かるまでは、ちよつと生意気な、ただの小さな女の子しか思つていなかった。

じゃじゃ馬で、可愛らしくて、妹みたいな。

そんな存在だったはずだ。

気付かなければ良かったのかもしれない。仕入れたゴールデン・ブラッディ・ローズの情報と、キヤルの容姿が、丸々共通していることなんか。

あの、馬鹿なロックガンド・トリオを役所に突き出したのが、金髪の少女だったことなんか、調べなければ良かった。

トリオを捕まえたのが、真夜中のこの聖堂だったなんて、つきとめてしまわなければ……。

「ごめんなさい……」

はらりと、シェリエッタの閉じた瞼から、涙がこぼれた。

シェリエッタの腕と肩の手当てを済ませ、セインは彼女の頭を優しくぽんぽん、と叩く。

「さて」

そう溜め息を混せて、立ちざまに、セインは聖堂の入り口を睨む。

「何か御用ですか？」

見れば、杖をついた、シルクハットに小洒落たタキシードが似合う白髪の紳士と、彼を気遣うように控えて立つ痩身の、やはりタキシードを、こちらばかりと着込んだ男が、ガス灯の明かりに照らされて、宵闇の中に佇んでいた。

「い、つの、間に？」

涙を拭きふき、キヤルが驚いて眼を見開く。

驚いたのはシェリエッタも同じだったらしい。息を飲むようにして入り口を見ていた。

「ほつほ、そう警戒なさいますな。大賢者様」

柔和に相貌を崩しながら、紳士が聖堂の、大理石の間に嵌め込まれた、幾何学模様のタイルの上に、コツリと杖の音を響かせた。

「あ、貴方は……」

「おお、また会ったな。キヤル」

聖堂内に足を踏み入れたことで、先程よりもはつきりと見て取れる、見覚えのある老人の顔に、キヤルはぽかんと口を開けた。

「オズワルド卿」

「え?!」

キヤルの呟きに、セインは驚いて、まじまじと紳士を見つめた。

「城と役所への報告が済んだのだな。お嬢さんの宿を聞いていなかったから、こちらへ来てみたのだが……」

ラオセナル・オズワルド卿は、キヤルを目線に捕らえて微笑んだ。

「正解だったようじゃな」

コツリ、コツリと、執事を従えて聖堂に入ってきて来ると、シルクハットを取って、キヤルの頭を軽く撫でた。

「話はまとまったの？」

「はは。まとまったと言おうか、まとまらないと言おうか」

キヤルは、聖堂に取り付ける扉の話が決まって、それを知らせに、ラオセナルが来てくれたのかと思ったのだが、卿は困ったような顔をするばかりだ。

「こちらは？」

ラオセナルは、セインと、床にしゃがみ込んだままのシェリエッタを交互に見やった。

「えつと、こちらはシェリエッタ。私の行きつけの喫茶店で働いているの」

「え？」

小さく驚愕の声を上げたのはシェリエッタだ。

オズワルド卿といえばこの国の名門中の名門の家の当主だ。彼の一声で、しがない女一人なぞ、簡単に永久追放に出来てしまえるのだろうに。

「彼女、怪我をしているの。オズワルド卿なら、きちんと手当てできるところ、知ってる？」

シェリエッタが何かを言うよりも早く、キヤルがまくし立てた。

「おお、それはいけないな。どれ、私の主治医がまだ館にいるはずだ。アルフォード」

ラオセナルは、自分の後ろに控える執事に声をかける。

「はい。お屋敷までお連れするのですね」

アルフォードはラオセナルが頷くのを見て取ると、座り込んだままのシェリエッタを、軽々と抱きかかえた。

「あ、あの、すみません。自分で歩けます」

驚いたシェリエッタが、慌ててアルフォードの腕から降りようともがいたが、年に似合わず、初老の執事は力強く、彼女はそのまま運ばれてしまう。

「外に、車を待たせてあるのでな。大丈夫、ちゃんと面倒を見るよ」

につこり微笑むラオセナルに、シェリエッタは首を振った。

本来なら、自分はここで捕らえられてしまってもいい人間なのだ。

「キヤル！」

思わず、少女の名を口にした。

「卿は良い人よ。安心していいわ」

的外れな返事が返ってきて、シェリエッタはもどかしさに涙が出そうになった。

「そうじゃなくて、一言くらい謝らせて！」

そう叫んだ彼女に、キヤルはふうわりと、子供らしい笑顔で応えた。

「言ったでしょ？私、シェリーのことが大好きだって」

その一言に、シェリエッタは唇を噛み締め、ただ、小さく謝罪の言葉を繰り返す。

セインは抱き抱えられて大人しくなったシェリエッタの側へ行く
と、うつむいて、顔を隠す彼女の頭を、はまるで子供をあやすように撫でた。

「貴方にも、私、酷いことをしたわ」

「あれくらい、どうってことないよ」

シェリエッタに傷つけられたセインの腕は、すでに血が止まっていた。

「ね？」

「・・・・・・」

腕を見せながら、セインはシェリエッタを安心させるように、にんまりと笑って見せた。

「君の傷は？」

キヤルが撃ち抜いたシェリーの腕を見つめた。弾丸で焼けて、さほど流血はないものの、感覚はもうほとんどないはずだ。

しかし、シェリーは首を振って答えた。

「いいの。私にハンターの資格はないもの。本当は、解っていたの。あの人のこと、町の人たちのこと」

ただ、恋焦がれるあまりに盲目になっていた。幸せになりたいのは、誰しも同じなのに、自分だけ幸せになろうとした。

「これは罰ね。キヤルの言うとおりなのよ」

「シェリー……」

「ごめんなさい。ありがとう……」

「ん。キヤルに、きちんと伝えておくよ」

小さく、セインに言っただつもりだったが、キヤルに言いたかったことも事実だった。それを、彼は汲んでくれたらしい。

シェリエッタはどう答えたらいいか迷った挙句、セインにつられて、ふ、と笑った。

抱えられながら、出口の階段を下りていくのを、キヤルもセインも見送った。

「何があつたかは存じ上げませんが、キャロット様には、貴女様の気持ちは、既に通じていると思われます」

硬い口調は、いかにも良家の執事らしかったが、オズワルド家の執事の心遣いに、車に乗せられながら、シェリーは泣き顔で頷いた。

シェリエッタが無事に車で屋敷へ送られるのを見届けると、ラオセナルはもう一度、キヤルへ向き直った。

「で、こちらの青年は？」

キヤルの側に、彼女を守るように立つ、背の高い、おっとりとした眼鏡の青年を見上げる。

「あ、僕は、……!」

自己紹介をしようとして、キヤルに足を踏まれ、セインは突然の

痛みに言葉を飲み込んだ。

何をするのかとキヤルを睨めば、逆に睨み返された。

「聞かれているのはあたし」

「は、ハイ」

気押されて、仕方なく眼鏡をずらして、涙を拭う。

聖剣と老紳士（前書き）

ちよつと更新遅くなりました。すみません。
パソコンが立ち上がったままフリーズします…。毎回ドキドキです。
もういい加減買い換えようと思います。

聖剣と老紳士

「・・・卿？」

「なんですか？」

「紹介しなきゃ、分からないっていうのは、どういうこと？」

「キアルが老紳士を見上げる。」

「キアル？」

「心配になったのはセインだ。」

「セインは？」

「へ？」

急に話題を振られて、戸惑う。紹介云々はどこへ行ったのか。

「貴方も、オズワルド卿を知らないなんてこと、ないわよね」

「えつとお・・・」

これは何かマズイ展開なのだろうか。

キアルの目は非常に据わっていて、もしかすると怒っているのかもしれない。

聖堂の管理は町と国が取り仕切っているはずだ。なぜここで自分が、聖堂の場所を提供しただけの、現オズワルド家当主を知っていなければならないのか。

「ごめん、僕の知っている人に、彼は少し似ているような気はするけれど、多分、僕は卿を知らない・・・と、思う」

とにかく謝りつつ、正直に答えた。

「で、しょうね」

盛大な溜め息を、キアルは腹の底から搾り出したようだった。

すると、くるとオズワルド卿へ振り向いて、腕組みをして非常に偉そうに、キアルは胸を張った。

「もう、お察しのことは思うけど。彼がセインよ」

オズワルド卿へ宣言するように、じらしたわりには、いとも簡潔に、セインを紹介した。

それに、ラオセナルは悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

もう、自分がセインを雇っているフリをしていたことが、キヤルにはバレてしまっている。たった一言、傍らの青年の名を尋ねただけで、理解できたらしい。

本当に、聡い子だと思う。

「ありがとう、キヤル」

そう言って、オズワルド卿は、セインへと向かって一步、進み出した。

「私の名はラオセナル・オズワルドと申します」

ぎよっとしたのはセインだ。見知らぬ老紳士に、いきなり頭を下げられたのだ。

「あ、あの？」

「大賢者さまとお見受け致します。我がオズワルド家の過去の過ちを、お詫びいたしたく」

さらに深々と頭を下げる老紳士に、セインは彼が何を言いたいのかが気が付いた。

遠い遠い昔を思い出す。

オズワルド家にとっても不名誉であろう出来事だ。

「貴方が現ご当主でいらっしゃるのなら、僕に頭を下げることはありませんか？」

頭を上げるように促しながら、セインはずれてもいない眼鏡を直す。

しかし、それでもラオセナルは、頭を下げたまま首を振るだけだった。

「我が一族は、貴方へ償いきれない無礼を働いたのですから、それは出来かねます」

「そんな。貴方に見てみたら、関係のないほど遠い昔の出来事のように」

ゆっくりと、ブルーグレーの瞳を細めてセインが微笑む。

その微笑が、とても懐かしんでいるような、それでいて、とても

悲しみを湛えているのを、キヤルはなんとなく気が付いた。

「貴方様が、これ程までに永き時を、あの岩に封印されていたのは我が一族の罪と、聞き及んでおります」

ラオセナルの声は震え、その一言ひとことは、まるで搾り出すかのようだった。

「・・・」

セインは無言で、ラオセナルの肩に手を置いて、頭を上げさせると、壮年の紳士に頷いて見せた。

それは、まるで、目の前の老人よりも、遥かに老齡な仕草だった。

「僕が、この数百年の時を、封印も解かずにしたのは、僕の心が弱かったからだ。貴方達のせいじゃない」

「セイン様・・・」

もう一度、ラオセナルは、セインへ頭を下げた。

「もう一つ。貴方様をこのような場所において、見世物のような扱いをさせてしまった原因は、ひとえに私の責任です。どうか、いかにようにも」

生真面目な紳士を見つめ、セインは大きく溜め息を吐いた。

「本当に、変なところが遺伝したようですね？」

その台詞に、思わずラオセナルは顔を上げた。

「は？」

ラオセナルのぽかんとした顔に、セインはくすくすと笑う。

「ローランドですよ。そっくりだ。そういう硬いところ」

ふっと、深呼吸するように溜め息をついた。

「ローランドは、本当に馬鹿がつくくらい頑固だね。そういうところ、良く似てるよ。でも、少し君のほうがハンサムかな？」

そう言って、目を細めて笑った。

キヤルには、その笑顔に見覚えがあった。伝説の聖剣を振るった最後の英雄、ローランドの話をしてくれたときと、同じ顔だった。

彼の話をするセインは、本当に嬉しそうだったのを思い出す。

ふと、キヤルはオズワルドの屋敷に忍び込んだときに通された、小さな部屋で見た、あの肖像画を思い出す。

「あれは、もしかして・・・？」

ローランドの後ろに立っていた、削られて、ぼやけてしまっていた人物。

背が高く、髪が長いことしか分からなくなってしまっていたが、あの人物は。

「セイン？」

ローランドが亡くなった後に、故意に削り取られてしまったという、その肖像画の青年は、セインでしか有り得なかった。

「そんなに、似ていますかな？」

「うん、似てる。僕がセインロズドだなんて、どうやって確信を持ったんだか。決め付けて譲らないわりに、案外当たっていたりするところなんかもね」

セインのその言葉に、ラオセナルがようやく頬の筋肉を緩めた。

「それは、キヤルから、貴方様の話を聞いておりましたからな」

ラオセナルは、視線をキヤルへ移した。

「キヤルから？」

それに倣って、セインもキヤルを見る。

「あ、あたしは、だからあんたがセインロズドだなんて知らなかったから、だからつまりホラ、えっと」

話題がいきなり自分に降りかかったものだから、キヤルはパタパタと両腕をせわしなく動かして、説明しようとしたが上手く行かない。

「昨夜、山賊が侵入したそうですな」

「そう、それ！」

助け舟を出したラオセナルに、キヤルは首を縦に大きく振った。

「ああ、間違えた貴族みたいな格好したキザったらしい間抜けな男が頭領の、変な三人組が来て、キヤルが捕まえたんだけど」

ロックガンド・トリオも、ひどい言われようだ。

「それで、危険な目にあわれたのですかな？」

「危険っていうのかなあ。キヤルが怒ってあっさり捕まえちゃったし」

顎に手を当てて考え込むセインに、キヤルが慌てて噛み付いた。

「聖剣を、岩ごと削り取られそうになったでしょ！」

「でも、僕がここににいるわけだし、実は持つて行かれても、そんなに関係がなかったんだよね」

にへら、と言われて、キヤルは一瞬真っ白になった。

「だからあんなに悠長にしていたのか！！！！」

ゲシ！

「いつつつつ！！！！」

足を思い切り踏まれて、セインは飛び上がった。

「あ、あんだね、いたい誰が何のためにオズワルド卿のお屋敷に不法侵入してまで直談判したと思ってるの！！！！」

足の小指の激痛に、しゃがみ込んだセインの耳元で、キヤルは思い切り怒鳴った。

「あー、さっき言いたそうにしていたのって、そういうことか。オズワルド卿に会って来たって言うから、何の話なのかと思っていたんだよね」

えへ、と、またもや気が抜けるような顔で笑われれば、キヤルの全身は、ぶるぶると怒りで震えだす。

「あんだがまた襲われたりしたら、きっと太刀打ちも出来ないでしようから、この聖堂モドキに雇つけて、夜は締め切ってもらって、あんたにはお屋敷で働いてもらうんだって、そこまで話は決まってたんだから！全部水の泡じゃない！」

「え？！そこまで決めてたの！？」

「そうよ！」

既に、今までとは全く違った種類の涙を大きな目に溜めてキヤルは全身で踏ん張った。そうしないと、眩暈で倒れ込みそうだったからだ。

本人の許可なしで、そこまで進めちゃうのはどうかと思うんだけど。

などと思ってみても、今言ったら確実に心臓の辺りを撃ち抜かれるので、セインは喉まで出かかったモノを、無理やり飲み込んだ。

「大体の話は、まあ、分かったけど」

とにかく話を元に戻す。

「僕はね、もう二度と、封印を解くつもりなんてなかったんだ。でも、今はこうしてここに立っている。それが、どういうことか分かるかい？ラオセナル」

はにかんだように、嬉しそうにセインは笑う。

それだけで、ラオセナルはセインの言わんとすることが、なんとなくだが掴めて、ふっと、肩の力を抜いた。

「分かりました。貴方様が満足しているのなら、私はもう何も言いますまい」

そう言って、シルクハットをひよい、と、小粋に被った。

「ちよと待つて。セインって、旅のお坊さんに封印されたんじゃないのかったの？」

二人の会話に、一人だけ置いてけぼりにされたようで、納得がいかないキヤルが、単純な疑問を口にした。

西の町で締め上げた、あの情報屋二人組みも、酒を飲み交わしながら言っていたように、聖剣・大賢者セインロズドは、あまりの強大な力に、旅の僧侶が封印したと、世間一般ではそんなオチになっている。

それなら、セインは逆に、常に封印を解いてもらいたがるものではないのだろうか。封印を解くつもりはなかったというのは、どういうことか。

普通なら、こんな岩の上に一人封印されて何十年、何百年も封印されるのは、是非とも御免こうむりたいところである。

オズワルド家

「そんな事になっているの？ いったい、いつからそんな話になったんだろう？ しょうがないなあ、歴史つてのはいいかげんだから」

心底困った、と言うような顔をして、セインが自分の顎をつまんで考え込んだ。

「え？ ち、違うの？」

自分も、聖剣は危険だからと僧侶に封印されたと思い込んでいた。

「キヤルも、そう聞いていたのかな？」

「うん。絵本でも、聞いた話でも、大体偉いお坊さんとか旅の僧侶に封印されたって事になっているもの」

ラオセナルに聞かれて、キヤルは頷いた。

やれやれ、と、老紳士は深い溜め息を吐いた。

「セイン様がこのような場所に、五百年も封印されていたのには、我が一族が関係するのだよ」

そう言つて、キヤルの頭を一度だけ、優しく撫でた。

「では、少し昔話をしようかね」

ラオセナルは聖堂の岩の下に腰掛けると、二人に、やはり腰掛けるように勧めた。

「オズワルド家はローランド様を初代当主とする家柄だということ、は、もう知っているね？」

ラオセナルに問われて、キヤルは頷いた。

「ローランド様は不思議な方だね。ご自分で鋤を持って畑を耕すのが趣味の、武人らしからぬ方だったそうだ」

領民からは慕われ、聖剣を友とし、卓越した剣技と智策で国に仕えた賢人だった。

だが、そんな彼にも、誤算があつた。

彼が病に臥せり、余命もわずかとなった頃、彼の子供達はセイン

ロズドの所有権を巡って醜い争いを始めてしまったのだ。

セインには自由でいてもらいたい。

そんな、死を間近に控えた老人の、小さな願いは、愚かな子供達によって打ち砕かれてしまった。

そのことに、何より胸を痛めたのは、セイン本人に他ならなかった。

幼い頃から知っているローランドの子供たちに、馬鹿ないがみ合いをさせているのは自分なのだと、セインは己を責め続けた。

やがて、聖剣の逃亡を恐れた彼らによって、屋敷の外へ出歩くことも許されなくなり、セインは一室に閉じ込められてしまう。

可愛がっていた子供達から受ける仕打ちにしては酷すぎるものだったが、彼は甘んじてそれを受け入れた。そんなことをしなくても、死の床に就いたローランドを見捨てることなど、セインには出来なかったのだが。

子供達がセインを閉じ込めたと知って、ローランドは激怒したが、病に伏せる老体には、どうすることも出来なかった。

兄弟達の争いを嘆き、セインの行く末をとても心配しながら、彼はついに、そのまま亡くなってしまった。

セインは嘆き悲しみ、せめて別れの挨拶をと嘆願したが、逃げる恐れがあるとして、葬儀にも出席できず、閉じ込められた部屋の窓から、葬列を見送った。

そうして、遺言に残されたセインロズドの開放も、遺族は無視した。

閉じ込めておいて、父親が死んだその日のうちに、セインの元へ入れ替わり立ち代りに部屋を訪ねて来ては、言い争いや怒号を繰り返す兄弟達のあさましさに、人という生き物に絶望し、彼らの争いの原因となった己の存在を否定したセインは、外に出られる場所として、唯一許された部屋の前の、高い塀に囲まれた小さな庭にあった大岩に、自分の分身である剣を突き立て、自らを封印した。

もう二度と、誰かが自分のために争ったり、嘆き悲しんだりしな

いように。こんなに苦しい思いをしないように。

オズワルド家はそれ以降、代々聖剣を抱えるこの大岩を守り続けることになる。

「これが、真実だよ」

語り終えて、老紳士はまた溜め息をついた。

「それで、五百年もこんなところに？」

キヤルはセインを見上げた。

ゆっくりと、彼は眼鏡の奥に隠れる色素の薄い瞳を伏せて頷いた。

「僕も、封印を解く気はなかったからね。あのまま死んでしまえばどんなに良いか、何度も思ったよ」

「・・・馬鹿ね」

ぼつりと、キヤルが呟いた。

それに、セインとラオセナルは顔を見合わせて、お互いに苦笑を交わす。

「キヤル、君を通じたあの部屋を、覚えているかね？」

ラオセナルに問われて、キヤルは頷いた。

「あの部屋が、セイン様の閉じ込められていた部屋なのだよ」

大きな瞳を、キヤルは更に見開いた。

質のいい調度品も、古くからそこにあるものだとい目で分かるような物だったけれど。

「もしかして、あの部屋にあったものの全部、セインが使っていたの？」

「はは、まさか！さすがに家具はいくらか替えてはいるがね。五百年も保てる家具は、そんなには存在しなからう。使える物は、なるべく修理して使っているがね」

それに驚いたのはセインだ。

「え！あの部屋、まだあるの？」

「いくらか増改築をしているとはいえ、屋敷は建てた当時のままなのは、分かっていると思っていましたか？」

「いや、そうだけど。古くなつたなあ、くらいで。あのレンガの塀も変わらないし。でも、僕の部屋はもうなくなっているものだと思うっていたよ」

何にでもこだわった、頑固な初代当主が建てた石と木の家は丈夫で、五百年たった今でも、多少の修繕だけで健在だ。

だが、過去の人々が過ごしてきた部屋は、その時代に合わせて様変わりをするものだろう。

セインは、自分の部屋もちろん、そういう時代の流れに合わせて消え去ってしまったているものだと思い込んでいた。

「あの部屋は、一族にとって特別な場所ですから。残してあります。テラスから、貴方の岩が、良く見えましたしな」

「・・・そう。うれしいよ。あの部屋は、ローランドが、初めて僕に贈ってくれた物だったから」

王から貰った土地に屋敷を建て、セインの功績に感謝したローランドが、彼のために作らせた部屋が、あの大きなテラスの部屋だった。

「貴方の使っておられた燭台や食器も、代々伝わっておりますよ」

「本当？あの燭台、気に入っていたんだよね」

懐かしそうにセインが目を細めた。

「で。これからどうするの？」

「え？」

見ればキヤルが両手を腰に当てて偉そうに踏ん反り返っている。

「どうしてだか解らないけど、とにかく封印は解かれてセインはここにこうしているわけだし」

今度は腕組みだ。

「あたしは直談判までしてオズワルド卿にあんたの世話を頼んだっていうのに、当事者がこんなだし」

「・・・こんなって」

それはちよつと酷すぎやしないか。そう思つたところで、口にしたって今のキヤルには負けるような気がする。

「あたしは、明日、明後日にでもこの町を出るつもりなの」

「え?! そうなの?」

そういう大事なことをどうして先に言わないのだろう。

「あんたの所在がハッキリしなきゃ、あたし安心して町を出られないじゃない。路頭に迷われちゃ夢見が悪すぎるもの」

ズビシ! っと、音がしたんじゃないかというような勢いで、小さな指を鼻先に突きつけられる。

「はは・・・」

だからどうしてそんなに偉そうなんだ君は。

セインは口に出来ないそんなことを、こっそり心の中で口にして、乾いた笑いを漏らした。

「私と、屋敷においでになられませぬか?」

ラオセナルが、手を差し伸べた。

セインはその温かそうな手の平を一瞬見つめ、しかし首を横に振った。

「ごめん。君の気持ちはうれしいんだけど。・・・それはやっぱり、出来そうにない」

確かに、彼の手をとって、あの懐かしい部屋で、ローランドの思い出と共に過ごすことが出来たら、どんなにか素晴らしいだろう。

けれどそれは。

「オズワルド家に始まったことじゃないんだ。僕は争いごとしか生まないから。現世にあつてはいけないモノだから」

オズワルド家の騒動だけではない。

いつの時代も、セインは争いの元凶となった。

セインロズドの名が知られ、広まれば広まるほど、比例するかのようには人々は聖剣の力を求め、争い、奪い合った。

「ローランドに出会ってから、彼が僕を人間扱いしてくれたおかげで、当時は聖剣だってあんまり知られずに済むようになっていたんだけどね」

それでも、結局争いは起こった。

それも、一番望まなかった形で。

「じゃあ、どうするの？」

睨むキヤルの大きな青い瞳は、セインの姿を捕らえて映し込む。

罵倒と決意と涙（前書き）

ノートパソコン買ったのはいいのですが、キーボードがカチャカチャ
いわずにぺたぺたなのがなんとも。指が彷徨います。精進精進。

罵倒と決意と涙

「そうだね。旅にでも出ようかな」

「・・・旅に出てどうするの」

「・・・さあ？」

「嘘つき」

「・・・ごめんね？」

長い永い眠りの中にいて、もう二度と目覚めることもなかったはずの自分が、今ここにこうして立っていられるのはキヤルのおかげだ。キヤルが、この聖堂に来てくれたからだ。

それはいつたい、どれ程の奇跡なのだろうか。

金色の少女は、暗闇に小さな光を灯してくれた。

「あんたつて、こんな時でも笑うのね」

セインロズドの伝説を知っていれば、おおよその見当はつく。

聖剣の持ち主だった人々が、聖剣を持つが故に被ったもの。彼らに共通する事柄は、故意であれ不本意であれ、争いに巻き込まれたということだ。

「愚かなことです」

ぽつりと、ラオセナルが呟いた。

遙か昔の、最後の自分の持ち主だった最高の友に、その姿がだぶる。

「旅に出て、適当なところを見つけたら、また自分を封印でもするつもりなんでしょう？」

「・・・やっぱり君は頭が良いなあ」

ちよつとした会話で、まだ全然幼いくせに、大人並みの解釈が出来る。

「君に何にもお返し出来ないままなのは、心苦しいんだけど」
ボカッ！

「痛！」

いきなり脛を蹴られて、セインは飛び上がった。

「な、何するのさ急に！」

「……………!!!」

「いた、痛た！キ、キヤル？」

ポカポカポカポカ

キヤルはセインを小さな拳で何度も叩く。

「キヤル、痛いよ？」

「痛いように殴ってるんだから、痛くて当たり前でしょ？！」

ボカン！

「あぐ！」

屈んだセインの顎に、キヤルの繰り出したアッパーがきれいに決まる。

「な、何するのさ！」

尻餅をついたまま、ずれた眼鏡を直して顎をさすり、涙眼でセインが訴える。

キヤルの行動が、何がなんだかわからない。

「あんたが馬鹿だからよ！」

「へ？」

「！」

自分の出した声が、あんまり間抜けだったのには、セインも気がついたが、しまったと思ううちにも、キヤルはみるみる真っ赤になっゆく。

「良く聞きなさいよこの馬鹿賢者！」

ガシツと胸元を掴まれて、急接近したキヤルの顔に、セインは頬が引きつった。

正直、恐い。

「封印なんて、そんなことをしたら、あんたまた同じことを繰り返すだけで進歩が全く無いじゃない！そんなんだから筋肉馬鹿どもに狙われんのよ！」

「き、筋肉馬鹿って……」

確かに、このディーナの町では、筋肉自慢がやたらに聖剣を引き抜きに訪れていたけれども。

「王族だろうが貴族だろうが筋肉だろうが、権力が欲しいとかお金が欲しいとか名声が欲しいとか、とにかくくだらない連中に狙われるのはあんたが阿呆だからだわ！」

「あ、阿呆って」

何百年ぶりに浴びせられた罵倒に、腹が立たない自分はやっぱり阿呆なのかと思いつつ。

セインはキヤルの瞳を見つめ返す。

まっすぐに見上げる瞳はどこまでも青く透明で。

まさに吸い込まれそうだった。

「またどこかしらに一人で、今までみたいにひっそりと隠れてみたところで、いずれは見つかるのよ。そうしたら、またこの町みたい観光地にされて、筋肉自慢どもに毎日毎日何回でも引っぱられるんだわ」

「う、それを言われると・・・」

目覚めてから今までの日常を思い出してみると、あまり気持ちのいいものではないことに、決意がちよつと挫ける。

よく飽きもしないものと、客観的に眺めていたものの、時々老人や結構な美人にも引っぱられることはあったが、『岩から引き抜かなければならない』ためか、明らかに力自慢のデカブツというか筋肉モリモリの汗臭そうな男に、よってたかつて引っぱられていた気がする。

どちらかと言わなくたって、触ってくれるのは、どう考えても女性の方が良い。

男として。

「あんたなんか、一生筋肉と付き合っていればいいんだわ！」

「うわあ、そりゃ勘弁してクダサイ」

そっという問題なのか？という疑問が一瞬湧いたが、一生がかかるとなると、大変笑えないことになる。

なにせ自分に一生という言葉が当てはまるのか。

「セインは、そうやって満足かもしれないけど。そんなことをしたって、結局セインは・・・」

聖剣と知られた瞬間に、奪い合いが始まるのだろう。

過去のように。

この町のように。

それは、あまりに悲しいことではないのだろうか。

キアルは急に、喉の奥が熱くなって、きゅっと唇を噛み締めた。

「キアル？」

覗き込むセインを、キツと睨み付けた。

「あんたあたしのモノ決定」

「・・・へ？」

また間の抜けた声を出してしまった。

今度も殴られるのかと思い、首をすくめて力一杯目を瞑って構えてみたが、衝撃はいつまでたってもやってこなかった。

おずおずと目を開けば。

大きな青い瞳。

金色のふわふわの髪。

頬を赤く染めた白い肌の。

綺麗な少女が、ただ自分を見つめている。

「キアル？」

うつむいて、ポツリと何かを呟いた。

「何？聞こえない」

「馬鹿って言ったのよこの超ド阿呆！！！！」

ボグウツ！

「ぐはあ！」

活きのいい頭突きが、顔面にクリティカルヒットした。

「馬鹿と阿呆のダブルですか」

ほっほっほ、と、楽しそうにラオセナルが笑っている。

「はな、鼻血が出ひやらどうひてくれふのひゃ？！」

真っ赤になった鼻は、折れたかと思われたが、何とか無事だった。

「ほほ、キヤルがセイン様を起こせた理由が解りますなあ」

「何で?!」

楽しそうなラオセナルに、思わずセインが鼻を押さえながら突っ込む。

「とにかく! あんたはこれからあたしと一緒によ!」

「そんなことをしたら、僕がセインロズドである以上、君にどんな危害が及ぶか解らないんだよ?」

「だからよ!」

今までの話を総合して、どうしたらキヤルと行動を共にする結論に至るのか。

セインは、自分が無くなってしまうか、それが出来なければ今までのように、何処かに隠れて封印するかした方が、穏やかに事が済むように思われた。

「少しは今の状況を打開しようとかどうにかしてやろうとか思わないのセインは?!」

「それが出来ればとつくの昔に!」

「うっさい! 黙んなさい! あたしを誰だと思っているの? これでも黄金の血薔薇の名にプライドくらい持つてるわ!」

また、泣き顔になり始めたキヤルに、セインは口をつぐんだ。

「セインはかわいそうだから。あたしが一緒にいてやろうって言うてんのよ。それくらい分かりなさいよ」

ほろほろと、少女の大きな青い瞳から、大粒の澄んだ涙が零れ落ちる。

今日、キヤルは何度も泣いたのに。

そのどの泣き顔よりも辛そうに見えるのは、気のせいなのだろうか。

静かに泣くキヤルに、ただどうしようもなくて佇むしかなかった。

思惑（前書き）

お待たせしました。久々のお休みで投稿できます。

思惑

「セイン様」

ラオセナルに呼ばれて、ふと振り向けば、遙かに年下の老紳士が微笑んでいた。

「我が家にお越しただけなのでしたなら、セインロズドの現所有者は、キャロット・ガルム嬢なのですから、共に行かれるのが自然でございましょう」

その言葉に触発されたのか。キャルがセインを押しつけて、すたと聖堂の隅にある用具入れの引き出しから、ごそごそと何かを引つ張り出した。

「キャル、それ・・・」

泣き濡れた臉を真つ赤にしたキャルが持ち出したのは、穴の開いた、あの青い絵本だった。

「あんたは、あたしとこれを探すの」

「・・・」

「ごしごしと、袖で涙を拭って、ずずつと鼻をすすって。

挑むようにキャルはセインを見上げる。

「セインはかわいそう過ぎるから、あたしがセインをエルドラドに連れて行ってあげる」

「・・・キャル・・・」

困ったような顔をしてみせると、少女はへへ、と、笑った。

涙でくしゃくしゃで、目は腫れて真つ赤だったけれど。

済んだ青空みたいな笑顔だった。

「僕は、このために、五百年も眠っていたのかな」

本当に、そんなわけはないのだろうけれど。

「それなら、眠った甲斐もあったというものでしょうな」

ラオセナルはニコニコと、相変わらずなんだか嬉しそうだ。でも。

「そうだね。きっと、そうなんだろうね」

随分昔に、神様なんて信じなくなったけれど。

奇跡なら、信じられる気がした。

キヤルの頭を撫でて、腕の中にすっぽりと納まる小さな身体を包み込む。

「あたしと来るの？来ないの？」

「・・・そうだね・・・」

まるで噛み付かんばかりの視線に、ふと微笑んだ。

傍らで、ラオセナルが、うんうん、と一人頷いている。

腕の中のキヤルに、答えようとして口を開きかけた。

瞬間。

けたたましい車のブレーキ音と、直後に、余程慌てているのか、

乱暴にドアを開け閉めする音がたて続けに響いた。

「ラオセナル様！」

叫び声が老紳士の名を呼んだ。

「アルフォード？」

常に冷静な彼らしからぬ切羽詰まった声音に、一同に緊張が走った。

「何があった!？」

聖堂の入り口に走り出れば、アルフォードが階段の上まで走り込んで来ていた。

「早くお車にお乗りを！」

「どうしたというのだ?!」

「訳は後程。それより、早くお屋敷へ！」

ただ事ならぬ様子に、とにかくアルフォードの指示通り、車に乗り込もうと階段を降り始めれば、夜の落とす暗い幕の中から、わらわらと男どもが、まるで砂糖に群がる蟻の群れのように湧き出した。

「馬鹿な！」

聖堂から漏れ出でる僅かな明かりと、オズワルド家所有のリムジンのライトに照らし出されたのは、見覚えのある鮮やかな群青色の紋章旗。

「何故、近衛隊が聖堂を武装して取り囲む?!」

紋章は、星を咥え、王冠を掲げた獅子と交差する剣。

それを描いたエンブレムを肩と胸に、銀糸で袖を縁取った、おそろいの群青色の服は戦闘服。

鎧でないだけまだまし。

王冠を掲げた獅子は国王を示す。

その獅子が星を咥え、それに交差した剣が加われば、紋章は国王直属の軍隊を示すことになる。

近衛隊が、それぞれに剣を構え、槍を構えて、聖堂をぐるりと囲んでいる。

オズワルド家の敷地の中にあるとはいえ、聖堂は屋敷の庭を守る壁を一部取り壊して、その壁と密着するように建てられている。

逃げ道は塞がれてしまった。

「ああ!間に合わなかったか！」

アルフォードが蒼白になって呻いた。

「城に使いに出ていた使用人が、知らせに来たのです。国王が聖剣を奪おうとしていると」

「馬鹿な!そんな筈は！」

ラオセナルが数々の証拠を並べ立てても、大賢者、聖剣セインロズドが本物だと信じなかった国王が、何故このような暴挙に出るのか。

「!.....おじさん?!」

キヤルが、近衛隊と違う服を着た男を見つけ、息を飲んだ。

それは、シエリエッタの想い人である賞金首と、三馬鹿ならぬ口ツクガンド・トリオを引き渡した、あの髭面の役人だった。

「何故、役人がここにいるの?」

髭面の他にも、近衛隊の群青に混じって、ハンター課の、作業服のような役人の制服がちらほらと混じっていた。

「見つかってしまいましたか」

まるで、照れ笑いを浮かべるかのように頭を掻いて進み出たのは、間違いもなく。

「どうしておじさんたちお役人が、この人たちと一緒にいるの？」

近衛隊はあくまで国王の私物だ。

役場の人間、つまりこの町の役場に勤める職員とは随分かけ離れているように思える。

「答えは簡単さ。オズワルド卿と、ゴールデン・ブラッディ・ローズ。貴女だよ」

「どういうことだ？」

にやにやと、下卑た笑いを顔に貼り付けた、初対面の役人に、セインは鋭い眼光を向ける。

「あ、あんたが、夜に聖堂を管理しているっていう、セインとかって奴かい？」

オズワルド卿の質問を無視して、役人は気圧されながら、それでもセインへ視線を向ける。

セインは何も答えずに、静かに佇むだけだ。

実は、そう見えるだけで、彼の剣を握る手に、しっかりと力が込められていくのが、小さくて目線が低いキヤルだけには分かった。

「！・・・その手にしているのは何だ？！」

セインに視線を向けたところで、気がついたのだろう。

髭面は、セインの握る、一振りの剣に、狂気の笑みを形作った。

「へへ、黄金の血薔薇が役所に来た次の日に、役場と王宮に、オズワルド卿が現れた時は驚いたもんさ。夜中に、ずっと前から聖堂を管理してる奴の話なんか、聞いた事がなかったからな」

普段なら小者なんぞ相手にしない黄金の血薔薇が、聖堂で、聖剣を盗もうとしていたからと、ロックガンド・トリオなどを捕らえて役場に突き出した。しかも聖堂には聞いた事もない管理人がいると

いう。

いずれはあの聖剣を、自分が手にするのだと、心密かに目論んでいたのは、この男も例外ではなかった。

岩を削り取って聖剣を盗むという手口は、自分も考えていたことだ。トリオが自分と同じことを考えていたと知って、驚いた。

そして、管理人という男の存在。

調べてみたが、オズワルド家からそんな管理人の申請は出ていなかった。

土地と岩、剣はオズワルド家のものだが、建物は町の所有物だ。いくらオズワルド家のものとはいえ、特定の人物、ましてや管理人を室内に置くとなれば申請が要る。

実際、ダイラオ老の申請は提出されている。真正を確かめようとしたところに、オズワルド卿の登場だ。

「これは怪しいってね。オズワルド家が何かを画策しているに違いないと、王宮に申し出たのさ」

「何だと?!」

まさか、自分の行為が、このように近衛隊まで引つ張り出すことになるとは思ってもみなかったラオセナルは、驚愕を隠せなかった。

「オズワルド家が、町にも王宮にも隠れて、こっそりと聖堂を監視させている理由は、ひとつしかないだろ？」

聖剣 大賢者・セインロズド。

「誰も彼もが抜くことができなかった剣が、実はもうとつくの昔に抜けていて、誰かが手にしているんじゃないかってね」

キヤルは心臓が飛び出るんじゃないかと思うくらいにドキツとしたが、幸いにもセインの影に隠れて気が付かれなかったらしい。

ちらりと、髭面はセインの手にする剣を、再び覗き見た。

「・・・仮に誰かが大賢者を抜いたとしよう。それで、どうして管理人が必要だと思うのだね？」

ラオセナルの問いに、男は鼻で笑った。

「オズワルド家の威信つてヤツがあるんじゃないのかい？家宝なん
だろ？何百年も守り続けて来たつてくらいなんだ。それが誰かに引
き抜かれて持ち去られたとしたら？」

「我が一族の沽券にでも関わると？ふん、片腹痛いわ」

ようするに、誰かに持ち去られ、聖剣が既にこの聖堂に存在しな
くなくなっており、今まで突き刺さっていたあのボロの鉄の塊はレプリ
カで、そのことがばれないように、管理人を置いていたというのだ。

「・・・だろうな。俺も、その線はナシだと思ってるよ」

髭をさすつて、また、男はにやりと笑った。

「では、何故このように大騒ぎをするのかね？」

「答えは簡単。聖剣を岩ごと削り取られる可能性が出た途端に、扉
を取り付けろつてんだ。聖剣は本物。それを、いよいよ王が認めた
つてことさ」

ならば。

「それくらいのこととて、国王が聖剣の存在を認めたと？」

「さあ？俺は近衛の皆さんを案内するように言われたのさ。ただ、
そのこのセインとかいう管理人は一緒に引き取らせてもらうがね？」

にやにやと笑いながら、髭面はセインを指差した。

「ちよつと！セインは関係ないじゃない！」

管理人というだけで話が通っているのだ。それが何故王宮に連れ
て行かれなければならないのか。

「さあ？ただ、お前さんが俺にくっちゃべったこいつの容貌と、城
にある肖像画に描かれた何だかって人物と、特徴がそっくりなんだ
とよ」

「・・・な？！」

たしかに、何百年も生きているセインだ。肖像画くらい残ってい
てもおかしくはないのだろう。

「僕の肖像画？そんな覚えはないんだけどな」

セインが、首をひねる。

様々な人物と関わったが、肖像画を残したのは、最後の主だったローランドのたつての希望で、記念にと描かせた二、三枚くらいのはずだ。

オズワルド家から、それらが流出したとでもいうのだろうか。それにしても、何故それが王宮にあるのか。

「知るかよ。それだったって何百年も昔の肖像画らしいがな。同一人物なワケねえだろうに。全く王様も物好きだぜ」

それには笑って返すしかなかった。

実際、セインは聖剣と共に、何百年も生きているのだから。

「・・・ふん。王様が、僕が存在に気がついたからって、そうそう簡単に従う理由もない」

にやりと、セインが、再び獰猛な笑みを顔に貼り付けた。

「セイン？」

いつも穏やかで、と、いうよりは、ボーっとしている感が強いセインの見せる、慣れない表情に、キヤルは戸惑った。

それに気付いてか否か。真偽は分からないが、セインは自分の顔が、キヤルから見えない位置に背け、三人を背後へ庇う形で前へ歩き出す。

「なんだ？おとなしく捕まろうつてのか？」

聖堂の階段を降り始めるセインを見止めて、髭をさする。

「思ったより、いい子ちゃんじゃねえか。ちよっと拍子抜けするぐれえだ」

「では、多少の抵抗は認めるということかな」

「何？」

最後の一段を降りたと同時に、セインは一息に地を蹴った。

色々と意外な来訪者

抵抗して来るとしたら、まずは黄金の血薔薇と呼ばれる女賞金稼ぎだろうと思っていた近衛隊だ。まさか真っ先に、一見細身で、武道とは関係のないような眼鏡をかけた男が、一人で反撃に出ると思ってもいなかった。

彼らは一瞬、完全に出遅れた。

群青の中に飛び込んで行くセインの、色素の薄い髪が、右に、左になびいた。

セインの握る聖剣の刃が、聖堂の明かりに照らされて煌くたびに、近衛隊の悲鳴が上がる。

国王自慢の精鋭は、まるで青い花びらを散らすかのように、バタバタと倒れてゆく。

「ほう、これはまた美しい・・・」

「長生きはするものですな」

「・・・何のん気なこと言ってるの!」

年寄りどもが、それこそ年寄りの余裕、とでもいうのか。やたらに楽しそうなのを、キヤルは一喝した。

銃で応戦しようにも、セインがあまりに臨機応変に動くものだから、どう狙いを定めたものか分からない。

と、思ったのだが。

キヤルはそのまま銃を下ろした。

助太刀も何もいらないうた。

囲まれたかと思えば走り出し、追いつく順に触るなり弾き飛ばすかと思えば自ら飛び込んで相手の剣を、自分の剣の切っ先に絡めて空へと飛ばす。

一斉に四方から掛かられば、同時に振り下ろされた剣を、刃を横にして受け止め、身体を低くしたままスイ、と、囲んだ近衛隊の隙間を縫ってかわし、支えをなくして中央へどつと崩れるのを尻目

に次の剣戟に動く。

近衛隊の動きは、完全に見切られていた。

どう表現したものか。

ひらり、ひらりと、その様は、まるで草原を舞う蝶だった。

呆れてしまうほどの圧倒的な強さに、キヤルはもう、ぽかんと口を開けて見守るしかない。

気がつけば、聖堂前の道の上に、青い山がぽつこりと出来上がっていた。

ところどころに、作業服が見えるのは、役所の人間のものだろう。

積み重なった人の山は、みんな仲良く気絶している。

セインは、最後の仕上げに、とばかり、あの髭面を、山のてっぺんに放り上げた。

「ふん。王族の元に行ったところで、ろくな事なんかないんだから」

それは、彼の最初の持ち主であったといわれる、この国最初の国王を、セインが毛嫌いしているかのようにキヤルに語って聞かせたのと、何か関係しているのだろうか。

「それは心外だな」

いきなり響いた声に、全員が一斉に振り向いた。

聖堂へと直進する大通りの向こうから、厚いクッションの鞍に、群青の腹帯を備えた斑毛の馬に跨った威丈夫が、自身を挟んで右側に槍を、左側に剣を携えた従者をそれぞれに従えて、宵闇の中、月明かりに照らされて佇んでいた。

「陛下！」

驚きに、目を見開いた老紳士の言葉に、一同は動揺した。

「陛下？」

聞き違いでなければこの人物は、国王ではないか。

国王が何故ここに？なんて、一瞬考えたキヤルだったが、近衛隊が聖堂を包囲しに来たくらいだ。考えなくたって答えは分かりきつ

ている。

「あなたが、王様？」

頭を下げて礼の形をとる老人に対して、セインはまるで、相手がなんだろうとかまわない素振りだ。

何百年も生きている彼には、いかな一国の王だとして、ヒヨっ子同然であるらしい。

「いかにも。予が現国王、ガンダルフ2世だ」

言いながら、国王は馬の上から尊大に、一同をねめつける。

じろじろと不躰な視線は、まるで品定めでもしているかのようだった。

キヤルは、急に腹が立つてきた。

国王だか何だか知らないけれど、この男がどんなにエライのかも知らないし。

この態度は腹が立つ。

大体において、偉そうにしている奴に限って本質はどうでもよかつたりするものだ。

「じゃあ、あなたが、この騒ぎの張本人だ？」

それは、セインも同じらしい。

聖剣を肩に担いで、空いた左手は腰に当て、一国の王に対するには、普通に考えなくとも、投げやりな態度だった。

「なるほど。よく似ておるわ」

馬上から、じろりとセインを睨む王の顔は、よく出来た仮面なのではないかと思うほど、表情が変わらない。

全くの無表情だ。

「城の肖像画に、よく似ているらしいですな」

ラオセナルが、きろりと王を見上げる。少々、声が低い。

「古い物だ。代々伝わる一品でな」

それを言ったら、セインは建国当時から存在しているのだから、どの時代のものなのかもはっきりしない。そもそも、彼が自身を封印したのは五百年も遠い昔の話だ。その時期に描かれた物だとして

も、余裕で“代々”伝えられるだろう。

「あ」

小さく、セインが息を飲んだ。

「覚えがあるの？」

こそりと、キャルがセインの袖裾を引っぱった。

「まいったなあ。もしかして・・・」

やはり声を小さくして、セインが眉尻をさげて、頭をかいた。

「覚えがあるのかな？」

セインの様子を、目ざとく観察していたのか。

ガンダルフ2世が、馬上から問いかける。

「さあ？僕は肖像画なんて物で自分の姿なんか後世に残したくもないし、そんなナルシストな趣味も無い」

大仰に肩を竦めて見せるセインに、国王はにやりと笑った。

「では、素晴らしい剣技を見せてもらった礼として、我が家にご招待しよう」

相変わらず、馬に跨ったままの国王を、全員が見上げた。

「・・・人に礼をとっている態度には、全然見えませんがね。国王陛下？」

さも呆れたというように、セインは斜めに構えて、ついでに片眉を上げ、わざとぼそりと呟いた。

「ふん？」

それに、ガンダルフ2世も、同じように片眉を上げて見せた。

「さすが、聖剣の管理者殿だな。ビクともせんか」

言うなり、ひらりと馬から飛び降りて、すたすたとセインの前まで歩いて来ると、ふいに、胸に右腕を当てて、深々と頭を下げた。

「数々の無礼、お許しを」

「！」

驚いたのはセインだけではない。キャルはもちろん、王が従えて来た二人の従者までが慌てている。

ラオセナルも、目を見開いていた。

「陛下、大人になられましたなあ」

「何を言う。一国を治める者が、礼節を軽んじてどうする」

「いやあ、頭を下げられるとは思ってもみませんでしたぞ」

「ちょ、ちよつと待った。二人とも、これどういう事？」

突き進む会話に、セインがストップをかけた。これでは話が見えてこないではないか。

「ああ、すみません。国王がご幼少のみぎり、私めが教師をさせていたでいたのですよ」

二人は主従の関係という以前に、師弟の仲という事か。

「じゃあ、何？二人ともグルだつて言うの？」

今度はキヤルが食って掛かった。

「ははは！誤解させてしまったか！」

ガンダルフ2世が、楽しそうに笑う。

「楽しくないわよ！」

「ああ、悪いね、黄金の血薔薇ちゃん」

「・・・えーつと」

キヤルの二つ名に、“ちゃん”付けをしたのはこの人が初めてではなからうか。

「今回のことは、ラオセナルにも内緒だったのだ。彼が大賢者を騙せるわけがないからね」

五百年もの長い時を、聖剣と共に過ごして来た一族だ。簡単にセインを裏切るわけがない上に。

「我らがまた、セイン様を陥れるようなことがあれば、一族は再び永き時を、汚名を着て過ごさねばなりますまいな」

聖剣を目の前にして生きて来たのだ。先祖の犯した罪を忘れるどころか、伝えに伝え、戒めとして来たオズワルド家である。セイン口ズドを裏切るなど、彼らには考えられないのだろう。

「予も、よく聞かされたものさ。耳にタコが出来るくらいにね」

「私の授業をサボって庭木の上で昼寝して、女官に悲鳴を上げさせたりするからです」

「ああ、そんなこともあったなあ」

あつはつはと、実に爽やかに笑う。

一見ガタイも良く、いわゆるロマンスグレーの、少し長めの頭髮は、いかにも王族風であるのに、なんというか、笑うと青年のようだった。

「簡単に言つと、予はここへ、確認に来ただけなのだよ」

キヤルのふわふわの頭を撫でながら、国王陛下は先程とは打って変わって、実に庶民的に微笑んだ。

国王が、ここまで一般的なのめいかなものか。

「ラオセナルの言う事にしても、聖剣なんかが実在して、しかも自分の屋敷の敷地内に存在しているなんて言われて、ハイそうですか、なんて、信じられるわけが無かるう？」

「・・・まあ、言われりゃそうだね」

いかに証拠品だと言つて、五百年前の人物の日記やら伝来の品やらを見せられても、実感の湧くものではない。

何せ相手は伝説のシロモノなのだ。

「しかし、今日になって役場から届けがあつてな」

立派な髭をなでつけながら、ガンダルフ2世は、なぞなぞを出す子供みたいにもつたいぶっておきながら、早く言いたそうにそわそわとしている。

「ああ、扉のこと？」

キヤルがさらりと言つと、国王陛下は眉を高く上げて驚いた。

「何故知つている!？」

「だって、提案したの、私だもの」

「ぬぬぬ、そうか、そうだったのか。役所の奴らめ」

聞けば、届けに書かれていたのは、聖堂に入った泥棒を、役人 גם 捕まえたかのような内容だったそうである。

「器の小さい・・・」

すぐばれる嘘を、役所というものは簡単につく。住民のためといつつ、税金を無駄遣いして旨い汁は吸うのだから、美味しい商売

だ。

勧誘っていうのはね

「国王も大変ね」

呆れてキヤルが言えば、王様は大仰に頷いてみせる。

「予なんかはまだ良い。役所を管轄している王宮の役所管理官は、まだ若いというのにすでに禿げ頭じゃ」

民のためと、市政を敷いてみたら、そこはだらけた役人の温床と化してしまった。今では民衆を代表しているのだからと、王宮のいう事なぞ、これっぽっちも聞きはしない。

その役人を、民衆が投票して決めているというのだから、また頭の痛い話だ。

「・・・まあ、私なんかは、その役所に世話になっている口だから、あんまり言えないけどね」

ヘッドハンターを管理している大元は、各地域の役場である。もちろん、企業や個人で賞金を懸けている場合も多いが。

パスの発行は役所だ。

「まあ、とにかく、扉を付けたいからと、管理官に申し立てて来てな。しかも、ラオセナルがなにやら、夜まで管理人を置いているというではないか。聞きもしないのにその管理人の情報まで寄こしおつたが、それがまたあやふやでなあ・・・」

それはそうだ。

役人の誰か一人でも、セインに会った事のある人物はいないのだから。

ヒゲ役人の言うところをまとめれば、キヤルの話を王宮に伝えたことになる。元々人からの伝い聞きなのだから、あやふやにもなるだろう。

「ま、その役所の言うところの、聖堂の管理人の見た目だけを聞けば、我が家の居間に置いてある肖像画にそっくりだったのだよ」

国王の家の居間。

それはいったいどんなものだ。

軽く突っ込みたかったが、話が中断してしまいそうで、キヤルは黙っていた。

「そうしたら、夕方になってラオセナルが予の執務室に尋ねて来おつてな。やっぱり、物騒だから、あのみょうちくりんな聖堂に、扉を付けろと言う」

これはもしや、と、いうことで、国王は聖剣の存在の有無を確かめると同時に、扱いに困った役所を懲らしめる策を思いついた。

「で、役所と結託したかのように見せかけて、わざわざ近衛隊まで引っ張り出したわけですか？」

「そう。もちろん、ここに倒れている近衛隊全員が、役人連中の本性を証言してくれるに違いあるまい？」

そのために、役所へは、国王から治安正常化のための討伐隊として、近衛隊を借り受けたから、好きに使ってよい、と、管理官に伝達までさせたのだ。

良く考えなくても、国王がおいそれと、自分の軍を貸し出すわけもなく、あまつさえ、好きに使って良いなんて、言うはずもない。

「じゃあ、この人たちは巻き添え食ってセインに倒されたっていうの？」

「あ、安心して。みんな峯打ちだから」

「当たり前よ！」

ガス！

「うぎゃっ」

勢い良く踏まれた足の親指を抱えて、セインが飛び跳ねた。

血が一滴も流れていないことから、誰一人、傷つけていないことは分かっていた。それでなくとも、セインに簡単に、人殺しが出来るとはキヤルには思えない。

「まあ、国のためだ。一石二鳥で納得してくれるだろうて」

中央を叩けば、他の地方も恐れをなして、しばらくはおとなしくなるだろう。

国王は、積み重なった自分の精鋭部隊を、複雑そうな目で見る。

「聖剣セイロズドが、まさか実在していたとはね」

聖剣を手に提げた、長身の青年を、感慨深げに見つめれば、むつと、睨み返されてしまった。

「眼鏡を除けば、その髪と瞳の色、携える剣までが、いつも見ている肖像画にそっくりだ」

あやふやな情報ではあったものの、背が高くてひよろりとした青年。髪は色素が薄く、瞳の色は青みがかったグレー。

本来なら、顔立ちや、髪型、決定的な身体情報も報告されるべきではあったが、オズワルド家からも、役所からも、あの聖堂に夜、管理人を置くなどという報告は、一切受けていないという王宮の管理官の話を聞けば、充分に怪しい。

まさか、と思いつつ、名高い賞金稼ぎのゴールドン・ブラッディ・ローズが絡んでいるという話を、諜報部員から仕入れれば、肖像画だろうが聖剣だろうがなんだろうが、悪者退治に乗り出さない手はなかった。

本当に、肖像画の人物とそっくりであれば、一見の価値もあるだろう。他人の空似でも。

「やだ。利用する気満々だったんだ」

腕を組んで怒ってみたものの、そんなにセインにそっくりだというのなら、居間に飾ってあるとかいう、その肖像画を是非見てみたい。

「ラオセナルから、セイロズドは人の姿を取ることできるなどと、御伽噺のようなことを、昔から聞かされていたが、目の前にしてもまだ夢のようだ」

「・・・その肖像画。タイトルはなんていうの？」

セインは、物珍しいものでも見る様にはしゃぐ国王を、うるさそうに見つめた。

「そう嫌わんでもよからう」

ちよっと傷ついた顔をしてみせたが、セインには効き目がないら

しい。

「タイトルはそのままさ。聖剣 大賢者・セインロズド。ああ、あと、なんだったか。小さくプレートにセイルーク・ロズドとも、書いてあった」

セインは盛大に溜め息をついた。

「アーシアルのやつめ」

「アーシアル？」

「王宮付きの画家だよ」

キヤルの問いかけに、額を押さえながら答えた。

「そう！まさに宮廷画家アーシアル作だ」

ガンダルフ2世が、感銘を受けたように瞳を輝かせた。

「ほほう、アーシアルですか。それはさぞかし、さぞかし」

ラオセナルまでが頷いている。

「あいつ、そんなに有名なの？」

「巨匠ですな」

またまた、セインは盛大に溜め息を吐いた。

「当時、僕を携えたローランドが、街中でアーシアルとすれ違ってね。ひと目で僕を気に入ったとか言っつて、絵を描かせろってうるさかったんだ」

そんなにセインは見栄えがいいようには思えないのだが。

「・・・剣の僕だよ」

「ああ」

納得したキヤルに、ちよつと傷つく。

「で、断り続けていたんだけど。どこかで観察していたんだろうね」

ある日、王宮に出向いたときに、セインの肖像画を見つけたのだそう。

「許可もなくモデルにされたんだ。しかも、剣だけじゃなくてこの姿の僕まで一緒に」

それは、ある意味光栄なことで、ある意味災難であったことだろ

う。

「あんた、変なのにモテるのね」

「余計なお世話です」

ムツとしたままのセインだ。

「さて、肖像画の出自も分かったことだし、改めて、王宮へご招待したいのだが」

仕切りなおしと、ガンダルフ2世が大きく息を吐きながら、一同を見回した。

「僕は断るよ」

あっさりと、セインが言う。

「建国時と違って遷都もしたし、五百年前と随分環境も変わったけれど、そもそも王宮は嫌いなんだ。傲慢な奴らの相手をする事ほど、疲れることはないからね」

「それは、残念」

王宮の場所と、その中に出入りする人々は変わっても、本質的なところは変わらないということか。

彼の持ち主だった人々は、その能力ゆえに、王宮に呼ばれることも多かったのかもしれない。その中で、セインはどれだけのものを見て来たものか。キヤルには計り知れなかった。

「では、これからどうするのかね？」

「さあ？」

あいまいに言葉を濁したセインの肩を、ガンダルフ2世が、勢い良くガツと掴んだ。

「な、なんっ？」

驚いたセインにかまわず、満面の笑みでぐいぐいと押されるものだから、セインはだんだん仰け反って、腰が痛くなった。

「そうか！決まっていらないのか！なら是非うちに来い！」

「・・・・・・はあ？」

何かと思えば。

「遠くから見ておったが、暗くてもそなたの技量は見て取れた。ま

ことに見事！大賢者が剣技までこのように見事とは思わなかった！
予の元で師範となってくれぬか？！」

きらきらと、国王の目は輝いている。なんと云うか。ワクワクしているのがやたらに伝わって来る。

「宝物を見つけた子供のようにされても、僕はさっき言ったとおり、王宮に行く気も無ければ仕える気もない！」

押されながら、セインも必死に叫んだ。

むう、と、ガンダルフ2世は唇を尖らせた。

いろんな我俣（前書き）

えー、今月末から来月中旬までプロバイダー変更のためネット使えなくなるので、ちょっぴりお休みします。たぶん。
で。次回で最終話です。
キリが悪くてすみません（・・・）

いろんな我侭

「どうしてもか？」

「拗ねて見せてもダメ。どうしても！」

きっぱり言い切ったセインの右腕を引っばって、キヤルが王様からセインを引き剥がした。

「そうよ！」

唐突に、キヤルが叫んだ。

「まだあんたの返事、聞いてなかったわ！」

「がばりと、セインにしがみ付く。」

「うわー、思い出しちゃったか」

「思い出さないでどうするの！逃がさないんだからね！」

「その時点で僕の意味は二の次じゃないか」

セインは、冷や汗をかきながら、ずれた眼鏡を直す。

このまま、うまくごまかしてしまおうと思っていたのに、国王のせいで、キヤルが思い出してしまった。

キヤルと一緒にエルドラドを探す。

それが出来たら、どんなにか。

「答えは二つ！YESかハイか！？」

「や、既に選択権がないわけだし・・・」

「あんたの意思を聞いているのよ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しばらく睨み合った後、セインは自分にしがみ付くキヤルの小さな手を、そっと外した。

一瞬、びくりと息を飲んだキヤルに、セインは微笑んだ。

「まったく、僕のマスターになる人たちってというのはどうしてこう、我侭な人ばかりなんだろうね？」

キヤルは大きく大きく、蒼い瞳を見開かせる。

「そういうことだから、僕のことは諦めてくれる？」

キヤルの頭を撫でながら、セインがガンダルフ2世を振り返った。満足気なその顔に、ガンダルフは盛大に溜め息を吐いた。

「・・・ラオセナル、お前の一族はこんな我侭なヤツを代々守ってきたのか？」

「セイン様を指差すものではございませんよ。それに、我侭は国王陛下の方が上級者かと思われませんが？」

につこりと、最上級の笑顔で言われてしまえば、国王も恩師には手が出せない。

額に手を当てて、大仰に空を仰いってしまった。

「それって・・・」

こくりと、セインは頷いた。

「よろしく？ キャロット」

ぱあっと、キヤルがひまわりのような笑顔になった。

その笑顔に、セインもつられて笑った。
が。

ガン！

「あいた！」

また、足を踏まれてセインが飛び上がった。

「我侭だけは余計よ！」

「うわあ、やっぱりやめようかな」

「あら？ 男に二言ってモノは存在しないんじゃないの？」

「うはー、いったい誰が法律化したのそれ」

「あ、そゆこと言うんなら、コレ、返してもらっわ」

キヤルが、いつの間に取り出したものやら、青い絵本を掲げてにんまり笑って見せた。

「うわわわ、それはナシ！」

二人のやり取りに、ぽかんとする国王と、ほほえましく頷くその臣下一名と、臣下の執事一名は、セインとキヤルの頭上高く、東の空が白んで行くのを、まぶしく見つめたのだった。

結局、キヤルとセインの二人は、シェリエッタの怪我が治るまで、デイーナに留まることになった。

シェリエッタの自業自得とはいえ、彼女に一生消えない傷を負わせてしまったのだからと、キヤルが気にしていたからだ。

滞在中、オズワルド家に世話になり、セインは懐かしい屋敷の内を楽しんだ。

多少改築や修繕で、新しくなっている場所とはいえ、五百年の長い歳月を保ち続けていられたのは単に、代々のオズワルド家の熱心な管理と、初代当主ローランドの堅実な屋敷の建て方だろう。

「あの時は随分と建築士に無理難問を降りかけていたけど、こうしてみると、やっぱりローランドの人柄が出てるね」

町を見渡せば、五百年以上の歴史を誇る建築物などはそうそう見当たらず、いかにこの屋敷が強固に創られたかが分かる。

屋敷内の改築されたところなどは、その時々 of 当主の性格が分かって、これもまた面白かった。

まあ、そのオズワルド家の屋敷よりも古い歴史を持つ建築物、いわゆる王城の持ち主である国王が、自ら毎日のように訪れては、セインを王宮仕えに誘うものだから、そのたびに接待をしなければならぬオズワルド家の人々も、セイン本人も、少々辟易していた。

「あの王城の外壁、爆破してやろうかしら」

などと物騒なことを、キヤルが口にするくらいだった。

しかしそれも。

「また、あの剣技を見てみたいものだ」

との国王の言葉に、

「僕はいつでもいいけど？」

とセインが答えたことで、回数が減った。王のお出かけに付き従う、近衛の希望者が減ったためだった。

国王の目の前で、国宝級の剣の達人と手合わせせられてはた

まらない。一度目の当たりになっているから尚更だ。

実はキヤルなら本当に爆薬を仕掛けるくらいやりそうなので、卿とセインが考じた策だったのだが。

「なんと情けない」

「あれだけ簡単に蹴散らかされては、仕方のない事でしょう。せいぜい鍛え直してやることですな」

国王とオズワルド卿の会話を聞いて、近衛たちはさらに自信を喪失したらしい。しっかりと、止めを刺すのを忘れない発言に、セインは苦笑いした。

中央役場の役人達は、といえば、王宮からの一斉検挙を受け、不正やら横領やら、税金の私物化等など、叩けば埃のように出てくるスキヤンダルに湧き、あの髭面の役人はもちろん、役場長を筆頭に、知事やら町長やら、ボロボロと逮捕、解任が続出。

近々、王宮の老中指揮下の元に、選挙が行われるらしい。

「いつそのこと、全部解体しちゃえば？」

とは、やっぱりキヤルの言だが、一部ではあるが、人道的な役場もあることから、建て直しを図るだけとなった。

「ま、しばらくは大人しくなるだろうし、市民もこれで、真剣に選挙に望むだろうさ」

自信があるような無いような、微妙な顔で国王がキヤルにそう言った。結局のところ、一般市民を信じるという事か。

そんな日々が、半月ほど続いただろうか。

澄み渡った空に、千切れ雲がぽっかり浮いて、さらに空を青く見せていた。

「お世話になりました。治療費は必ずお返しします」

腕を白い包帯で巻いたシェリエッタが、オズワルド家の大きな門の前で、ラオセナルとアルフォードに、深々と頭を下げた。

傷の理由を、町医者には話せないのです、結局オズワルド家お抱えの医者に見てもらうことになり、結果、シェリエッタはオズワルド家へ通う形となっていた。

それが、ようやく指先も動くようになり、後はリハビリだけとなったのだ。

いつものように門先まで見送りに来てくれた屋敷の主は、にこやかに微笑んだ。

「もう、大丈夫かね」

その、オズワルド卿の一言には、身体的に、心境的に。様々な意味が含まれていて、シェリエッタは顔を引き締めた。

「はい」

綺麗な、まっすぐな返事に、老紳士は満足して頷く。

「あー！」

「あれ？もう帰っちゃうの？」

大きな声と、とばけた声に、門の奥を覗けば、広い庭に古くからあるのだらう、屋敷の玄関まで続く、低いレンガ作りの、半分崩れて蔦が這った塀の間に、ひよろりと長い影と、ふわふわした小さな影が見え隠れした。

かと思えば、小さい方は勢い良く走って来る。

「もう大丈夫なの？痛くない？」

走って来たかと思えば一気にまくし立てた。

「ええ。もう大丈夫よ。あとはリハビリだけだから、自分ひとりで出来るだらうって」

出合った時と同じ、大きな瞳を見れば、嬉しそうに輝いた。

「そう、良かった！」

満面の笑みにつられて、シェリエッタも笑った。

聖剣の納めどころ（前書き）

ネット無事につながりました。

タイトルですが、文字通りでもあり、セインが納まった場所でもあり。

なにはともあれ。二人の出会い編最終話です。

聖剣の納めどころ

「なら、安心して旅に出られるわ」

キヤルが、ラオセナルを振り仰いだ。

「え？ずっと、このお屋敷にいるのではないの？」

屋敷にも、屋敷の使用人たちにも、キヤルがすっかりなじんでしまっているの、ここに留まるのだと思っていたシェリエッタは、驚いて、綺麗な指で口元を隠した。

「それをしてしまえば、ラオセナルに迷惑がかかるからね」

「大賢者様・・・」

キャロットの隣に立つセインに、シェリエッタは頭を下げて礼をとった。その行動を、セインはため息をついて見やった。

「それ、止めてって言ったのに」

「あ、すみません、でも・・・」

たしかに、今は役場のスキャンダルに注目が集まって、聖剣が消えたことは知られていないが、このままでは大きな騒ぎになるのは時間の問題だろう。聖剣の正体がバレようとバレなかつと、セインがオズワルド家に居ることは、あまり賢くないことのように思われた。

「今は扉を付けて、中に入れないように閉めてありますからな。ま、聖剣の偽物を作って、あの岩にくつつけてありますから、しばらくは大丈夫でしょうな」

ラオセナルが、にっこりと笑った。

「・・・いつの間にそんなことをしていたの」

「王とセイン様が、当家においでになった日の翌日ですか」

それは、あの聖堂に、近衛兵が押し寄せた翌日ではないか。

「手際がいいね」

セインが行儀悪く口笛を吹いて感心した。

「伊達に14の頃から当主はしておりますからの」

ウィンクする老紳士のその表情は、国王のあの子供っぽい笑顔に似ていた。

「・・・やっぱり師弟関係ってことか。こわいな・・・」

「何かおっしゃいましたかな？」

「いいや？なんでもないよ？」

ポツリと呟いたつもりが、ラオセナルの耳にはしっかり聞こえていたらしい。目を思いつきり逸らしてセインはごまかした。

「じゃあ、旅立つ前に、是非お店に寄って行ってね？」

シエリエッタがキヤルの小さな手を、動かせる左手でしっかりと握った。

「いいの？」

「ええ。もちろん！オムレツをご馳走するわ！」

「本当？やった！」

二人はくすくす笑い合う。

「オムレツかー。そういや、お腹がすいたな」

「昼食の準備は整ってございますよ」

言いながら、腹を押さえるセインに、アルフォードが笑って答える。

「そういえば」

キヤルが、唐突に思いついたのかセインをじっと見つめた。

「な、何？」

「セインロズドはどこへ行ったの？」

キヤルの疑問に、一同がハツとしたようにざわめいた。

「そういえば・・・」

あの騒動の後、屋敷に着いた時には、セインは既に剣を手にしていなかった。

あの岩には、現在、レプリカが刺さっているだけで、本物の姿はどこにも無い。しかし、セインが持ち歩いている姿も見ない。

「え？ここにあるよ？」

何を当たり前のことを聞くのか、といった風に、セインは自分の

胸を叩いた。

「・・・・・・は？」

「だから、ここ」

セインはもう一度、自分の胸を示す。

「・・・・・・？」

セインの胸が何だというのか。

まさか服の下に隠しているというわけでもあるまい。

「だあかあらあ・・・」

まだるっこしくなったのだろう。セインは手の平を合わせる形で、手と手の間に空間を作った。

すると。

ずぶ　ずぶり

その、何もないはずの空間に、どちらの手の平から発生したものが。澄んだ透明度の高い、あのエナジストが姿を現し、続いて持ち手の彫刻が現れ・・・。

セインのものであるう、血と体液とを滴らせ、セインの手の平から剣が生まれ出でて来る。

「ひっ・・・・」

「あ！シエリー！」

小さく悲鳴を上げて、気を失って倒れこむシエリエッタを、キャルが受け止めようとして下敷きになる。

「・・・・・・あれ？」

刀身まで完全に抜き出したセインロズドを手に、セインが頭をかいた。

「気絶させるつもりじゃなかったんだけどなあ」

「セイン様、女性にはちよつと度が過ぎるか・・・」

ラオセナルの顔色までが青ざめている。

「何やってんのよ！そんな気持ち悪いもの見せられたら倒れて当然

でしょ!？」

「えー? キャルは平気じゃないか」

「うつさい! そんなもの、早くしまっちなさい!」

怒鳴られて、セインは渋々元に戻す。

しかし、戻し方がまた最悪だ。

ずぶずぶずぶ

なんと、今度は自分の手の平に剣を刺してゆく。

セインの手の平からは血があふれ出す。

痛くはないのか、本人は平然としたものだが。

「はうううっ」

「あ! シェリー!」

気が付いたとたんに、今度はその光景を見てしまって、シェリエツタはまた気を失ってしまった。

「もう! セイン!」

「な、なんだよう」

セインロズドはアメジストの部分だけ残して、セインの手の平から生えている格好で、やっぱり見て気持ちのいいものじゃない。

すっかり自分の中に収めると、滴った血を、セインはぺろりと舐めた。

「あんた、それじゃあバケモノ呼ばわりされてもおかしくないわよ」

シェリエツタの下から、ラオセナルとアルフォードに助け起こされて、キャルが半眼で睨んだ。

「こういうものなんだからしょうがないじゃないか」

セインが反論する。

たしかに、これで聖剣に対する鞘が無かったことにも、聖剣そのものを今まで見かけなかったことにも説明が付く。

が、しかし。

予告もなくグロテスクな光景を見せられては、たまったものではない。

しかも、キヤルがセインの両手をひつたくるように引っぱって、自分の目線まで降ろさせて見てみれば、あれだけの血を流しておきながら、どこにも傷口らしいものは見当たらない。

「僕はセインロズドの鞘だから」

爽やかに、にっこりと微笑まれた。

セインがセインロズドの管理人、と言っていた訳も、抜き身の剣を収め、諫める役割があるのだと言われれば、そうなのかと納得はできるけれども。

「あんだ、シエリエッタが目を覚ますまでご飯抜き」

「えええ？！ひどいよキヤル！」

そんな身体でもしっかり腹が減る、こいつの体内構造はいつたいたうなっているのか。手の平が亜空間にでも繋がっていやしくないかと、ちよつと不安に思う。

「明日のお昼には町を出るわよ」

そう言って、セインの背中を勢い良く叩き、キヤルは屋敷の玄関目指して走ってゆく。

「え？」

気持ち悪がっていたのだから、嫌われたのかと思ったのに。

「何よ？一緒に行かないって言うならぶつ放すよ？」

途中で振り返って、スカートの裾に手をつ込むキヤルに、セインは慌てて首を振る。

「行きます！一緒に行かせていただきます！」

バケモノ呼ばわりしておいて、何の抵抗も無く自分の背中を叩く。拳句に、約束どおり、一緒に旅に出るという。

本当に、この少女は。

「ちゃんとシエリーを運びなさいよ！」

「はいはい」

怒鳴るキヤルに、セインは気を失ったシエリーを抱え、ラオセナルとアルフォードは、そんな二人のやり取りを微笑ましく見つめる。

午後には、とびきりのおいしいお茶を淹れて、屋敷中の皆で小さなお茶会を開こうと、こっそり相談する老紳士二人組だった。

キャロット・ガラム。

ふわふわの綿菓子のような金髪に、見事な碧眼の銃使いの少女。性格はやや自己中心的だが心根は優しいらしい、まだ8歳のヘッドハンター。

彼女と二人なら、きっと忙しくて、在るのかも分からない楽園を探す旅でも、絶望などしてられないに違いない。

セインは明日から始まる二人旅を楽しみに、彼女の元へと歩き出した。

FIN

聖剣の納めどころ（後書き）

本当はもうちょっと早くにUPできたんですが、38度を越える高熱を出し、これがもう、とにかく頭が猛烈に痛くてですね。医者には熱のせいで痛むんだと言われましたが、自分的には絶対頭が痛いから熱が出るんだとは思えないくらいでした。

終いには地震が発生したりと、ちょっと一週間ほどかなりしんどかったもので。

お届けが遅くなりました。すみません。

前作からほぼご感想を頂けていないので、もしかしたら皆さんもう飽きちゃって続きは別に読みたくないのかなあとかビクビクしつつ…。二人の出会いはこの感じでした。

いつ出そうとか思っていたんですが、2で海賊が王様といつの間に仲良くなってしまうていたので（本当にこの男は勝手に動いてくれます）思いのほかさっさと発表する羽目に。

感想いただければうれしいです。というか、3を書いても良いですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4080d/>

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！00

2010年10月8日11時15分発行